

# 日本方言研究会

## 第122回

### 研究発表会

#### 発表原稿集

#### ▼午前の部 9時20分～13時00分

- 1) 北琉球諸語における撥音化条件  
— 沖縄語首里方言と奄美語大和浜方言の比較から —…………… 加藤秋伊… 1
- 2) 肥筑壱岐語における松本的相補分布と日琉祖語の欠如動詞…………… 白鳥詩織… 9
- 3) 日琉諸語アクセント祖体系の外輪様仮説…………… 中村明裕…17
- 4) 『物類称呼』データベースについて…………… 大西拓一郎…25

#### ▼午後の部 14時00分～17時50分

- 5) カス型動詞派生の地域差と用法の多様性  
— 井川・女川における臨地調査を中心に —…………… 田形周造…33
- 6) 上方古典落語に使用されている打消しの助動詞の特徴  
— マクラ部と本題部を比較する —…………… 安井寿枝…41
- 7) 静岡方言の過去表現「ケ」の使用・理解  
— 性差・年代差・地域差から…………… 谷口ジョイ・柴田希隆・山岸祐己…49
- 8) 意味拡張と言語接触から見る「トル」…………… 鴨井修平…57

#### 付 録

- 方言関係新刊書目…………… 65
- 2025年度方言関係博士論文・修士論文・卒業論文一覧…………… 70
- お知らせ…………… 奥付

令和8(2026)年5月22日(金)9時20分から

立命館大学朱雀キャンパス

## 日本方言研究会会則

昭和 62 年 5 月 22 日 制定

平成 30 年 6 月 16 日 改定

1. 本会は日本方言研究会（Cercle dialectologique du Japon : Dialectological Circle of Japan）と称する。
2. 事務所は日本国内におく。その場所は別に定める。
3. 本会は、日本方言研究の促進と研究者相互の連絡を目的とする。
4. 本会の事業は、(1) 年 2 回の研究発表会の開催、(2) 機関誌の発行、(3) その他、とする。
5. 会員は、日本の方言研究に関心を持ち、本会の活動に積極的に参加するものとする。このうち、本会からの情報の提供を受ける個人・団体を連絡会員、機関誌を定期購読する個人・団体を購読会員とする。手続きは別に定める。
6. 役員としては、世話人 12 名をおく。人選は世話人会が行う。世話人の任期は 4 年とし、2 年ごとに半数を改選する。世話人の 2 期重任は認めない。ただし 2 年後の再任は妨げない。
7. 本会の運営のために次の委員会をおく。委員会は世話人と世話人外の委員で構成される。  
研究発表会委員会、編集委員会、総務委員会  
研究発表会委員会は研究発表会に関する業務、編集委員会は機関誌に関する業務、総務委員会は他の委員会の管掌する業務以外のすべての業務を担当する。委員の任期は 4 年とし、同一の委員会における 2 期重任は認めない。必要に応じ、委員会を臨時におくことができる。その構成と任期は別に定める。
8. 経費は、(1) 会費、(2) 寄付金その他、でまかなう。会費の額等は別に定める。
9. 会則の改定手続きは、その都度定める。

世話人 \*佐々木冠・椎名渉子・\*下地理則・白岩広行・\*竹田晃子・\*津田智史・\*中西太郎・  
林直樹・\*原田走一郎・日高水穂・又吉里美・松丸真大  
(\*は 2027 年 5 月まで、無印は 2029 年 5 月まで)

研究発表会委員 \*佐々木冠（委員長）・\*津田智史（副委員長）・\*川崎めぐみ・\*坂喜美佳・  
白岩広行・新永悠人・松倉昂平・松丸真大  
(\*は 2027 年 5 月まで、無印は 2029 年 5 月まで)

## 北琉球諸語における撥音化条件

—沖繩語首里方言と奄美語大和浜方言の比較から—

加藤 秋伊\*1

### 1 はじめに

琉球諸語では首里方言 ?Nma 「馬」、Nsu 「味噌」、miNdasjaN 「珍しい」、?aNzasa 「編笠」、hasaN 「鉄」のように撥音\*2が広く確認されている。その一方、近年の日琉諸語における比較言語学的な研究の進展の中で、琉球諸語において撥音はどのような条件で発生したのか、概略的な記述 (Thorpe 1983) や首里方言の語頭 (松森 2022) や与那国語 (中澤 2022) を除けば、ほとんどの方言で音環境の精査のもとで解明されていないことが課題として挙げられる。また琉球祖語 (PR) の再建に目を向けても、Thorpe (1983) は PR “\*peNgo” 「垢」、\*“peNge” 「逃げる」、\*“weNga” 「男」、\*“tu(to)Npa(i)” 「つば」\*3といったごくわずかな語に基づいて撥音を再建するなど不確かな部分がある。

本発表\*4では松森 (2022) を補う形で、北琉球諸語の沖繩語首里方言および奄美語大和浜方言の比較によって得られた通時的撥音化条件とその性質を手掛かりに北琉球諸語の撥音化についての見通しを示すことを目標とする。すなわち規則的な (音対応をもたらす完了した) 音変化ではなく、語彙拡散 (とみなしうる進行中の音変化) である撥音化があること、その上で並行変化であることを指摘する。

### 2 対象言語

#### 2.1 沖繩語首里方言

国立国語研究所 (2001) によれば、北琉球諸語沖繩語に属する首里方言は沖繩本島南部の首里で話される言語変種である。母音音素は/a, e, i, o, u/の短母音とそれに対応する長母音がある。短母音の e, o は周音素であり、長母音は通時的な母音連続の融合に由来する。子音音素は/p, b, t, d, c, (C), k, g, ?, s, (S), z, (Z), hw, m, n, r, w, j, Q, N/の子音 (括弧内は土族が教育で獲得する音素) がある。首里方言のアクセントは下降型 (A) と平板型 (BC) との二つに分かれる。

また、再建において比較的重要と思われる音変化を以下の表 1 に示す。なお、口蓋化については首里 ?ica 「イカ」のように \*ikV > icV が散発的に存在する。r の脱落については首里 hwiri 「へり」のように \*V[-back]ri > V[-back]ri の保持が散発的に存在する。

表1 首里方言・主要な音変化

PR	首里方言	例
*i, *e	i	*miti > mici 「道」、*te > tii 「手」
*{t, nd, k, ng}i, *{t, nd, k, ng}e	{c, z, c, z}i, {t, d, k, g}i	*kimo > cimú 「肝」、*ke > kii 「毛」
*u, *o	u	*usi > ?usi 「牛」、*oto > ?utu 「音」
*{t, nd, s, nz}u, *{t, nd, s, nz}o	{c, z, s, z}i, {t, d, s, z}u	*me <sup>ndu</sup> > mizi 「水」、*mi <sup>nzo</sup> > Nzu 「溝」
*V <sub>1</sub> V <sub>2</sub>	V <sub>3</sub> V <sub>3</sub>	*mape > mee 「前」、*sawo > soo 「竿」
*ri	i	*tori > tui 「鳥」

\*1 かつう しゅうい (東京大学大学院 M1) j2220228[ @ ]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

\*2 撥音: 音節末の鼻音、あるいはわたり音以外の子音が後続して語頭重子音をなす鼻音。撥音化: 母音脱落によって音節構造が再編成されモーラのみが保持されることで撥音を生じる現象。

\*3 本稿では先行研究で再建される語形を “\*CVCV” のように表記する。

\*4 本研究にあたって、ご指導・ご意見・ご教示いただいた小林正人先生、小西いずみ先生、白井聡子先生、白田理人先生に感謝を申し上げます。

## 2.2 奄美語大和浜方言

長田・須山・藤井(1980)によれば、北琉球諸語奄美語に属する大和浜方言は奄美大島中部西側の  
大和浜で話される言語変種である。母音音素は/a, e, i, ī, o, u/の短母音とそれに対応する長母音があ  
る。短母音の e や各長母音は通時的な母音連続の融合に由来する。子音音素は/p, b, t, T, d, c, C, k, x,  
g, ʔ, s, z, h, m, n, r, w, j, Q, N/の子音がある。T, C, x は無声有気破裂音、p, t, k は喉頭化無気破裂音で  
ある。服部(1954: 20–21)以来、大和浜方言の体系は一型アクセントとされている\*5。

また、再建において比較的重要と思われる音変化を以下の表2に示す。なお、\*o の狭母音化につ  
いては大和浜 kimo 「肝」のように散発的な保持とされるものが存在する。これについては音環境に  
一定の傾向があることが分かっている(松森: 1991)が、比較再建上の扱いには慎重を要する。

表2 大和浜方言・主要な音変化

PR	大和浜方言	例
*i, *e	i, ī	*miti > mici 「道」、*me > mī(ī) 「目」
*{t, <sup>n</sup> d, k}i, *{t, <sup>n</sup> d, k}e	{c, z, k}ci, {T, d, x}ī	*kimo > cimū 「肝」、*ke > xī(ī) 「毛」
*u, *o	u	*tu <sup>n</sup> bu > cību 「粒」、*tu <sup>n</sup> bo > cību 「壺」
*{t, <sup>n</sup> d, s, <sup>n</sup> z}u, *{t, <sup>n</sup> d, s, <sup>n</sup> z}o	{t, z, s, z}ī, {T, d, s, z}u	*sumi > sīmi 「隅」、*soko > sūxu 「底」
*V <sub>1</sub> V <sub>2</sub>	V <sub>3</sub> (V <sub>3</sub> )	*mape > mee 「前」、*mukapi > moxe 「向い」

## 3 音対応と得られる撥音化

公刊された資料に基づいて、首里方言か大和浜方言において撥音を含む同根語のペアを同定可能な  
限り全て収集して計 177 組を得た。欧米由来の外来語(首里 danpu 「ランプ」)や漢語の唇内・舌内鼻  
音韻尾に由来する撥音(首里 ʔakuiN 「悪縁」)は除外した。資料は国立国語研究所(2001)『沖縄語辞  
典』、長田・須山・藤井(1977)『奄美方言分類辞典上』、長田・須山・藤井(1980)『奄美方言分類辞典  
下』を用いた。

同根語ペアに含まれる音対応について、以下の基準：撥音含有語の所属方言/撥音の位置/対応する  
分節音/前後の分節音(の自然類)/で分類して、表3の(1-1)、(1-2)、...のような音対応を首里方言の撥  
音について計 29 組、大和浜方言の撥音について計 19 組を得た\*6。

表3 首里方言・語頭撥音・(S-1)「単独狭母音の語頭撥音化」の音対応

	環境	北琉球祖語	首里	大和浜	代表語	首里	大和浜
(1-1)	ʔ_zV	-*i-	-N-	-i-	「出る」	ʔNzijuN	ʔiziruri
(1-2)	ʔ_mV	-*u-	-N-	-u-	「膿」	ʔNmī	ʔumi
(1-3)	ʔ_bV	-*o-ʔ	-N-	-u-	「重い」	ʔNbusaN	ʔubusari
(1-4)	ʔ_na	-*u-ʔ	-N-	-o-	「鰻」	ʔNnazi	ʔonagi

\*5 上野(2023: 107)ではアクセントの対立があるとの指摘もある。ただし、いずれにしてもそれらで挙げられている数語を除いては管見の限り、アクセントを記述した文献は存在しない。発表者自身でも『大琉球語辞典』収録の音声データを praat で確認したが、有意義な観察は得られていない。

\*6 ただし、これらはあくまで得られた同根語ペアからのみ同定できる撥音化であり、当該方言の撥音化の全てを意味しない。また、より詳細な撥音化(有声障害音と鼻音など)に分けたり、条件(たとえば(S-3)や(S-4)は入力がか蓋化(破擦化)子音の時適用されない。また石崎(2016)でも指摘があるようにいくつかの撥音化は歯茎音前で顕著かもしれないが現在十分に検討できていない。)を加えることができる。音対応の一覧とそれぞれの分析は加藤(2026)で示されている。

その対応一つ一つについて解釈を行い、その対応を生じた撥音化を可能な限り一般化した環境条件でまとめ上げ、首里方言について計 7、大和浜方言について計 8 の撥音化を定式化した。以下の表 4 に首里方言、表 5 に大和浜方言の撥音化の概要を示す。以下の「規則的」「随意的」のラベルは首里方言においては「規則的」が撥音化語が例外的な非撥音化語の数を上回ること、「随意的」は下回ること、大和浜方言においては「規則的」が例外的な非撥音化語が存在しないこと、「随意的」がそれが存在すること、という観察的定義をひとまず設けておく。

表4 首里方言・撥音化

位置	撥音化	適用	例
語頭	「単独狭母音の語頭撥音化」 (S-1) V[+high] > ?N / #_C[+nasal]	規則的	*i <sup>n</sup> der- > ?NzijuN 「出る」
	「鼻音+狭母音の語頭撥音化」 (S-2) C[+nasal]V[+high] > N / #_CV[-high]	規則的	*mita > Nca 「土」
語中	「鼻音+狭母音の語中撥音化」 (S-3) C[+nasal]V[+high] > N / V_CV	随意的	*ami- <sup>n</sup> gasa > ?aNzasa 「編笠」
	「g+狭母音+rの語中撥音化」 (S-4) <sup>n</sup> gV[+high]r > N <sup>n</sup> gw / V_CV	規則的	*me <sup>n</sup> gur- > miNgwijuN 「巡る」
	「b, z, d+狭母音+rの語中撥音化」 (S-5) { <sup>n</sup> b, <sup>n</sup> z, <sup>n</sup> d}V[+high]r > N <sup>n</sup> d / V_CV	規則的	*ko <sup>n</sup> bura > kuNda 「こむら」
語末	「鼻音+狭母音の語末撥音化」 (S-6) C[+nasal]V[+high] > N / V_#	随意的	i{ <sup>n</sup> d, <sup>n</sup> z}umi > ?izuN 「泉」
	「riの語末撥音化」 (S-7) ri > N / V_#	随意的	*ka(p)eri > keeN 「-回」

表5 大和浜方言・撥音化

位置	撥音化	適用	例
語中	「鼻音+狭母音の語中撥音化」 (Y-1) C[+nasal]V[+high] > N / V_CV	随意的	*si <sup>n</sup> zuu-kuniti > sizjuukuNci 「49日」
	「r+狭母音の語中撥音化」 (Y-2) rV[+high] > N / V_C[+nasal]V	随意的	*me <sup>n</sup> du- <sup>n</sup> guruma > miziguNma 「水車」
	「長母音の語中撥音化」 (Y-3) V <sub>μμ</sub> > V <sub>μ</sub> N / _C[+nasal]V#	随意的	*taa <sup>n</sup> go > TaNgu 「手付き桶」
	「撥音の語中挿入」 (Y-4) C[+nasal]V > NC[+nasal]V / V_CV	随意的	*{n~m}i <sup>n</sup> gir- > miNgijuri 「握る」
	「CiCiの語中撥音化」 (Y-5) Ci > N / Ci_CV	随意的	*tutum- > ciNmuri 「包む」
語末	「鼻音+狭母音の語末撥音化」 (Y-6) C[+nasal]V[+high] > N / V_#	随意的	*mimi > miN 「耳」
	「riの撥音化」 (Y-7) ri > N / V_#	随意的	*sirari > siraN 「シロアリ」
	「長母音の語末撥音化」 (Y-8) V <sub>μμ</sub> > V <sub>μ</sub> N / _#	随意的	*pei <sup>n</sup> zei > hiiziN 「普段」

## 4 語彙拡散性と並行性

得られた観察について述べる。定式化した撥音化の多くは、適用条件は同定可能なのにも関わらず非撥音化語が多数確認され、それらを除外する要因が特定できなかった。これは中澤 (2022: 97–99) でも与那国語について同様の報告がある。また、(S-3) と (Y-1) のように両方言で同様の式で記述できる撥音化 (太字) がある。これも非撥音化語が多く、首里 ?aNzasa :: 大和浜 ?amigasa 「編笠」のように両方言で適用条件に合致する同根語ペアであっても適用の有無は必ずしも一致しない。

前者の事実について『沖繩語辞典』の XLSX ファイル化データから東京方言との比較によってサンプル数を確保して検討する。上記の (S-3) 「鼻音+狭母音の語中撥音化」 $C[+nasal]V[+high] > N / V\_CV$  と、それに対してより典型的に適用されると予測される入力、すなわち 3 音節語  $*CV\{m, n\}\{i, u\}CV$  および 4 音節語  $*CV\{m, n\}\{i, u\}CVCV$ ,  $*CVCV\{m, n\}\{i, u\}CV$  を考える。すると、3 音節語については撥音化語について十分なサンプルを得られなかったが\*7、4 音節語については\*8非撥音化 59 語 27 形態素と撥音化 25 語 16 形態素が得られた。仮に (S-3) が正しい定式化なのであれば、同根語判定が多少揺れるにしても撥音化語の 2 倍以上の非撥音化語の存在から規則的に完了した音変化とはみなせない。

下位の未観測条件が存在しないことを示すのは困難だが、主要な条件として例えば入力 (音節・位置) や前後の子音 (調音位置・方法)、共時アクセント型などを検討すると前後の母音に応じた偏りが比較的大きかった。以下の表 6 に示したように、(多少判定は揺れるだろうが) 前接音節主母音および後接音節主母音が非狭母音である場合、撥音化の適用率\*9はそれぞれ 45.2%、55.6% であり、狭母音である場合の 7.5%、4.3% より高い。

表6 4 音節語における前後母音の広さと撥音化適用率

前接音節主母音	非適用	適用	適用率	後接音節主母音	非適用	適用	適用率
非狭	23	19	45.2%	非狭	16	20	55.6%
狭	37	3	7.5%	狭	44	2	4.3%

後接音節主母音	複合語境界の位置	非適用	適用	適用率
非狭	前	15	14	48.3%
非狭	後ろ・なし	1	6	85.7%
狭	前	7	1	12.5%
狭	後ろ・なし	37	1	2.6%

注. 前接音節主母音の広さと適用の関連: Fisher の正確検定 (両側),  $p = 1.27 \times 10^{-4}$ 。後接音節主母音の広さと適用の関連: Fisher の正確検定 (両側),  $p = 1.54 \times 10^{-7}$ 。後接音節主母音高低 × 複合語境界位置の交互作用: 二項ロジスティック回帰,  $\beta = -3.53, p = .0586$ ; 尤度比検定,  $p = .0666$ 。

Fisher の正確検定 (両側) では、前接音節主母音の広さと適用の有無、後接音節主母音の広さと適

\*7 首里方言で  $CV\{m, n\}\{i, u\}CV$  の構造を持つ語 (A1)97 語、 $CVNVCV$  の構造を持つ語 (B1)156 語について、(A1)には  $PR *CV\{m, n\}\{i, u\}CV$  に由来する語 (A2) が少なくとも 12 語 10 形態素あるのに対して、(B1)には  $PR *CV\{m, n\}\{i, u\}CV$  に由来する語 (B2) の確例は見出せない。仮に首里 kaNtu 「髪 (karazi) の卑語」や首里 kaNzi 「たてがみ」が東京 kami- 「髪」に対応する形態素、首里 ?uNcu 「膿」が東京 umi- 「膿」に対応する形態素を含むと甘く見積もっても 3 語 2 形態素である。

\*8 首里方言で  $CV\{m, n\}\{i, u\}CVCV$  または  $CVCV\{m, n\}\{i, u\}CV$  構造を持つ語 (C1)206 語と  $CVNVCVCV$  または  $CVCVNVCV$  の構造を持つ語 (D1)216 語について、(C1)には  $PR *CV\{m, n\}\{i, u\}CVCV$  に由来する語 (C2) が少なくとも 59 語 27 形態素あるのに対して、(D1)には  $PR *CV\{m, n\}\{i, u\}CVCV$  に由来する語 (D2) は少なくとも 25 語 16 形態素ある。

\*9 独立性はやや損なわれるが、形態素単位では同一形態素において撥音化の揺れが見られ、また音環境の分析が不可能であるため、本稿では語を単位として集計する。

用の有無のいずれについても 5% 水準で有意な偏りが見られる。他方、この偏りが (S-2) 「鼻音＋狭母音の語頭撥音化」  $C[+nasal]V[+high] > N / \#\_CV[-high]$  の撥音化語が複合語後部要素であることによって生じた見かけ上のものであるかを確かめるため、後接音節主母音の広さと複合語境界の位置の交互作用を検討したが、有意な交互作用は認められなかった。したがって、後接音節主母音が非狭母音であることの効果を、複合語境界前という (S-2) 型環境の混入だけに還元することはできない。すなわち、前後母音の広さは撥音化の適用と関連していると言える。

しかし、非狭母音であっても撥音化の適用率が 50% 前後なのを踏まえれば、適用率を左右する条件であるのにも関わらず、なお規則的な撥音化条件とは見なせないということがわかる。

これらの事実は両方言の撥音化の多くは規則的音対応をもたらす完了した音変化ではなく、語彙拡散とみなしうる進行中の音変化であるという仮説<sup>\*10</sup>によって説明される。このもとでは前後の音節主母音が非狭母音である環境は撥音化の速度を促進する音声学的要因 (Labov 2020) と解釈されるが、これは中澤 (2022: 88–90) が広く日琉諸語の音変化の条件として見られるとする「拍の相対的な強さ」の概念<sup>\*11</sup>、またはその一例である (S-2) 「鼻音＋狭母音の語頭撥音化」  $C[+nasal]V[+high] > N / \#\_CV[-high]$  と整合する。

本発表ではさらに、(両方言間に限定されず) 北琉球諸語のレベルで同一条件の撥音化が (例えばこの条件環境は北琉球祖語において既に不安定であったという要因で) 並行変化として存在し、かつ語彙的に適用されるという仮説を与える。これは両方言で同様の式で記述できる撥音化が存在すること、非撥音化語が多いこと、両方言で適用条件に合致する同根語ペアであっても適用の有無は必ずしも一致しないことを説明するが、次節で示すように他にも説明できる観察がある。

## 5 Thorpe 説 PR\*N の再建に関わる語

琉球諸語の撥音史において、琉球祖語における撥音の再建には不確かな部分があることを最初に述べた。Thorpe (1983) が琉球祖語に \*N を再建する主な根拠は PR “\*peNgo” 「垢」、「\*weNga” 「男」、「\*tu(to)Npa(i)” 「つば」、「\*peNge” 「逃げる」といったごくわずかな語の語中環境において、各方言の同根語で N (や促音 Q、ゼロ Ø) で対応することであるように読み取れる。これについて、首里方言と大和浜方言の撥音化の分析をもとに、一つずつ検討していく。

“\*peNgo” 「垢」については、首里 hwiNgu :: 大和浜 hwigoro 「垢」が在証される。これは下の表 7 でその音対応を示すように (S-4) 「g + 狭母音 + r の語中撥音化」  ${}^n gV[+high]r > N{}^n gw / V\_CV$  によって説明され、北琉球祖語 \*pe<sup>n</sup>-guro 「瓮? -黒?」と再建できる<sup>\*12</sup>。

<sup>\*10</sup> 中澤 (2022: 97) では東京方言の母音無声化を引き合いに「随意規則」であるのと同じ性質ではないか、と婉曲的に表現している。

<sup>\*11</sup> 非 TBU となる拍を表す「弱」(上野 2003: 79–80) に部分的に由来する概念だが、中澤 (2022) はある母音の音韻的地位の低下 (非 TBU 化、脱落) を引き起こす隣接音節の母音との相対的な広さの違いとして使っていると思われる。

<sup>\*12</sup> 首里方言では Ngw ではなく Ng、大和浜方言では gur ではなく gor で対応していることについて、前者については首里方言において /wu/ と /u/ の対立がないからであると考えられ、後者については北琉球祖語では \*gur であって、首里方言ではそのまま撥音化を被り、大和浜方言において \*Co が隣接する環境 (Thorpe 1983: 36–37) によって \*peguro > \*pegoro > \*pigoro > 大和浜 hwigoro 「垢」のような逆行同化・保持が生じたと本稿では考えている。北琉球祖語 \*pe<sup>n</sup>-guro は国立国語研究所 (2001: 246)、長田ら (1980: 580–591) によって言及されてきたように九州方言ヘグロ「鍋の煤 (瓮-黒)」と対応する。

表7 「垢」音対応

	環境	北琉球祖語	首里	大和浜	代表語	首里	大和浜
(2-7)	V_i	*ngur-	-Ngw-	-gur-	「巡る」	miNgwijuN	mīgururi
(2-8)	V_o	*ngur-	-Ng-	-gor-	「垢」	hwiNgu	hwīgoro

“\*weNga”「男」については、首里 wikiga :: 大和浜 jeNga「男」が在証される。これは下の表8でその音対応を示すように再掲する (Y-5)「CiCi の語中撥音化」Ci > N / Ci\_CV によって説明され、北琉球祖語 \*weke-nga「男-子」と再建できる\*<sup>13</sup>。

表8 「男」音対応

	環境	北琉球祖語	首里	大和浜	代表語	首里	大和浜
(4-12)	*Cu_*mV	*tu-?	-Ci-	-N-	「包む」	CiCimuN	ciNmuri
(4-13)	*Ce_*ngV	*ke-?	-ki-	-N-	「男」	wikiga	jeNga

次に“\*tu(to)Npa(i)”「つば」と“\*peNge”「逃げる」については、\*CVCV > CVN すなわち、後続の同一の主母音を持つ音節が撥音化するような変化を北琉球諸語に並行的に存在したと仮定することで説明されると考える。この観点に立てば、(Y-5)「CiCi の語中撥音化」Ci > N / Ci\_CV は (CeCe と CuCu の?) 下位パターンであるように、これはかなり多くの例外的な撥音を含む語形を統一的に (そして自然に) 説明することができる。また、これは上述の「拍の相対的な強さ」(中澤 2022) によってこの撥音化を生じた機序も説明可能である。本稿では以下を「北琉球諸語」における並行的な撥音化として定式化する。

#### 「CV<sub>1</sub>CV<sub>1</sub> の語中撥音化」

(NR-1) CV<sub>1</sub> > N / CV<sub>1</sub>\_CV (散発的)

例) \*tu-tu-pai > 首里 CiNpee「つば」

#### 「CV<sub>1</sub>CV<sub>1</sub> の語末撥音化」

(NR-2) Co > N / Co\_# (狭母音化 (\*o > u) の前)

例) \*mono > 大和浜 muN「もの」

“\*tu(to)Npai”「つば」については、首里 CiNpee :: 大和浜 cizi「つば」が在証される。これは \*CuCu > CuN で説明され、少なくとも部分的には北琉球祖語 \*tu-tu(-pai)「唾-唾-?(吐き?)」と再建できる\*<sup>14</sup>。ここで確認しておきたいのは阿伝 tuNbee, 大和浜 cizi, 伊江島 tutupe, 首里 CiNpee のように北琉球諸語でも撥音化するかしないかは一定ではないことである。したがって、これは沖縄語や奄美語に並行的に存在する撥音化として説明される。

\*<sup>13</sup> 北琉球祖語 \*weke<sup>o</sup>ga は「兄弟」首里 wikii :: 大和浜 jeheri、「姉妹」首里 ?unai :: 大和浜 ?onari より、男性を表す形態素 \*weke-を、「孫」首里 ?Nmaga :: 大和浜 ?maga より子を表す形態素-\*nga を認められることによって「男-子」と解される。大和浜方言の過程では、首里 ?Nnazi :: 大和浜 ?onagi「鰻」について \*una<sup>o</sup>gi > 大和浜 ?onagi「鰻」が起きたように、大和浜 jeNga「男」においても \*Ca が後続する環境で逆行同化で i > e が起こっていると考えられる。また、大和浜方言における (wi >) we > je は OJ winaka :: 大和浜 jenaxa「田舎」、OJ wido :: 大和浜 jegawa「井戸」が傍証する。

\*<sup>14</sup> 北琉球諸語で同じ意味を持つ語について、首里 CiNpee :: 大和浜 cizi「つば」の他、Thorpe (1983) が用いた語形を合わせると奄美地域は志戸桶 cuQba~cuQbaə, 阿伝 tuNbee, 大和浜 cizi, 沖縄地域は奥 tuNpee, 辺土名 tuNfee, 伊江島 tutupe, 与那嶺 cuNpee, 那覇 ciNpee, 首里 CiNpee が在証される。これらは特に伊江島 tutupe より、北琉球祖語に \*tu-tu-pai「唾-唾-?(吐き?)」を再建さえすれば、(Y-5)「CiCi の語中撥音化」相当の撥音化で首里 CiNpee を導くことができる。大和浜 cizi は \*tu-tu「唾-唾」の重複連濁形として解釈できる。

“\*peNge”「逃げる」については、首里 hwiNgijuN :: 奄美 hiNgiruri 「逃げる」が在証される。これは \*CiCi > CiN によって説明され、北琉球祖語 \*piki-ni<sup>o</sup>ger- 「引き-逃げる」と再建できる<sup>\*15</sup>。

他にも \*CVCV の環境で首里方言や大和浜方言において不規則な撥音を生じている語は一定数存在する<sup>\*16</sup>。また、琉球諸語に関わらず東京 anata~aNta 「あなた」のように中央語にも（特に脱落を示すものを含めるなら多く）同様の变化を被った語が見られるのも傍証となる。

この節をまとめると、Thorpe(1983) が琉球祖語に \*N を再建する一つの根拠となる PR “\*peNgo” 「垢」、\*weNga 「男」、\*tu(to)Npa(i) 「つば」、\*peNge 「逃げる」はこれまで論じてきたように、それぞれ \*pe-n<sup>o</sup>guro 「垢」、\*weke-n<sup>o</sup>ga 「男」、\*tu-tu-pai 「つば」、\*piki-ni<sup>o</sup>ger- 「逃げる」で北琉球祖語に再建しうる。したがって、少なくともこれらに基づいて琉球祖語に \*N を再建する必要は薄い<sup>\*17\*18</sup> (祖語の仮定を減らす保守的な説明で代替可能である)。

だが、それ以上にこの節で強調したかったのは北琉球諸語では並行的に、そして語彙的に適用される撥音化が存在したと仮定することで不規則な対応を実際に在証される形態素と音変化を用いて保守的に(そして必然的に簡潔に) 解釈できるという点である。

<sup>\*15</sup> Thorpe(1983: 322–323) によれば、先琉球祖語の “\*pe-nuge-” 「経(へ)-逃げる」の動詞連続に由来すると考えている。まず後部要素については、首里 <sup>h</sup>wiNzijuN のように口蓋化しないことから後舌母音を考え、“\*nuge(r)-” 「逃げる」を想定しようだが、例えば首里 ciku 「菊」のように、i の直後で必ずしも口蓋化するわけではないと思われる(国立国語研究所 2001: 38) ため、これは単に \*ni<sup>o</sup>ger- 「逃げる」で十分だろう。次に前部要素の “\*pe-” 「経る」というのは移動の文脈にしても「通過」であるから、むしろ hwiNmagajuN 「強く曲がる(ひん曲がる)」などに見られる首里 hwiN- 「強意の動詞接頭辞」に関連づけた方がよい。これは首里 tuNzijuN 「飛び出す」が \*to<sup>o</sup>bi-i<sup>o</sup>de- > \*tuN-(?)Nzi > tuNzi- のような過程を経たと思われることを考えれば、\*pVN-ni<sup>o</sup>ger- > \*pVN-Nger- > \*pVNger > \*piNgir- 「ひん逃げる」のような連続撥音の単一化を十分想定できると思われるからである。

この時、東京 hiNmagaru 「(強く) 曲がる」などの東京 hiN- が「引き」に由来することを念頭におけば、さらに \*piki-ni<sup>o</sup>ger- 「引き逃げる」の再建ができる。これは同時に \*CiCi > CiN の仮定でもあるが、東京方言にも見られる動詞接頭辞を仮定する点で一般性(や意味的自然性)に優れた説明を与えることができる。

<sup>\*16</sup> 首里方言と大和浜方言で同根語ペアをなすものでは本文で挙げたもの以外に首里 munu~muN :: 大和浜 muN 「もの」、首里 tiuN :: 大和浜 TiuN 「手斧」の対応がまずある。また、大和浜方言の同根語は確認できないが首里 kuruN 「衣」がある。仲宗根(2001: 621)によれば、沖縄語(北部)と那嶺 taNgai~tamagai 「妖火(原文ママ)」、jaNmuci 「鳥もち(やまもち?)」の撥音は \*ma に由来するという。なお、首里方言では tamagai 「人魂」は撥音を含まないが jaNmuci 「鳥もち」は撥音を含む。このような \*Ca の撥音化は沖縄語(北部)と那嶺方言の撥音化を分類している仲宗根(2001)の中でも明らかに例外的なものであり、仮に正しいのであれば \*CaCa > CaN の撥音化である。与那嶺 jaNmuci 「鳥もち(やまもち?)」の根拠は不明だが仲宗根自身が当該方言話者である点で一考に値し、恐らくは首里 jaNbaru 「山原(沖縄北部の国頭地方)」がこの傍証となる。

<sup>\*17</sup> もちろん、他にも琉球諸語で撥音でしか対応しない語(例えば首里 ZaNnu?iju :: 大和浜 zaNnu?juu 「ジュゴン」)は相当数あり、それに基づいて積極的に撥音を再建することもできるため本節の議論はその点ではあまり意味がないだろうが、平子(2021: 76) のように先駆者の再建形を吟味して公開記録に残すことは多少なりとも有用だろう。

<sup>\*18</sup> Thorpe(1983) が \*N を再建するもう一つの根拠となっているのは、おそらく PR “\*tuzi” 「つむじ」が示唆するように東京方言との比較で得られる鼻音+狭母音が琉球祖語では欠けた形で再建せざるを得ない語があることである。これについて Thorpe(1983: 93) は “\*kaminari” 「雷」のように透明な複合語を除いては鼻音+狭母音が再建できない特定環境を琉球祖語において撥音の状態を経たうえで規則的に脱落した結果と考えている。

Thorpe(1983: 93) 自体の環境の指摘は本節の 4 語を加味したものであり、それを取り除くと琉球諸語内の比較ではあらゆる語中環境で鼻音+狭母音が再建できないことになる。ただ、実際は上代日本語でも三音節語の不透明な語の語中に鼻音+狭母音をもつものは二次的な -m{u, i}r- (< \*<sup>o</sup>b{i, u}r-) を除けばほとんど確認できないようにも思う。結局、問題になるのは上代日本語との比較で鼻音+狭母音の欠如した語であってそれは歯茎音の前(Jarosz(2018: 97)も指摘)に限られる。

ただ、歯茎音の前での撥音化および撥音の脱落は北琉球諸語の改新(狩俣 2018)である脱落音便や首里 ciNzi~cizi 「禁止」などいくつかの語からして北琉球祖語/諸語でも存在していただろう。南琉球諸語への借用の可能性を考えればこれに基づいて琉球祖語に \*N を再建する必要は現状薄い。

## 6 おわりに

本発表が提示する北琉球諸語の撥音化についての見通しは以下である。(A) 両方言の撥音化の一部は語彙拡散とみなしうる進行中の音変化である。(B) (両方言間に限定されず) 北琉球諸語のレベルで同一条件の撥音化が並行変化として存在し、かつ語彙拡散を示す。この条件環境は北琉球祖語において既に不安定であった可能性がある。

最後に、比較再建においてこれらが役に立ちうる場面として北琉球諸語の動詞終止形の起源論争について言及したい。先行研究群 (Chamberlain 1895, 服部 1959, 服部 1977, 服部 2018, 矢野 1977, 大湾 1937, 崎山 1972, 多和田 2019, 内間 1984) を一通り確認した発表者の見立てでは、祖形を初期服部説のように *\*wori* 「居り」として (服部 1959: 334–357)、疑問形を生じる音変化 (たとえば *\*rii > mi*) と奄美語の疑問文のモダリティ再分析を仮定することで、おそらく定説化した (?) 服部 (1977: 21–24) の *\*womu* 「居り-む (に相当)」系の再建より、同一の現象群を節約的に説明できる見込みがある。また、加えて *\*womu* 系の再建では非自明な幾つかの現象を説明、少なくとも関連づけることができる。

これは終止形では *\*ri > N* が起きたことになり、音対応について服部 (1959: 337–348) は問題に考えていたようである。そのような音対応を示す語はごくわずかに存在するのだが規則的ではない。しかし本発表の撥音化の解釈をとるなら、語彙拡散による分布として説明できる。また、奄美語で *\*ri > N* が語彙拡散的に観察されることは並行変化として沖縄語でも *\*ri > N* の存在を予測する。ここで仮定する語彙拡散は *\*wori* は直前が非狭母音であるゆえに他の環境に先んずる撥音化を予測するから特段に恣意的 (予測が乏しい) というわけではない。もちろん別稿で詳細な検討が必要だろうが、この見立てが正しければ *\*rii > mi* などを生じうるような PR *\*r* の音価を新しく見直すべきである可能性がある。

**【参考文献】**・Chamberlain, Basil Hall (1895) Essay in aid of a grammar and dictionary of the Luchuan language. Transactions of the Asiatic Society of Japan 23, Supplement. Yokohama: Kelly and Walsh.・服部四郎 (1954) 「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』2: 2–50.・服部四郎 (1959) 『日本語の系統』東京: 岩波書店.・服部四郎 (1977) 「琉球方言動詞“終止形”の通時的変化」『言語研究』72: 19–28.・服部四郎 (2018) 『日本祖語の再建』上野善道補注. 東京: 岩波書店.・矢野柁喜 (1977) 「琉球方言動詞活用体系の進展」『言語研究』72: 1–18.・Jarosz, Aleksandra (2018) Innovations, distribution gaps and mirror images: The reflexes of Proto-Ryukyuan close vowels in a post-nasal position. *Yearbook of the Poznań Linguistic Meeting* 4: 75–104.・国立国語研究所 (2001) 『沖縄語辞典』9刷, 東京: 財務省印刷局.・石崎博志 (2016) 「琉球語にみられる撥音と漢語語彙について」『沖縄文化』119: 52–63.・狩俣繁久 (2018) 「琉球語の動詞活用形の歴史的变化」国立国語研究所シンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」発表資料.・加藤秋伊 (2026) 「北琉球諸語における撥音化の比較言語学的分析—沖縄語首里方言と奄美語大浜方言に基づいて—」卒業論文, 東京大学.・Labov, William (2020) The regularity of regular sound change. *Language* 96(1): 42–59.・平子達也 (2021) 「『日本祖語について』と『日本祖語の再建』—その継承と発展のために—」林由華・衣畑智秀・木部暢子 (編) 『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』52–104. 東京: 開拓社.・松森晶子 (1991) 「奄美におけるオ段母音の変化について」『文学研究』6: 70–88.・松森晶子 (2022) 「沖縄語首里方言における音節構造の変化と北琉球祖語の母音の音価推定」『日本女子大学紀要文学部』71: 45–68.・長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 (編) (1977) 『奄美方言分類辞典上』東京: 笠間書院.・長田須磨・須山名保子・藤井美佐子 (編) (1980) 『奄美方言分類辞典下』東京: 笠間書院.・中澤光平 (2022) 「南琉球与那国方言の撥音化と喉頭化音化—音韻変化の条件と相対年代—」『東京大学言語学論集』44: 80–101.・仲宗根政善 (2001) 「与那嶺方言の撥音『ン』と促音『ッ』」井上史雄・小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎 (編) 『日本列島方言叢書 33 琉球方言考 6』602–626. 東京: ゆまに書房.・大湾政和 (1937) 『語調を中心とする琉球語の研究』沖縄県師範学校.・崎山理 (1972) 「琉球語動詞の通時的考察」外間守善 (編) 『沖縄文化論叢 第五巻 言語編』343–356. 東京: 平凡社.・Thorpe, Maner L. (1983) Ryukyuan language history. Ph.D. thesis, University of Southern California.・多和田真一郎 (2019) 『沖縄語動詞形態変化の歴史的研究』東京: 武蔵野書院.・内間直仁 (1984) 『琉球方言文法の研究』東京: 笠間書院.・上野善道 (2003) 「アクセントの体系と仕組み」上野善道 (編) 『朝倉日本語講座 3 音声・音韻』61–84. 東京: 朝倉書店.・上野善道 (2023) 「これまでの琉球方言アクセント研究とこれから: 特集多様化する日本語研究の現在」『國學院雑誌』19(11): 97–108. **【その他資料】**・「大琉球語辞典」<https://www.u-ryukyu.ac.jp/news/62768/> (琉球大学案内ページ) 2026年4月14日最終アクセス.・「本文篇 (沖縄首里方言辞典)」<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/okinawago/> (国立国語研究所データ配布ページ) 2025年12月31日最終アクセス.

# 肥筑壱岐語における松本的相補分布と日琉祖語の欠如動詞

白鳥 詩織<sup>1</sup>

## 1 はじめに

琉球諸語は九州に起源がある (Pellard 2015)。したがって、ある時期の九州地域には上代語よりも琉球諸語に系統的に近い言語が確実に存在した。しかし現代の九州諸語が琉球諸語と近縁な言語の直系の子孫であるかについては、まだ合意がない。本報告は、この仮説を論証するためのこれまでの試み (五十嵐 2022, 2024; 白鳥 2025a) に続く、新たな研究である。

本研究は、壱岐語の音韻対応を主要な考察対象とし、結論部においてはそれが属すると推定される肥筑語にも考察対象を広げる。肥筑語とは、白鳥 (2025a) に倣って、五十嵐 (2021) の S3 線以南 S4 線以北の日琉語諸変種 (対馬, 福岡県筑後地方, 佐賀県, 長崎県, 熊本県) として定義される日琉語の地域変種たちの総称である。壱岐語は、肥筑語に属すると推定される、長崎県壱岐市に分布する日琉語諸変種と定義する。系統言語学的な文脈を明示したいときは、壱岐語を肥筑壱岐語とも称する。

本研究が壱岐語を主たる対象とするのは、壱岐語は最も保守的でありながら最も資料が豊富な九州語変種の一つであって、今後の九州諸語の比較言語学的研究における欠かせない参照点となることが期待されるからである。壱岐語の歴史的地位に関する先行研究のなかでは、白鳥 (2025a) が、比較方法により上代語との間に有坂・池上法則を共有しないと主張したことが特に注目される。また、五十嵐 (2024) が壱岐語に上二段動詞に上代語にはない U 類と M 類の区別が残存すると指摘したことも挙げるべきである。

本報告は、壱岐語における音韻対応の傾向性 (ウ列が機能語末に生じやすく、オ列が内容語に生じやすいこと) が上代日本語において松本克己がかつて論じた相補分布と並行した音韻史的基盤により生じたとする仮説を提唱し、同様の通時変化が他の肥筑語変種にも生じた可能性があることを指摘する。

続く第2節は所謂「本土方言」の母音対応を説明するための新たな仮説である日琉祖語八母音仮説 (8VH) を導入し、8VH における「連体形」相当接尾辞の再建を導入する。第3節では上代語における松本的相補分布の形成過程に関する仮説を提唱する。第4節では上代語における変化と並行した肥筑壱岐語における松本的相補分布の形成を論ずる。第5節は結論であり肥筑柳川語及びそれ以外の肥筑語変種の音韻対応に関する展望を含む。

## 2 日琉祖語八母音仮説 (8VH)

日琉祖語六母音仮説 (6VH) とは、現在の日琉語比較言語学における通説である。6VH は、被覆形・露出形の交替を重母音によって説明する古典的な四母音仮説 (4VH) の \*a, \*o<sup>2</sup>, \*i, \*u を、琉球諸語との比較に基づいて補正して \*e, \*o<sub>1</sub> を追加したものである。しかし、先上代語に遡るとみられる上代語の特徴 (舌根調和の痕跡と有坂・池上法則) は、6VH と両立せず、矛盾した観察を示す (白鳥 2024b)。このため、白鳥は近年、6VH を発展的に解消する必要を主張してきた。

以上の状況を受けて白鳥 (2025b) に言及された対案が、日琉祖語八母音仮説 (8VH) である。日琉祖語を \*i \*ü \*ö \*ä : \*i \*u \*o \*a の八母音体系<sup>3</sup>に改訂すれば、日琉祖語の舌根調和 (早田 2017) と有坂・

<sup>1</sup> しらとり しおり (京都大学大学院生) shiratori.shiori.55y@st.kyoto-u.ac.jp

<sup>2</sup> 一般には 6VH \*a, \*o と表記する母音を、本報告では白鳥 (2024b, 2025a) と同じく、上代語の下付き数字による表記によって 6VH \*o<sub>2</sub>, \*o<sub>1</sub> と表記する。

<sup>3</sup> 8VH において、トレマは舌根前伸性を表す。ここで \*i は一般的な慣習とは逆に [i] を表すことに注意されたい。この表記上の慣習からの逸脱は、日琉祖語の舌根前伸性が索性接辞をなす可能性があり (白鳥 2026, forthcoming)、トレマに舌根前伸性を割り当てることによって超分節的な形態論の表記を容易にする意図による。

池上法則との間の矛盾（白鳥 2024b）を解消することができるみこみがある。現段階でもこの母音体系が 6VH \*au に関する諸問題を解消できる見込みがあることは認められる<sup>4</sup>（白鳥 2025b）。尚、以下の報告では調和対をなす母音の包括記号として \*A, \*I, \*U, \*O を使用する。

日琉祖語八母音仮説の視座において、白鳥（2025a）の論じた肥筑壱岐語における有坂の第一則と第二則の形成は次の表のごとく再解釈されることになる。

表 1. 8VH のもとでの有坂の第一・第二則の形成と上代語・壱岐語の音韻対応

(6VH)	8VH	上代語	先壱岐語	語例
*o <sub>2</sub> \$o <sub>2</sub>	*ä\$ä	> o <sub>2</sub> \$o <sub>2</sub>	> *o\$o	*mätä 【元】
*o <sub>2</sub> \$o <sub>1</sub>	*ä\$ö	> o <sub>2</sub> \$o <sub>2</sub>	> *o\$u	*ä-pö 【多い, 大きい】
*o <sub>1</sub> \$o <sub>2</sub>	*ö\$ä			有坂の第一則を形成
*o <sub>2</sub> \$u <sub>2</sub>	*ä#Cu	有坂の第二則を形成		*kä#pur- 【*霜が降る>凍る】

### 3 オ列乙類型機能語の二つの問題

本節では、本報告が解決をめざすところの、上代語においてオ列乙類をしめす機能語に関連する二つの問題を概観する。

第一の問題は、上代語の欠如動詞とその起源に関する問題である。Vovin (2020) は上代日本語の最も新しく包括的な記述文法であり、欧米の日琉語学者の間では広く参照されるものである。Vovin (2020: i.a. 459, 458-503)は、松本の相補分布が論ずるオ列乙類に終る機能形態素のうち繫辞的な機能を有するものを、欠如動詞の「連体形」相当の形式 (attributive) や (no<sub>2</sub>, ro<sub>2</sub>), 「連用形」相当の形式 (converb) として分析する (to<sub>2</sub>)。

表 2. Vovin (2020) が主張する上代語の欠如動詞（一部）のパラダイムと日琉祖語（8VH）の再建形

予想される語幹	*n-		*t-		*r-	
	'be'		'be'		'be'	
Vovin (2020) のグロス	8VH	上代語	8VH	上代語	8VH	上代語
converb	*n-I	> n-i	*t-A?	> tə	—	—
final	—	—	—	—	*r-O	> rə
attributive	*n-O	> n-ə	*t-O	> t-u	*r-O	> rə
subordinative converb	—	n-i-te	—	—	—	—
-ar- form	—	nar-	—	(EMJ tar-)	—	—

Vovin が欠如動詞であると分析する形態素のうち、少なくとも no<sub>2</sub>, ni(, nar-) については、同源である可能性が日本国内においても論ぜられる（野村 1993: 49）。Vovin の分析は少なくとも部分的になら国際的な合意を得られる見込みがある。しかし、この分析には奇妙な点がある。6VH の「連体形」相当接尾辞は \*-o であり（Pellard 2008: 137-144）、上代語は o<sub>1</sub> ~ u に反映すると予想される。6VH の射程ではこの異形態の起源を説明できないのである。一方、本報告がもとづく 8VH において、「連体形」相当

<sup>4</sup> 6VH \*au は、妥当でない。なぜなら、ア列との母音交替ならびに有坂・池上法則に基づいて消去法的に再建されたものにならなかった二重母音 4VH \*au が、内的再建の論拠が母音数を増やしたさいにも成立するかについての十分な検討なしに 6VH へと継承されたものだからである。\*au は合成語から検出できず、二重母音の音節核となるなど、単母音とみなすべき音韻論的性質を持つ。そして \*au を単母音 \*o に改訂することにより、愛媛県高縄半島周辺の諸言語・周防大島語・肥筑壱岐語の母音対応と、魏志東夷伝倭人条の不可解な母音分布を説明できる。以上を論じたのが白鳥（2025b）である。

接尾辞は \*-O と再建されるため (白鳥 2025b)<sup>5</sup>, その [+ATR] 形 \*-ö はオ列乙類に反映しうる。したがって、この問題を解決できる可能性がある。

第二の問題は、松本の相補分布とその起源に関する問題である。松本克己は 1973 年に、上代日本語においてオ列乙類は機能語に生じやすい (これを本稿ではオ列乙類型機能語と称する) 一方、オ列甲類は内容語に生じやすいことを指摘した (松本 1995: 59-61)。これが本報告の呼ぶところの**松本の相補分布**である。松本は優れた洞察に基づいた内的再建により、この相補分布がオ列の条件異音に由来すると予想したが、現在利用可能な証拠のもとでは松本の当初の仮説が支持できない。そのため、松本の相補分布の起源は不明なままである。

本報告の主眼は松本の相補分布の起源に関する仮説を 8VH の射程のもと提案することにある。この論証のさい有意義であるため、上代語の松本の相補分布のもとでオ列乙類をもつ側に分類される機能語を**オ列乙類型機能語**と呼ぶことにする。

#### 4 上代語における松本の相補分布の形成

本節では、8VH により松本の相補分布の起源と上代語の欠如動詞「連体形」に関する未解決問題を同時に解決する仮説を提案する。松本の相補分布は、8VH \*=O が被った次の通時変化を想定することにより説明できる。本表では繫辞 \*=tO を例示するが、他の欠如動詞も類似の変化を遂げたとみられる。

表 3. 8VH \*=tO における松本の相補分布の形成

8VH	① 接語化	② 有坂の第一則の形成	③ 類推的水平化	上代語
*...ä tō	*...ä=tō	> *...ä=tä		
*...ö tō	*...ö=tō			
*...ü tō	*...ü=tō		>> *...V=tä	> ...V=to <sub>2</sub>
*...√[-ATR] tō	*...√[-ATR]=to <sup>6</sup>			

第一段階で生じた接語化について説明する。舌根調和を呈さないオ列乙類型機能語であっても、アクセントが在証される日琉諸語では、オ列乙類型機能語の同源語の多くが接語として反映することが知られる。つまりオ列乙類型機能語の同源語の多くは単一の韻律語をなすことができず、通常、ホストに音韻的に依存する。中古日本語の声点資料の観察により、オ列乙類型機能語の多くが古くは韻律的に独立したものだったことを予想できるから (秋永 1991: 192-194)、これは初期の日琉語族の特徴ではない。したがって、多くのオ列乙類型機能語において、接語化は日琉語族の最終共通祖先よりもあとに生じたことになる。接語化が通時的に韻律レベルにおいて進行したと予想されるのならば、分節音レベルにおいても進行したと予想することは奇妙でない。つまり、先述 (→2 節) の通り、8VH では、\*ö が \*ä などの後続する環境でオ列乙類と合流する音法則 (→表 1) が仮定される。接語化に伴って有坂の第一則を形成させた音法則を日琉祖語の欠如動詞が経験すれば、「連体形」接尾辞の [+ATR] 形 \*-ö は、ホストの語末音節の環境によってオ列乙類に合流した異形態を有したと予想されることになる。

第三段階である類推的水平化は、舌根調和を呈する接語 (\*=nO など) においては ad hoc な仮定ではなく、舌根調和の再建の論理的な帰結である。日琉祖語に再建される舌根調和を継承する日琉語変種は在証されない。この原因は、舌根調和を呈する接語は、舌根調和の崩壊に伴って徐々に類推的水平化を経験し、最終的に消滅したことにある。日琉祖語に舌根調和を再建することは、必然的に、現存する

<sup>5</sup> 中近世の俗語、上代の一部の複合語の分析、ク語法の内的再建、東歌の対応などにもとづく (白鳥 2025b)。

<sup>6</sup> この段階ではまだ舌根調和が生産的だったとみることにより、類推的水平化の仮定を経済的にする。

接語のうち舌根調和を呈したものの全てに、少なくとも一回の類推的水平化を想定することを含意する。

以上の通時変化を仮定することにより、上代語における松本の相補分布の起源は日琉祖語の欠如動詞「連体形」相当形式の反映としてさしあたって<sup>7</sup>理解できることになる。

## 5 肥筑耆岐語における松本的相補分布とその起源

日琉諸語の早期言語を研究する際には、古代日本語の内的再建により姉妹言語の音韻論に関する予言力のある理論的枠組みを設定し、観察データに見られる不規則な特徴の由来を発見法的に推定してゆくアプローチをとることが経験的に有効である<sup>8</sup>。かかる日琉語比較言語学における古代日本語の内的再建の理不尽な有効性は、経験的な発見法のなかで知られるものにすぎないが、恐らく研究が十分に成熟すれば、ドリフトと古代日本語の強い保守性（あるいは日琉諸語の多数派が経験した著しい音韻論的な単純化）に基礎付けられた方法論として正当化できる。

前節で論じた松本の相補分布は、\*ä=Cö の接語化後、音変化によって、音韻的環境によって異形態が現れる段階を踏み、最終的に類推的水平化によって拡大したものであった。この通時的プロセスを次の表にみるごとく一般化することができる。この一般化された通時的プロセスによって生ずる機能語の音節の偏りを**松本的相補分布**と呼び、この松本的相補分布を形成する通時的プロセスのモデルを**松本的相補分布の形成**と呼ぶことにする。

表 4. 松本的相補分布の形成

8VH	① 接語化の進行	② 有坂・池上的な 母音共起制限の形成	③ 類推的水平化	子孫言語 X
*…ä Cö	> *…ä=Cö	> *…ä=Cx		
*…ö Cö	> *…ö=Cö	> *…ö=Cö		
*…ü Cö	> *…ü=Cö	> *…ü=Cö	>> *…V=Cx	> …V=Cx'
*…V[-ATR] Co	> *…V[-ATR]=Co	> *…V[-ATR]=Co		

これから本稿では松本的相補分布の存在を肥筑耆岐語において指摘し、松本的相補分布の形成を肥筑耆岐語のデータに適用するが、このモデルは ③ の変数を調整することによって他の九州語変種のデータに適用することも可能であると予想される。肥筑耆岐語には、松本的相補分布として理解できる機能語の音韻対応が見られる<sup>9</sup>。これらの形式には 21 世紀前葉の資料のなかには見られなくなるものがあ

<sup>7</sup> 松本の相補分布を完全に説明できたと誤解する陥穽には我々自身注意しなければならない。本稿の仮説はオ列乙類型機能語を説明するものであり、「オ列甲類型内容語」の頻出を惹起する通時的要因は不明なままである。

<sup>8</sup> 例として、John Kupchik による一連の上代東国語研究 (Kupchik 2023) は古代日本語の内的再建によって得られる母音体系 (6VH) によって観察データの不可解な特徴を予測して可能な限り整合的に解釈してゆく方法論をとったものである。また白鳥の 2024 年以來の日本諸語の歴史比較研究 (白鳥 2024a, 2025a) は概して上代語における有坂・池上法則の内的再建により姉妹言語における有坂・池上的な母音共起制限の存在を予測するモデルを構築し、それによって創設した仮説により不可解な観察データを説明する方法論をとるものである。

<sup>9</sup> 表 4 の音韻対応について山口は「無声化」なる術語を使用して説明しようとするため、一見して音声的な変異かにみえるが、山口の報告には矛盾がみられるため、信頼できない。例として、山口が「無声化」(山口 1975: 300) すると記述する属格の nu は、一方では「[.o] の「.u」となれるもの」(山口 1975: 20) とも記述され、また他方では「母音が転位し」(山口 1975: 16, i.a. 234) たものともされる。山口じしん「事実当たって見ると脱落との区別に迷はれる」(山口 1975: 18) と述べるこの音節の当時の音価はもはや知りえないが、何れにしても音声ではなく、母語話者にとって知覚しやすいはずの音素を記述したものとみるべきである。かかる奇妙な記述が生まれた原因としては、山口が当時の方言学のパラダイムに従って、自身の母語話者としての直観に反する、耆岐語の言語事実を反映しない分析枠組みを適用せざるを得なかったことを想定できる。山口は無声化について記述する章を「本稿は東條操先生の校閲を仰いで幾多の訂正を施すことを得た。先生に厚くお礼を申上げる」(山口 1975: 19) と述べて擱筆する。東條操は当時の方言学の第一人者であり、広い学識があったが、耆岐語に関する母語話者以上の知識があったことは想定できない。したがって当然の帰結として、その「校閲」は耆岐在住の山口麻太郎への私信の

り、また 20 世紀前葉の時点ですでに、共格 *tu*、所謂「準体助詞」*tu* は存在に言及されるが例がない。恐らく、明治維新以来の「標準語」変種との言語接触により、20 世紀前葉の時点で既に減少傾向にあったとみられる。

表 5. 肥筑壱岐語における松本的相補分布として理解できる音韻対応

上代語		20 世紀前葉 <sup>10</sup>		21 世紀前葉	
<b>no<sub>2</sub></b>	属格	<i>nu</i> ~N	山口 (1975: 234, 300)	<i>nu</i> ~N	鳥巢 (2019: 13, et passim)
<b>mo<sub>2</sub></b>	添加	<i>mu</i>	山口 (1975: 310)	<i>mu</i> ~N	鳥巢 (2019: 13, et passim)
		<i>domu</i> ~ <i>domo</i>	山口 (1975: 309-310)	<i>doN</i>	鳥巢 (2019: 71)
		<i>temu</i>	山口 (1975: 297)	—	
		<i>tomu</i>	山口 (1975: 95, 225)	—	
<b>to<sub>2</sub></b>	共格	<i>tu</i>	山口 (1975: 20, 217)	—	
<b>to<sub>2</sub></b>	繫辞	<i>to</i> ~ <i>tu</i> <sup>11</sup>	山口 (1975: 89)	—	
<b>to<sub>2</sub>mo</b>	逆接仮定条件	<i>tomu</i>	山口 (1975: 459) <sup>12</sup>	<i>toN</i>	鳥巢 (2019: 71)
<b>-do<sub>2</sub>mo<sub>2</sub></b>	複数	<i>-domu</i>	山口 (1975: 289)	—	

山口 (1975) における表 5 の音韻対応の出現は、最も用例の多い *nu*, *mu* については、先行する音節に条件付けられることを示せる。ここで、「標準語」変種と同形の形式は、全環境に現れる自由変異である。自由変異は言語形式が規則化する過渡期にみられることがあるため、「標準語」変種と同形の形式は、本来、音韻的要因のみに条件付けられた相補分布であったものが、比較的近年に、借用または「標準語」変種の威信のもとでの他の日本語変種との応化 (accommodation) にともなった平準化 (levelling) によって (Trudgill 2004: 84–85), すべての環境に出現しはじめたことを想定することができる。

表 6. 20 世紀壱岐語における所謂「助詞」の異形態

	環境 (用例は脚註)	備考
属格	<i>nu</i> /{a <sup>13</sup> , e(:) <sup>14</sup> , o(:) <sup>15</sup> —	
	<i>no</i> /全環境 (上記の環境でも自由変異)	本来は elsewhere condition か <sup>16</sup>

やり取りを通じて当時の音声学・音韻論に関する一般論を述べ文献を教示することに専ら終始したはずである。

<sup>10</sup> 山口 (1975) は山口麻太郎 (1891—1987) の 1930 年代に刊行された著作と執筆年代不明の遺稿をまとめたものである。

<sup>11</sup> 「「ツ」とも云ふ」(山口 1975: 89) との記述が見えるのみであり、専ら *to* のみが観察され、*tu* の用例は見いだせない。

<sup>12</sup> 諺に化石化した「二十三夜は人事ア云うとム横寝はするな」の一例のみを確認。

<sup>13</sup> 「アヌヤマ」(山口 1975: 16) 【あの山】。atama=*nu út-* (山口 1975: 30) 【頭痛がする】。ama=*nu sjagume* 【天邪鬼】(山口 1975: 31)。amaja=*nu híderi* 【雨が晴れたあとの強烈な日光】(山口 1975: 32) 「ターツ腹ヌ痛ウナツタ」(山口 1975: 210) 【だんだん腹が痛くなった】。「花ヌ咲エチヨル」(山口 1975: 358)。taka=*nu túme* 【ヒザラガイに似た貝】(山口 1975: 210) 他多数。

<sup>14</sup> 「毛ぬ」(山口 1975: 39) 【毛の】。「ムネヌヤクル」「ムネヌマクル」(山口 1975: 445) 【食べ物によって腹から胸にくるある種の感じ】。「ムネヌフトカ」(山口 1975: 445) 【心が大きい】。mune=*nu tóroka* (山口 1975: 256) 【心の働きが鈍い】。「実際世ノ中ア夢ヌゴタロー」(山口 1975: 362)。hae=*nu kaze* 【南風】(山口 1975: 103)。

<sup>15</sup> 「小便袋ヌ」(山口 1975: 181)。「ケントヌ悪カ」(山口 1975: 186) 【縁起が悪い】。「スツチョーヌカワ」(山口 1975: 204) 【すれっからし】。dó=*nu ma* 【船の船頭の居間】(山口 1975: 222)。「フナトーヌのぞき商売 (あきねー)」(山口 1975: 457) 多数。

<sup>16</sup> *no* が非狭母音に続く環境には「アヌ男ム」(山口 1975: 156) 「あの男と」(山口 1975: 91) のごとき交替例は見られるが、*nu* には見られない。

添加	mu /{a <sup>17</sup> , e(:) <sup>18</sup> , o(:) <sup>19</sup> , i <sup>20</sup> }__
	mo /全環境 (上記の環境でも自由変異) 本来は elsewhere condition か <sup>21</sup>

肥筑耆岐語では、\*ö が \*ä などに後続する環境で u に反映する (白鳥 2025a)<sup>22</sup>。したがって松本的相補分布の形成により、次表の如く先耆岐語<sup>23</sup>においてこの音韻対応が形成されたことを想定できる。

表 7. 8VH \*nO の肥筑耆岐語における松本的相補分布の形成

8VH (既に接語化 <sup>24</sup> )	②白鳥 (2025a) の有坂・池上のな母音共起制限の形成	③類推的水平化	先耆岐語
<b>*...V<sup>[-ATR]</sup>=no<sup>25</sup></b>			
*...ä=nö	> *...ä=n[ü] <sup>26</sup>	>> *...V=n[ü]	> *...V=nu
*...ö=nö			
*...i=nö			> *...V=no
*...ü=nö			

表 8. 8VH \*mō<sup>27</sup> の先耆岐語における松本的相補分布の形成

8VH	①接語化の進行	②白鳥 (2025a) の有坂・池上のな母音共起制限の形成	③類推的水平化	先耆岐語
<b>*...V<sup>[-ATR]</sup>mō</b>				
*...ä mō	> *...ä=mō	> *...ä=m[ü]	>> *...V=m[ü]	> *...V=mu
*...ö mō	> *...ö=mō			
*...i mō	> *...i=mō			> *...i=mu ~ =mo
*...ü mō	> *...ü=mō			> *...u=mo

## 6 結論

<sup>17</sup> 「長者又車ム借れば三年」(山口 1975: 464)。「糸切るひまム無カ」(山口 1975: 459)。「イツワトキワムナカ」(山口 1975: 406)【著しく時を逸する】ほか。

<sup>18</sup> 「カセガセムナカ」(山口 1975: 411)【手当たり次第の (< 柳柳も無い)】。「ヨンベム」(山口 1975: 359)【昨夜も】。イツテムノ一」(山口 1975: 406)【著しく時を逸して】。「ツバモツレムセヌ」(山口 1975: 218)【少しの淀みもなく話す】ほか多数。

<sup>19</sup> 「セワムセジョームナカ」【苦労知らず】(山口 1975: 425)。「アブラケムソーケムナカ」(山口 1975: 404)【脂がすっかり抜けた】。「ドウムコウム、ドウムコウムマー」(山口 1975: 384)【(感動詞)】; 日本大文典で dö のため開音。ほか多数。

<sup>20</sup> 「ゾンジムヨラン」(山口 1975: 426)【意外な】以外の例を見いだせない。「ヤクテムナカ」(山口 1975: 447)【しばしば (< 益体も無い)】も \*jakutai=mu > \*jakute:=mu を経由したか。

<sup>21</sup> mo には「頭ムヨカシ腕ム利ク」「頭ムヨシ、腕ムキク」(山口 1975: 297)のごとき交替例は見られるが、mu には見られない。

<sup>22</sup> これは現段階では無条件変化と判断するが、将来的に対応を示す語彙の全容が判明し類型が整理されると、強勢ないシフォネーションと関連することが立証される可能性がある (白鳥 2025a2)。

<sup>23</sup> 本稿において先耆岐語は、白鳥 (2025a) と同じく、5 母音体系として再建する。

<sup>24</sup> 日琉祖語の \*nO は舌根調和を呈したと予想されるため (早田 2017: 39-40)、祖語の段階ですでにホストに音韻的に依存した接語だったはずである。

<sup>25</sup> 興味深いことに、所謂「魏志倭人伝」の傍国名には (< 奴) 字に終るものが極めて多い。白鳥 (2025b) の論じた音韻対応が正しければ、これらは、日琉祖語の属格の [-ATR] 形 \*no を異分析して音写したものだった可能性がある。

<sup>26</sup> この母音の音価は現段階で明らかでない。\*[ü] の再建は完全に暫定的なものである。

<sup>27</sup> オ列乙類型機能語のすべてが欠如動詞の痕跡であるのかについては慎重になるべきであるため、ここではこれが欠如動詞であるとは必ずしも主張しないが、添加の \*mō (> 耆岐語 =mu) にはミ語法との関連を認めうるかもしれない (cf. 英語の too は不定詞の to と同源である)。

本報告は上代語における松本の相補分布の発生プロセスを現代的な日琉祖語体系のなかで初めて論じた。本報告の主張によれば松本の相補分布は日琉祖語の欠如動詞「連体形」相当形式 \**-ö* をはじめとする \**ö* に終る形態素が特殊な環境で *o*<sub>2</sub> に反映し、それが類推的水平化により拡大して発生した現象である。さらに本報告は松本的相補分布と称する古代日本諸語の形態音韻現象を予測するモデルを提案した。壱岐語における松本的相補分布は、上代語における松本の相補分布と酷似した原因により、並行的に発展したものであると説明できる。

肥筑語諸変種が共通の祖先を持つのであれば、松岡（2025）が論ずる肥筑柳川語における *tu ~ to* のマイクロバリエーションも、究極的には松本的相補分布に起源がある可能性がある。*tu ~ to* は若年層においてある種の下方向からの形態化（morphologization from below<sup>28</sup>; Anderson 2010: 131-133）が発生し、意味的要因による分布に変化したが、高年層においては音韻的要因による分布に留まると報告される。松岡（2025）の報告する高年層における分布条件は、次の如きものであるため、松本的相補分布の形成によって説明できる。

表 9. 8VH \**tO* の柳川語における松本的相補分布の形成

8VH	①接語化の進行	②有坂・池上的な 母音共起制限の形成	③類推的水平化	柳川語（高年層）
*...V <sup>[-ATR]</sup> =tö	>	*...V <sup>[-ATR]</sup> =t[o]		
*...ä=tö	>	*...ä=tö		
*...ö=tö	>	*...ö=tö	>> *...V=t[ü]	> ...V=tu
*...ï=tö	>	*...ï=tö		
*...ü=tö	>	*...ü=tö		> ...u=to

松岡（2025）が論ずる通り、これに類似した音韻対応は北部の九州語変種に報告される。今後は、九州諸語における同種の音韻対応が松本的相補分布の枠組みやその拡張によって説明できるかを検証してゆく必要がある。そのためにはとりわけ熊本県に分布する肥筑語変種の音韻対応の研究と日琉祖語の形態論に関するいくらかの準備が必要であるが、稿者の予想のかぎり、おそらく *tu/to* の起源に松本的相補分布があることは論証可能である。

#### 引用文献

- 秋永一枝（1991）『古今和歌集声点本の研究・研究篇』下。東京：校倉書房。
- Anderson, Henning (2010). “8 From Morphologization to demorphologization.” In: Silvia Luraghi & Vit Bubenik (eds.) *The Bloomsbury Companion to Historical Linguistics*. London/New Delhi/New York/Sydney: Bloomsbury.
- 五十嵐陽介（2021）。「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」『フィールドと文献から探る日琉諸語の系統と歴史』。東京：開拓社。
- 五十嵐陽介（2022）。「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」。言語系統樹ワークショップ。2022年12月25日沖縄県立博物館・美術館（オンライン併用）。
- 五十嵐陽介（2024）。「現代九州諸方言における上二段動詞の「下二段化」は九州・琉球祖語仮説を支持するか?」。『言語研究』163。
- Kupchik, John (2023). *Azuma Old Japanese: A Comparative Grammar and Reconstruction*. Leiden/Boston: Brill.

<sup>28</sup> Grammaticalization from below と呼ばれる。ただし松岡（2025: 265）の指摘する通り、この概念は意味的な分裂の発生要因の問題を説明することはできないため、さらなる研究が必要である。

- 野村剛史 (1993) 「上代語のノとガについて (下)」『國語國文』62 (3): 30-49.
- Pellard, Thomas (2008). “Proto-Japonic \*e and \*o in Eastern Old Japanese.” *Cahiers de linguistique-Asie Orientale*, 37 (2).
- Pellard, Thomas (2015). The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. In: Patrick Heinrich/Shinsho Miyara/Michinori Shimoji (eds.) *The Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- 白鳥詩織 (2024a) .「周防大島祖語における有坂の第三則の例外」. 日本歴史言語学会 2024 年大会.
- 白鳥詩織 (2024b) .「有坂・池上法則の新解釈」『歴史言語学』13.
- 白鳥詩織 (2025a1) .「肥筑壺岐語における有坂・池上法則の例外」『日本方言研究会第 121 回研究発表会発表原稿集』9-16.
- 白鳥詩織 (2025a2) .同上の発表スライド. URL: <https://www.academia.edu/144515104/>発表スライド\_肥筑壺岐語における有坂・池上法則の例外.
- 白鳥詩織 (2025b) .「日琉祖語の第八母音の提唱」. 日本歴史言語学会 2025 年大会.
- 白鳥詩織 (2026, forthcoming) .「古代日本語における素性接辞の痕跡と日琉祖語の分裂自動詞性」. 日本語学会 2026 年度春季大会オープン学生セッション.
- Trudgill, Peter (2004) *New Dialect Formation: the inevitability of colonial Englishes*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 松本克己 (1995) .『古代日本語母音論』. 東京: ひつじ書房.
- 松岡葵 (2025) .「九州方言の形式名詞 tu/to における意味的な使い分けの発生」『方言の研究』11.
- Vovin, Alexander (2020). *A Descriptive and Comparative Grammar of Western Old Japanese, Volume 1*. Leiden/Boston: Brill.
- 山口麻太郎 (1975) .『山口麻太郎著作集 2 方言と諺篇』. 東京: 佼成出版社.

# 日琉諸語アクセント祖体系の外輪様仮説

中村 明裕<sup>1</sup>

## 1. はじめに

本発表では、日琉諸語のアクセントの祖体系<sup>2</sup>が、現代諸方言の中では外輪式アクセントに比較的似た体系（外輪様体系）であったという仮説を提案する。祖体系が外輪式アクセント同様の類別体系であったとする佐藤（2005、2006、2007、2008）の説を大枠で支持しつつ、アクセント型・音調型も現代外輪式アクセントに近いものであったとし、この祖体系からアクセント型が分裂と合流を繰り返して日琉諸語のアクセント体系が成立したと説明する。

## 2. 祖体系案

行論の都合上、先に結論として本発表の主張する祖体系案を示すと、以下のとおりである。

- (1) アクセント核（下げ核）の有無と位置で弁別され、 $n$  拍のアクセント単位に対して  $n+1$  種の型がある体系である。
  - (2) 無核型は低平であり、有核型はアクセント核までが高い。
  - (3) 類別体系は、1 拍語では 1.2/3、2 拍語では 1.2/3/4.5、3 拍語では 1/4/5/6.7 である<sup>3</sup>。
- 以上によって本発表の祖体系案をまとめると次の表のとおりである<sup>4</sup>。

表 祖体系案

	1 拍語	2 拍語	3 拍語
0 型	*_コ (第 1・2 類)	*_トリ (第 1・2 類)	*_カタチ (第 1 類)
-1 型	*[キ] (第 3 類)	*[ヤマ] (第 3 類)	*[アタマ] (第 4 類)
-2 型	-	*[マ]ツ (第 4・5 類)	*[アブ]ラ (第 5 類)
-3 型	-	-	*[ウ]サギ (第 6・7 類)

<sup>1</sup> なかむら あきひろ（国学院大学兼任講師ほか）nkmr.koborezakura@gmail.com

<sup>2</sup> 日本語および日琉諸語のアクセントの祖体系を論じた主なものとして、服部（1951）、上野（1988、2006）、松森（1993、1998）、Vovin（2008）、五十嵐（2023）、中澤（2023）の説を挙げることができる。一方で、金田一春彦の一連の研究（金田一 1954=1975、1977 等）以来、諸方言のアクセントを全て『類聚名義抄』の声点に反映されたアクセント（名義抄アクセント）から変化したものであるとする見方も根強い。これらの先行諸説との得失の詳細な比較検討は別の機会に譲り、本発表では割愛する。

<sup>3</sup> 「祖体系の類別体系」というのは本末転倒な表現であるが、要するに 1 拍語の第 1・2 類等の区別は二次的に生じたという意味である。3 拍第 2 類・第 3 類については祖体系にそのままの形では遡らないと考える。本発表では話を単純化するため 3 拍語については詳しくは割愛する。

<sup>4</sup> 音調の表記は上野（2006）に準じ、上昇を[、下降を]、拍内上昇を[[、拍内下降を]]、拍を○で表す。ただし低平は語頭に\_を付すことで表す。それぞれの時代の語音に対する詳しい検討は一部を除いて本発表の範囲外とし、原則として歴史的仮名遣いを用いる。歴史的仮名遣いで表現できない古い時代の形については音韻記号を、また明らかに新しい時代の形についてはカタカナを用いた音韻表記を、適宜用いる。

この祖体系案は佐藤（2005）の祖体系案に近く、類別体系は同じであるが、アクセント型・音調型に違いがある。佐藤説では、2拍語を例にとると、第1・2類は1拍目、第4・5類は2拍目に「高」指定があり、第3類には「高」指定がないという型を想定している。佐藤説の音調型はどちらかといえば現代の外輪式よりも名義抄式に近いものである。

### 3. 諸方言の派生

以下、祖体系案から現代諸方言が派生した過程の案を提示する。

#### 3.1 系統樹案

本発表の主張する系統樹は図1のとおりである<sup>5</sup>。

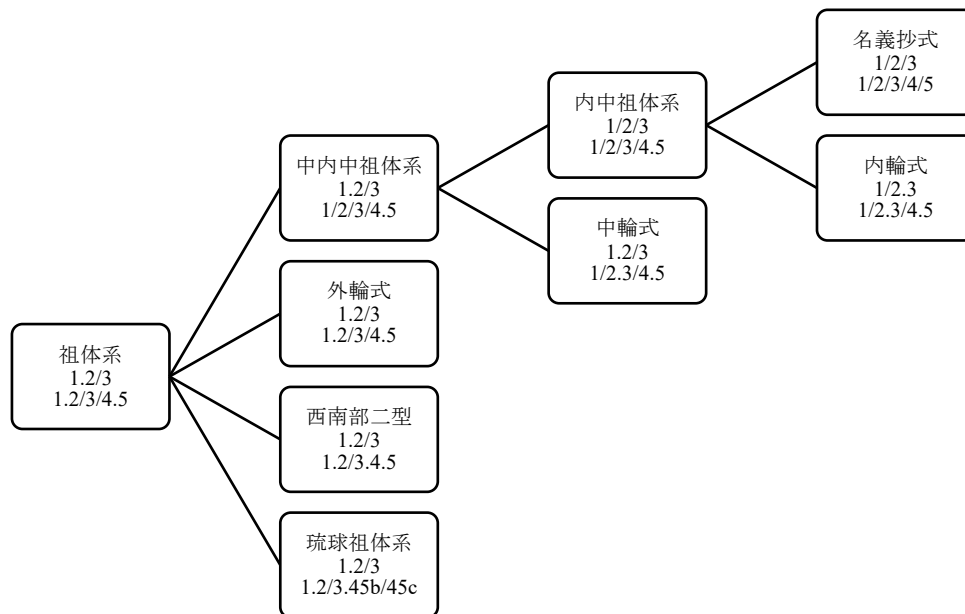


図1 系統樹案<sup>6</sup>

図中、1.2/3/4.5の如きはそれぞれ上から1・2拍の類別体系を表す。「/」で区切ったものは区別あり、「.」で区切ったものは区別なしの意。「中内中祖体系」は「中輪式・内輪式・中央式祖体系」、「内中祖体系」は「内輪式・中央式祖体系」の略。

#### 3.2 諸方言の派生過程案

以下のような変化を経て日琉諸語のアクセント体系が成立したと説明する<sup>7</sup>。

<sup>5</sup> なお、平子（2017）は、従来「外輪式」と呼ばれてきた方言を「外外輪式」と「内外輪式」に分けている。本発表ではこの「外外輪式」を外輪式の典型例として扱う。ただし、祖体系と「中内中祖体系」との間に「内外輪式・中輪式・内輪式・中央式祖体系」を置き、そこから「内外輪式」が分岐したという見方をすべきとも考えられる。現状、発表者はその見方の方が蓋然性が高いと考えているが、話を単純化するため詳細は割愛する。

<sup>6</sup> この系統樹案では祖体系から中内中祖体系・外輪式・西南部二型・琉球祖体系が多分岐になっているが、これは同時に分かれたということではなく、分岐の順序が特定できないことを示す。本仮説は、日琉諸語を本土諸語と琉球諸語に二分する論とも、九州諸語と琉球諸語をまとめて一語派とする論とも整合しうる。

<sup>7</sup> 内輪式・中輪式・外輪式は地理的に東西に分かれて分布しており、通説（金田一 1954=1975）では並行変化の結果で

- (1) 祖体系からの小規模な変化によって外輪式が成立した。
- (2a) 祖体系から2拍第1類と第2類が分裂することで、「中輪式・内輪式・中央式祖体系」(中内中祖体系)が成立した。「中内中祖体系」から2拍第2類と第3類が合流することで中輪式が成立した。
- (2b) 「中内中祖体系」から1拍第1類と第2類が分裂することで「内輪式・中央式祖体系」(内中祖体系)が成立した。「内中祖体系」から1拍第2類と第3類、2拍第2類と第3類が合流することで内輪式が成立した。
- (2c) 「内中祖体系」から音調型が大きく変化し、2拍第4類と第5類が分裂することで名義抄式が成立した。名義抄式からおおむね通説どおりの変化によって中央式等の諸方言のアクセント体系が成立した。
- (3) 祖体系の有核語群が合流することで、西南部二型が成立した。
- (4) 祖体系の2拍第4・5類が45b類と45c類に分裂し、45b類が第3類に合流することで琉球祖体系が成立した。
- なお、無アクセントは祖体系から全ての型が合流したものとみる。

### 3.3 本土諸方言における型の分裂とその条件

以上の諸方言の派生過程案では、いくつかの型の分裂(いわゆる *tonogenesis*)を前提としている<sup>8</sup>。これらの分裂はすでに先行研究によって条件が指摘されているものである。

本土諸方言では2拍第1・2類、1拍第1・2類、2拍第4・5類の順に分裂が生じたとした。これらは佐藤(2007)によって音条件と意味に偏りがあることが指摘されている<sup>9</sup>。すなわち、佐藤(2007)は、2拍第1・5類には第2・4類と比べ第2拍に二重母音由来の母音(イ乙、エ)が多く、また動物の名称が多いことを指摘し、こうした音条件<sup>10</sup>によって分裂したものであると主張している。また、1拍第1・2類の間にも同様の関係を認めている。

なお、佐藤説に対しては、これがギャルドの原理(*Garde's principle*)に反するという批判(平子ほか2024: 116)がある。しかし、ギャルドの原理とは平たく言えば「一度合流した区別は元に戻らない」というものであり、佐藤説は「元々区別のなかった第1・2類の別が音条件によって二次的に生じた」というものなのであるから、佐藤説への批判としてギャルドの原理を持ち出すことは無効である。

### 3.4 本土諸方言の具体的な音調型の変化過程案

主な本土諸方言の具体的な音調型の変化過程案を図にして示すと図2のとおりである<sup>11</sup>。

---

あるとされるが、本発表では系統を同じくするとみる。それが現在のような地理的分布を見せるようになった過程の案については、機会を改めて発表する予定である。北奥羽式・垂井式等の諸方言の成立過程については別の機会に譲り、ここでは割愛する。

<sup>8</sup> 分裂を前提とする音調史観自体はすでに風間(2025)によって主張されている。

<sup>9</sup> この佐藤説は添田(1996)説を発展させたものである。佐藤(2007)は第1・2類の分裂条件を完全に示しているわけではないが、個々の語について検討することでより完全に近い分裂条件を示すことができる可能性があるとして発表者は考えている。詳細は機会を改めて発表する予定である。

<sup>10</sup> 佐藤(2007)は動物名の2拍目は長母音であったとする。

<sup>11</sup> ここでは話を単純化するため1・2拍名詞のみを扱い、残りは割愛する。



図2 本土諸方言の具体的な音調型の変化過程案

祖体系から外輪式には、この範囲では大きな変化はない。主な変化は、1 拍目から 2 拍目にかけての上昇（句音調）が形成されたことである。同様の変化は中輪式・内輪式でも生じているが、これは並行変化か、あるいは表層の音調型の問題であるためにこれのみ伝播したものと考えておく。

祖体系から中内中祖体系への変化は、2 拍第 1・2 類の分裂である。これらは第 1 類の 2 拍目が二重母音もしくは長母音であったことによって分裂したとする佐藤（2007）の推定に従って、この条件によって分裂したと考える。その具体的過程には種々の可能性がありうるが、仮に以下のように考えておく。祖体系の 2 拍無核型（第 1・2 類）は、完全な低平から、語末に軽い上昇が生じるようになった。しかし、2 拍目が二重母音か長母音であった語（第 1 類）は、その軽い上昇が音節の末尾のわずかな部分であったので目立たず、消滅した。一方で 2 拍目が単純短母音であった語（第 2 類）は、その上昇が音節境界に来るために目立ち、上昇する型として固定した。

また、1 拍助詞は低平であったと考えられる<sup>12</sup>から、上昇型となった第 2 類にはこの助詞との境界に下降が生じることになった。すなわち以下のとおりである。

<sup>12</sup> 名義抄アクセントにおいて 1 拍助詞の大部分は上声（高平）の独立したアクセントを持っており、1 拍第 1 類に相当する。したがって本発表の祖体系案の無核型に対応することになる。

\*\_takai > \*taka[i] > \*\_takai (竹)      \*\_takai\_Nka (= \*\_takaiNka) (竹が、第1類)

\*\_kapa > \*ka[pa] = \*ka[pa] (川)      \*ka[pa]\_Nka (= \*ka[pa]Nka) (川が、第2類)

中内中祖体系から中輪式への主な変化は、2拍第2・3類の合流である。すなわち、\*カ[ハ]ガ(第2類)と\*[ヤマ]ガ(第3類)が合流して○[○]ガ型となった<sup>13</sup>。

さらに、中内中祖体系から1拍第1・2類が分裂することによって、内中祖体系が成立した。内中祖体系から、1拍第2・3類、2拍第2・3類が合流することで内輪式が成立した。これらはみな先述の中輪式における2拍第1・2・3類と同様の変化である。

内中祖体系から、音調型が大きく変わり、2拍第4・5類が分裂することによって名義抄式が成立した。佐藤(2007)によれば、第5類と第4類の関係はちょうど第1類と第2類の関係と平行であり、第5類の2拍目が二重母音もしくは長母音であったことによって分裂したとしている。本発表はこの論に基づき、次のような過程で分裂したと考える。第4・5類は、内中祖体系では1拍目に核がある型であったが、それが語末方向に1拍ずれるという変化があった。この際、2拍目が二重母音か長母音であった語(第5類)は、2拍目はその下降を担い続けることができたので下降が保たれた。一方で2拍目が単純短母音であった語(第4類)は、下降を担うことができず、下降が消滅した。すなわち以下のとおりである。

\*[ma]tu > \*ma[tu] > ma[tu] (松、第4類)

\*[a]mai > \*a[ma]i > a[me]] (雨、第5類)

内中祖体系から名義抄式への変化では、音調型が大きく変化した。これはおおむね高低が反転するような変化ということになる<sup>14</sup>。

### 3.5 琉球祖体系における型の分裂とその条件

先に、琉球祖体系では第4・5類に45b類と45c類への分裂が生じたと述べた。これは五十嵐(2022)による。五十嵐(2022)は、第4・5類のうちC類に属するものは大部分が語末が狭母音のものおよび多形態素からなるものであることを指摘している。五十嵐は、第4・5類のうちこれらに当てはまらない語が第3類に流入することでB類になったとしている。

五十嵐(2022)は先琉球祖語の2拍語に、第1・2類は\*OO、第3類は\*OÓ、第4・5類は\*ÓOの3つの型を建てている。五十嵐説の2拍語の先琉球祖語における体系は、本発表の主張する2拍名詞の祖体系とほとんど同じである。したがって本発表の祖体系案を、ほとんどそのまま先琉球祖語に据えることができることになる。

## 4. 本説の利点

本説によって、以下のような事柄が新たに説明できるようになる。

### 4.1 地理的分布

2拍第4・5類の区別を持つ方言は日本列島の中央に集中している(徳川1981)。それに次いで1拍第1・2

<sup>13</sup> ただし厳密には第2類は一旦\*[カハ]ガ型を経たと考えるが、詳しくは割愛する。注16参照。

<sup>14</sup> ただし、高低の反転は変化の結果であると考えており、「高低が反転する」という変化が生じたとは考えていない。奈良田方言に起こったとされる変化に近いものを想定しているが、ここでは詳しくは割愛する。

外側の実線：2拍第1・2類の区別の限界  
 点線：1拍第1・2類の区別の限界  
 内側の実線：2拍第4・5類の区別の限界

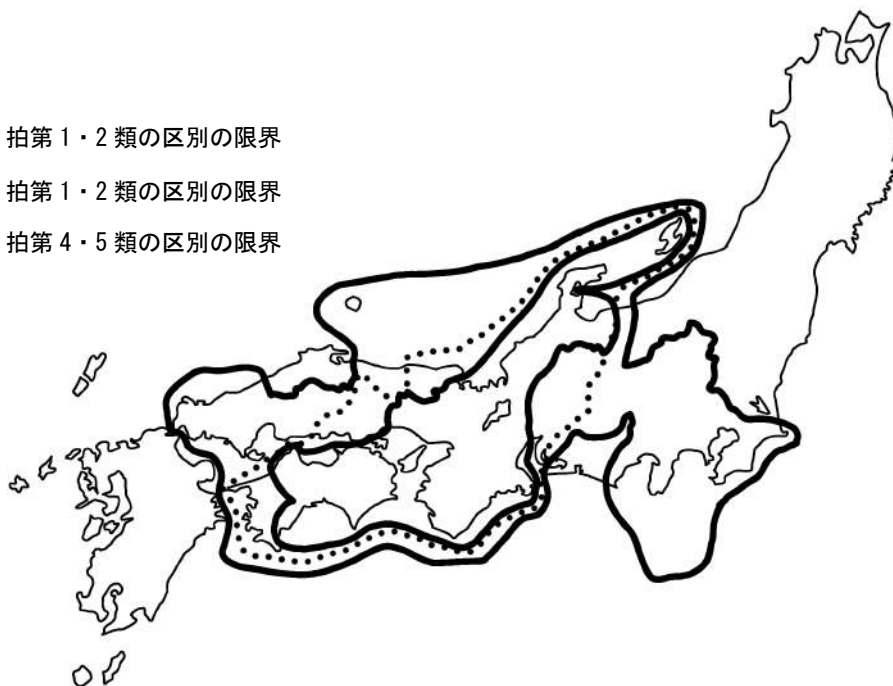


図3 型の区別の分布（金田一 1977、徳川 1981、秋永編 1981 を参考に作図）

類の区別が、さらにそれに次いで2拍第1・2類の区別が、中央に近く集中して分布している<sup>15</sup>（図3）。もしこれらが祖体系に遡る区別であるならば、各地に分散して分布してもよいはずである。

1拍1.2/3、2拍1.2/3/4.5の外輪様体系から、2拍第1・2類、1拍第1・2類、2拍第4・5類の順で区別が生じたとすれば、この地理的分布によく合致することになる。同様の理由により2拍第1・2類の分裂が2拍第4・5類の分裂より先である可能性は佐藤（2006）によっても示唆されている。

#### 4.2 乙種アクセントの音調型の類似

外輪式・中輪式・内輪式の三種のアクセント体系（まとめて「乙種アクセント」と呼ぶ）は、「乙種アクセント」「東京式アクセント」としてまとめられるほど一見よく似ている。いずれも2拍第1類は無核であり、第3類は2拍目に核があり、第4・5類は1拍目に核がある。しかしながら、2拍語の類別体系は外輪式のみ1.2/3/4.5であるから、1/2.3/4.5の中輪式や内輪式とは系統的に遠いはずである（上野 1982 参照）。むしろ第1・2類の区別を有する点で、中輪式や内輪式は中央式に近い。

系統的に遠いはずの外輪式と、中輪式や内輪式のアクセント型・音調型がよく似ているのは、古い特徴の保持と考えれば説明しやすい。すなわち、乙種アクセントとは、名義抄式に生じた音調型の改新を被らず、祖体系の型の保持を共有する側系統群であると考えるのである。

#### 4.3 和田実の複合アクセント法則

和田（1943）は、東京方言と近畿方言の両方において、2拍体言が複合名詞の後部要素になる場合、第1・2類は-3型、第3類は0型、第4・5類は-2型となる傾向があることを指摘した。この現象をここでは「和

<sup>15</sup> ここでは大島方言・三面方言等については仮に考察の範囲外とする。なお、平子（2017）が外外輪式と内外輪式の違いとして提示した3拍第7a・7b類の区別の限界の線を、図3の外側の実線のさらに外側に引ける可能性がある。

田実の複合アクセント法則」(略して和田法則)と呼ぶことにする。和田の示した例の一部(近畿方言の例)を示すと以下のとおりである。

第1類	第2類	第3類	第4類	第5類
[コーベ]ウシ	[ミカゲ]イシ	[ニホンイヌ	[カブリガ]サ	[コノハザ]ル

和田法則は、中央式と中輪式が分岐する前の体系の単独形の音調型が複合名詞に保存されているものであるという見方(ラムゼイ 1979、1980、松森 1993、1998)がある。

本説ではより直接的に同様の説明ができる。すなわち、第1・2類の\*\_ウシ、第3類の\*[イヌ]、第4・5類の\*[サ]ルの音調型がそのまま複合名詞内に保存されているとすればよいのである。

本発表では祖体系の無核語の音調型を低平、有核語の音調型をアクセント核まで高いとしたが、それはそのように仮定することで第1・2・3類が複合名詞の後部要素となった場合の音調型が説明しやすいことが理由の一つである<sup>16</sup>。

#### 4.4 2拍名詞第4・5類の音配列

金田一(1943)は、2拍名詞第4・5類にあたる語群に、無声子音+狭母音+無声子音という音配列で始まるものがないことを指摘した。すなわち、1拍目が無声化する語にはこの種のものがないのである。金田一はこれを、無声化のため高音を担えなかったためであるとし、東京式が古態を保っていることの証拠とした。なお、ラムゼイ(1979、1980)はこの見方を継承している。金田一は後に名義抄アクセントを諸方言の源としてこの説を放棄したが、この問題は残されたままである。

本説であれば、祖体系の第4・5類は\*[○]○型であり、この現象を問題なく説明することができる。

### 5. まとめ

本発表の主張をまとめると、以下のとおりである。

- (1) 日琉諸語のアクセントの祖体系は、現代諸方言の中では外輪式アクセントに比較的似た体系(外輪様体系)であった。
- (2) この体系から、音条件・意味・語構成によって型の分裂が起き、型の分裂と合流を繰り返すことで現代日琉諸語のアクセント体系が成立した。
- (3) 以上のように仮定することで、型の区別の地理的分布、乙種アクセントの音調型の類似、和田実の複合アクセント法則、2拍名詞第4・5類の音配列が合理的に説明できるようになる。

### 参考文献

- 秋永一枝 編、金田一春彦 監修(1981)『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂
- 五十嵐陽介(2022)「2音節名詞第4/5類に対応する琉球祖語B類は改新であるとする仮説」『第164回日本語学会大会 予稿集』日本語学会 pp. 379-384 (ならびに発表スライド [https://researchmap.jp/yos\\_igarashi/presentations/36967682](https://researchmap.jp/yos_igarashi/presentations/36967682))
- 五十嵐陽介(2023)「日琉祖語四声仮説: 最少の声調と最少の音変化でアクセント体系の多様性を説明するために」(第4回プロトジャポニック研究会・発表資料)
- 上野善道(1982)「新潟県における中輪・外輪両アクセントの境界線」『金沢大学文学部論集 文科学篇』(2) 金沢大学文

<sup>16</sup> もう一つの理由は、乙種アクセントの前段階では1拍目から高かったという説(服部 1937、上野 2009、中村 2026)の存在である。なお、2拍第1類は\*\_○○>\*[○○の変化を経て○[○となったことになる。

学部 pp. 49–85

- 上野善道 (1988) 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集 '88』東京大学文学部言語学研究室 pp. 35–73
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』(130) 日本言語学会 pp. 1–42
- 上野善道 (2009) 「通時的にしか説明できない共時アクセント現象——句頭の上昇と語音との関係」『言語』38 (2) 大修館書店 pp. 74–81
- 風間伸次郎 (2025) 「日本語の類型と重層性」『ヤポネシアの考古と言語』(シリーズ〈ヤポネシア人の起源と成立〉4) 朝倉書店 pp. 130–146
- 金田一春彦 (1943) 「国語アクセント断想」『ローマ字世界』33 (1) 日本ローマ字会 pp. 23–31
- 金田一春彦 (1954=1975) 「東西両アクセントの違いができるまで」『日本の方言 アクセントの変遷とその実相』教育出版 pp. 49–81 (初出: 『文学』22 (8))
- 金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』岩波書店 pp. 127–180
- 佐藤栄作 (2005) 「HLL 型からアクセント史を考える」『論集』(1) アクセント史資料研究会 pp. 191–209
- 佐藤栄作 (2006) 「第 0 次アクセントを考える」『論集』(2) アクセント史資料研究会 pp. 115–127
- 佐藤栄作 (2007) 「第一次アクセントの成立と語音」『論集』(3) アクセント史資料研究会 pp. 1–12
- 佐藤栄作 (2008) 「「高」指定仮説の検証」『論集』(4) アクセント史資料研究会 pp. 39–49
- 添田健治郎 (1996) 『日本語アクセント史の諸問題』武蔵野書院
- 徳川宗賢 (1981) 『日本語の世界 8 言葉・西と東』中央公論社
- 中澤光平 (2023) 「日琉祖語アクセント体系の再建試論」『信州大学人文科学論集』(10) 信州大学人文学部 pp. 71–91
- 中村明裕 (2026) 『荷田春満と日本語音調史の研究』ひつじ書房
- 服部四郎 (1937) 「原始日本語の二音節名詞のアクセント」『方言』7 (6) 春陽堂 pp. 41–58
- 服部四郎 (1951) 「原始日本語のアクセント」『国語アクセント論叢』法政大学出版局 pp. 43–65
- 平子達也 (2017) 「外輪式アクセントの歴史的な位置づけについて」『アジア・アフリカ言語文化研究』(94) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 pp. 259–276
- 平子達也、五十嵐陽介、トマ・ペラール (2024) 『日本語・琉球諸語による歴史比較言語学』岩波書店
- 松森晶子 (1993) 「日本語アクセントの祖体系再建の試み——いわゆる「下降式アクセント」の成立に関する考察をもとにして——」『言語研究』(103) 日本言語学会 pp. 37–91
- 松森晶子 (1998) 「日本祖語のアクセント」『日本語学』17 (4) 明治書院 pp. 34–44
- ラムゼイ, S. R. (1980) 「日本語のアクセントの歴史的变化」『言語』9 (2) 大修館書店 pp. 64–76
- 和田実 (1943) 「複合語アクセントの後部成素として見た二音節名詞」『方言研究』(7) 日本方言学会 pp. 1–26
- Ramsey, S. R. (1979) The Old Kyoto Dialect and The Historical Development of Japanese Accent. *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 39(1), pp. 157–175.
- Vovin, A. (2008) Proto-Japanese beyond the accent system. *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 141–156.

# 『物類称呼』データベースについて

大西拓一郎<sup>1</sup>

## 1. はじめに

江戸時代中期に刊行された全国方言集である『物類称呼』をデータベース化し公開した（稿末参照）。以下では、『物類称呼』を概説し（2～3節）、データベースの仕様を解説する（4～5節）とともに、データベースから見えてくることを示すことで活用方法の一端を提示する（6節）。

## 2. 越谷吾山『物類称呼』について

『物類称呼』は江戸時代中期の俳人、越谷吾山（1717-1787）が、安永4年（1775年）に編纂・公刊した、全五巻で構成される、日本で最初の全国方言集である。一般に使える資料としては、東條操編（1951）『全国方言辞典』が刊行されるまで唯一の全国的方言資料であった。

『諸国方言物類称呼』『和歌連俳諸国方言』と題されることもあるが、一般に『物類称呼』と呼ばれる。諸本としては、大坂屋本と須原屋本に大別されるが、内容に大きな異なりはなく、表示されている刊行年も同じであり、須原屋本は大坂屋本にある若干の誤りを修訂したものと考えられている（吉澤 1933:1、杉本 1979:123-129）。なお、相互の異なり（校異）は吉澤（1933）と東條（1941）により確認できる。

活字翻刻本としては、『片言付補遺 物類称呼 浪花聞書 丹波通辞』（1931年、日本古典全集刊行会、『物類称呼』の解題は東條操、1978年に現代思潮社より復刻、底本：大坂屋本）、吉澤（1933、底本：須原屋本）、東條（1941、底本：須原屋本）、杉本（1976、底本：大坂屋本）が刊行されてきた。

影印本は、京都大学文学部国語学国文学研究室『諸国方言物類称呼 本文・釈文・索引』（1973年、京都大学国文学会、大坂屋本の影印と吉澤（1933）の復刻）、『近世方言辞書集成 第三巻 物類称呼』（1998年、大空社、須原屋本）がある。

デジタル画像は、国立国会図書館デジタルコレクション（大坂屋本）、早稲田大学古典籍総合データベース（大坂屋本）、国立公文書館デジタルアーカイブ（3種：須原屋本など）、東京大学デジタルアーカイブポータル（須原屋本）がある。

国立国語研究所も所蔵本を「日本語史研究資料『諸国方言物類称呼』（2015年公開、影印（PDF、JPEG）、底本：須原屋本）として公開するとともに、その文字化テキストを「国立国語研究所 日本語史研究用テキストデータ集『諸国方言物類称呼』（2015年公開）として公開している。

## 3. 『物類称呼』の利用上の問題点

吉澤（1933）・東條（1941）・杉本（1976）には、語形と地名についての索引や目次があり、それを用いることで本文をたどることができる。これらの索引や目次はおおいに手がかりにはなるが、実際の利用にあたってはいくつも問題点があった。

索引でたどれるのは、語形の存在（対応する本文中の位置）のみである。その索引は方言形と見出し（意味）が区別されていない。索引だけでは、あがっている語形が方言形なのか、意味なのかはわからない。

意味を知るためには本文の「読み」が求められる。意味に該当する見出しは目次と索引でたどれるものの、それは越谷吾山の記載に基づくことになり、現代語の意味からの検索はできない。

また、『物類称呼』は意味分類で構成されているが、越谷吾山の記述は、現代の辞典とは異なり、散文的であり、同等もしくは関連する意味の語が見出しとは別の所にもある場合には検索できるとは限らない。

---

<sup>1</sup> おおにし たくいちろう（国立国語研究所） takonish@ninja.ac.jp

加えて、各語の使用場所も読み取りが必要で、その場所がどこなのかは、地名や地理に関する知識が欠かせない。

以上のようなことから索引や目次があっても『物類称呼』は使いづらい点が多い。そのためか、越谷吾山や『物類称呼』についての研究は古くから行われてきたが（奥里 1934、志田 1934、大田 1941、杉本 1979、小野 1987、山県 1995、田島 1999、田籠 2016）、『物類称呼』を近世の方言資料として駆使する研究は少ない。

#### 4. データベース化の対象

以上の問題点を克服するデータベースの作成を実施した。2020 年から作業にとりかかり、2026 年 4 月に web での公開を開始した。

本文のデータとしては、「国立国語研究所 日本語史研究用テキストデータ集」を利用した。このデータは影印を公開している国立国語研究所所蔵の須原屋本をテキストファイルでデータにしたものである。

ただし、このデータは影印を公開している原本との対応をはかるためのアノテーションが付されており、以下に示すような事情のために、そのままでは検索に向いていない。

- ・原本で改行されているところは、テキストデータも改行されている。

「三月の土用の少し前より吹く南風」を表す「あぶらまじ」（鳥羽、伊豆国）は、「あぶ {改行コード} らまじ」で作成されており（巻之一、2 丁表）、単純には検索できない。

- ・表記に関する注記がアノテーションとして挿入されている。

「南東の風」を表す「おしゃばえ」（西国）は「をしや（\*「しや」に傍線）ばへ」として作成されており（巻之一、1 丁裏）、「をしやばへ」のピンポイントの検索はできない。

- ・繰り返し符号や仮名が原文のまま入力されている。

「十一月十二月のころに吹く風」を表す「おーにし」（畿内、中国）は、原文に従い、「をゝにし」で作成されている（巻之一、1 丁裏）。このような符号が用いられている知識がなければ、たどりつけない。また、「お」「を」のような表記上の異なりも前提知識として求められる。

なお、国立国語研究所の「日本語史研究資料」のサイトには、一時期、「物類称呼データベース」があったが、現在は無い。このコンテンツは、おもに『日本言語地図』（LAJ）の画像公開サイトへのリンクをはかったものであった。ここで説明するデータベースとは別物である。

#### 5. 『物類称呼』データベース

データベースは、1. 方言情報 CSV ファイル (BRSK.csv)、2. アノテーション化本文テキストファイル (brsk-00 巻番号\_DB.txt)、3. 空間情報ポリゴンファイルで構成されている。

##### 5.1 方言情報 CSV ファイル (BRSK.csv)

『物類称呼』データベースの中核をなすのが、方言情報 CSV ファイルである。『物類称呼』が記述する方言情報を「意味」「語形」「場所」の組み合わせで扱えるように整理している。

『物類称呼』がとる記述の基調は、次のようである。 $\alpha 1$ （見出し）・ $\alpha 2$ （下位見出し）が意味、 $\beta 1$ ・ $\beta 2$  が場所、 $\gamma 1$ ・ $\gamma 2$  が語形に該当する（ $\alpha 2$  の下位見出しは、ない場合もある）。

「 $\alpha 1$ （見出し）  $\beta 1$  にて  $\gamma 1$ ……  $\alpha 2$ （下位見出し）のことを  $\beta 2$  にて  $\gamma 2$ …」

（例 1）液雨 しぐれ○美濃加納にて・山めぐりと云（中略）又不時に村雨の降を相州箱根山にて・わたくし雨といふ（巻之一、3 丁裏）

$\alpha 1$ =液雨 しぐれ、 $\beta 1$ =美濃加納、 $\gamma 1$ =山めぐり、 $\alpha 2$ =不時に村雨の降、 $\beta 2$ =相州箱根山、 $\gamma 2$ =わたくし雨

このように意味分類上の見出しの中にしばしば下位見出しが入れ込まれており、見出しと下位見出しは必ずしも関連するとは限らない。

(例2) 茶藤 ときんいばら○畿内にて・ごやをぎと云 (中略) にごりさけ (中略) 関西にてはどびろくと云 (巻之三、15 丁裏)

$\alpha 1$ =茶藤 ときんいばら、 $\beta 1$ =畿内、 $\gamma 1$ =ごやをぎ、 $\alpha 2$ =にごりさけ、 $\beta 2$ =関西、 $\gamma 2$ =どびろく

また、 $\beta 2$ が $\alpha 2$ に先んじて記述されたり、複数の場所がひとまとめに記載されたりすることもある。

(例3) 冬瓜 かもうり [とうぐは] ○畿内及中国北陸道或は上総にて・かもうりといふ (中略) 京にて坊を・ぼん (巻之三 6 丁表)

$\alpha 1$ =冬瓜 かもうり、 $\beta 1$ =畿内及中国北陸道或は上総、 $\gamma 1$ =かもうり、 $\alpha 2$ =坊<sup>ぼう</sup>、 $\beta 2$ =京、 $\gamma 2$ =ぼん

データの一括検索を実現させるには、見出しのもとで扱われている情報と下位見出しのもとで扱われている情報を独立させるとともに、各見出し・下位見出しに対応する個々の語形やそれぞれの使用場所をひとつずつ切り分け、1レコード化させて扱う必要がある。

そのようにして作成した方言情報 CSV ファイル (BRSK.csv) は項目 (列、フィールド、カラム) をコンマで区切った CSV 形式のテキストファイルであり、エクセルで読み込むと表形式で表示される。各行 (レコード) の項目は以下のように構成されている ([ ]内はエクセルで読み込んだ場合の列名)。

#### (1) コード [A]

各行 (レコード) が扱うデータの ID に当たるコードを付与している。コード化の方法については 5.2 節を参照。

#### (2) 意味 (見出し: 現代語 / 下位見出し: 現代語) [B]

「(18)見出し: 現代語」と「(21)下位見出し: 現代語」を統合したもの (下位見出しがある場合はそちらを優先する)。これにより、当該行の方言形の意味をひとつにまとめている。

#### (3) 方言形: 整理 (かな) [C]

原文表記を整理した方言形。「を」「お」を「お」に統一したり、「を」に「し」を「お」に「し」、「あんのう」を「あんのー」にしたりするなど、『日本方言大辞典』(小学館) に倣った整理を行っている。

#### (4) 場所: 整理 (@は備考・注記を参照) [D]

原文における場所 (地名) を整理した地名。複数の場所は一箇所ずつに切り分けるとともにたとえば、原文では「参州」となっている場合、「三河国」に統一するなどの整理を行っている。また、原文の「関西」を「畿内」と同一に扱うなどの説明を要する整理を行った場合は、「@畿内」のように頭に「@」を付し、根拠となる情報を「(31)備考・注記」に記載している。

#### (5) 歴史地名データ ID [E]

「(4)場所: 整理 (@は備考・注記を参照)」に対応する、「歴史地名データ」(5.3 節参照) の ID。

#### (6) 経度 (世界測地系) [F]

「(5)歴史地名データ ID」の経度。数値は世界測地系に従っている。

#### (7) 緯度 (世界測地系) [G]

「(5)歴史地名データ ID」の緯度。数値は世界測地系に従っている。

#### (8) ポリゴンファイル [H]

令制国 (旧国名) による範囲を表す GIS 用のポリゴンファイル名 (5.3 節参照)。

一般的な利用では、以上の 8 項目が基本項目になると考えられることから冒頭 (左端) に配置した。

#### (9) 巻 [I]

『物類称呼』の該当する巻の漢数字。

#### (10) 巻 (数字) [J]

「(9)巻」を表す数字 (半角)。

#### (11) 巻内分類 [K]

『物類称呼』の各巻内の章立て (「天地」「人倫」など)。意味の大分類に該当。

- (12) 丁 [L]  
国立国語研究所蔵『物類称呼』の影印資料における丁。「オ」は表、「ウ」は裏。
- (13) 岩波文庫頁 [M]  
岩波文庫本（東條 1941）における頁。須原屋本を底本とする岩波文庫本には大坂屋本との校異が提示されているので参考になる。
- (14) 見出し番号 [N]  
各巻における見出しの通し番号。
- (15) 見出し：原文 [O]  
『物類称呼』における意味提示に該当する見出しの原文表記。
- (16) 見出しの読み：原文 [P]  
『物類称呼』における見出しの原文の読みの表記。
- (17) 見出しの説明：原文 割注は大括弧 [Q]  
『物類称呼』における見出しに対する説明の原文。「国立国語研究所 日本語史研究用テキストデータ集」に従い、割注は〔 〕で括っている。
- (18) 見出し：現代語 [R]  
見出しの現代語訳。現代語訳を与えるにあたっては、おもに『日本方言大辞典』を参考にした。
- (19) 下位見出し番号 [S]  
(14)～(15)の見出しの下で別の意味提示がなされていることがある。それらに対して順に数字を与えている。なお、下位見出しがない場合にも「1」を付与している。
- (20) 下位見出し：原文 [T]  
見出しの下でなされている別の意味提示の原文表記。
- (21) 下位見出し：現代語 [U]  
下位見出しの現代語訳。こちらもおもに『日本方言大辞典』を参考にした。
- (22) 方言形番号 [V]  
「(2) 意味（見出し：現代語／下位見出し：現代語）」に対する各方言形に対して順に与えた番号。この数値で語形のバリエーション量（いわゆる方言量）が把握できる。
- (23) 方言形：原文 {ふりがな}（入力注＝傍線等） [W]  
方言形の原文表記。ふりがなは { } で、傍線などについては（ ）で括って注記にするなど、特殊な表記の入力は原則として「国立国語研究所 日本語史研究用テキストデータ集」に従うが、検索の便を考慮して「をしや（\*「しや」に傍線）ばへ」は「をしやばへ（「しや」に傍線）」にするなど、なるべく語形の中に注記が入り込まないように改変している場合がある。
- (24) 場所番号 [X]  
「(25) 場所：原文」に対して各方言形ごとに順に与えた番号。この数値でどれくらいの場所の情報があるか、場所のバリエーション量がわかる。
- (25) 場所：原文 [Y]  
方言形が使われている場所（地名）の原文表記。
- (26) 場所：原文参考記載 [Z]  
原文で「わたり（例：越後わたり）」「近在（例：江戸近在）」のような記述がなされている場合に記載。
- (27) 位相 [AA]  
原文に使用者などについて「船人」「児童」のような記載がなされている場合に記載。
- (28) 日本方言大辞典：親見出し（※は近世の資料として物類称呼があがっていないもの） [AB]

『日本方言大辞典』における該当する語の親見出し。『日本方言大辞典』に搭載が確認できない場合は「ー」。

また、『日本方言大辞典』に搭載されても、近世の資料として『物類称呼』があがっていない場合は「※」を付した。本データベース 3502 件中、739 件が『日本方言大辞典』に確認できなかった。また、369 件に『物類称呼』があがっていなかった。なお、近世の資料は、刊行年が早いものをあげているため、掲載がないものもあると考えられるが、掲載資料と『物類称呼』のどちらが早いかについては確認していない。

(29) 日本方言大辞典：頁 [AC]

『日本方言大辞典』の掲載頁。

(30) LAJ・GAJ・NLJ [AD]

『日本言語地図』(LAJ)、『方言文法全国地図』(GAJ)、『新日本言語地図』(NLJ)に関連地図がある場合は、その番号を記載。直接対応しないが参考になると考えられる場合は( )に括って記載した。

(31) 備考・注記 [AE]

大西が付した注記は【 】で括って記載し、原文で参考になる記載は、「国立国語研究所 日本語史研究用テキストデータ集」からそのまま記載。

(18)と(21)の説明に記したとおり、意味については、おもに『日本方言大辞典』を参考にしたが、特に生物名(動植物名)など、把握しきれなかった場合がある。お気づきの点があれば、知らせてほしい。

また、場所については、「歴史地名データ」(5.3 節参照)に従うことを原則としたが、(4)の説明に記したように、たとえば「関西」はそこには扱われていないため別の文献を参照し、宮本又次(1969:17)『関西と関東』(青蛙房)をもとに「畿内」と同じと見なして扱う、などの処理を行っている。このような扱いについても、お気づきの点があれば、知らせてほしい。

5.2 アノテーション化本文テキストファイル (brsk-00 巻番号\_DB.txt)

5.1 節にも記したように、『物類称呼』は基本的に次のような記述を行う(説明の便宜上、 $\alpha$   $\beta$ …ではなく AB…を用いる)。

「A 見出し(=意味) B 場所 C 方言形、D 下位見出し(=意味) B 場所 C 方言形」

『物類称呼』の記述は「意味-場所-方言形」の並びになっており、言語情報が場所で分断されている。一般に方言情報は「意味-方言形-場所」のように言語情報どうしを隣接させる方がわかりやすい(表 1)。

そこで、『物類称呼』の記載順に番号を与え、その組み合わせにより以下の手順でコード化し、CSV ファイルの各行データに対し、IDにあたるコードを【巻-A-D-C-B】として付与した。

表 1 一般的な方言情報

言語情報		空間情報
A・D 意味	C 方言形	B 場所

A 見出し(現代語=意味)：巻ごとに1から順に連番を付与

D 下位見出し(現代語=意味)：Aの中に1から順に連番を付与(下位見出しがなくても1を付与)

C 方言形：見出し・下位見出しごとに1から順に連番を付与

B 場所：見出し・下位見出し・方言形ごとに1から順に連番を付与

なお、異なる見出しのもとに同等の意味が記載されている場合があるが、それらにコード上のつながりは持たせていない。

(例4) 妻 他 {ひと} の妻→1-38-1、息女 他 {ひと} の妻女→1-40-2 (いずれも巻之一)

このようにして与えたコードを【 】で括り、「国立国語研究所 日本語史研究用テキストデータ集」のテキストファイルにおける各語形の頭に付与してアノテーションを行った。

(例5) 北辰 ほくしん [北極と称するもをなしうごかぬ星なり] ○上総国にて・【1-1-1-1-1】ひとつのほし

又【1-1-1-2-1】番 {ばん} のほしと称 {しやう} す (巻之一、1丁表)

アノテーションを行ったファイルには、次のようにファイル名の後に「\_DB」を追加した(いずれも Unicode)。

元のファイル名：brsk-001.txt→アノテーション後のファイル名：brsk-001\_DB.txt

### 5.3 空間情報と空間情報ポリゴンファイル

『物類称呼』が記述する地名に対して経度・緯度の空間情報を付与するにあたっては、人間文化研究機構 (NIHU) が公開している「歴史地名データ」を活用した。このデータは、吉田東伍『大日本地名辞書』に掲載される全地名や国土地理院の古い地形図上の地名の経度・緯度 (世界測地系) をデータベース化している。

『物類称呼』データベースは、『大日本地名辞書』のデータを採用した。その結果、「摂津国」と「難波」、「京」と「畿内」と「上方」、「越後国」と「北越」のように異なる地名でも同じ位置で扱われるケースがある。

「信濃国」や「大和国」のように一定の広さを持つ令制国 (旧国名) のデータについては、GIS で利用可能なポリゴンファイルをあわせて公開した。このポリゴンファイルは ESRI ジャパンが公開しているデータ (元は鳴門教育大学の立岡裕士教授が作成) をもとにし、各令制国に分割している。ファイル形式は、シェープファイル (SHP)、GeoJson、DBS の 3 種を用意し、内容はいずれも同じである。公開にあたっては、東京地図研究社を介して、ESRI ジャパンから許可を受けた。

## 6. データベースからわかること

以下では、このデータベースからとらえられることの一部を提示する。

### 6.1 データ件数、対象場所数

『物類称呼』のデータ件数が把握できるようになった。

全データは、3502 件であり、そのうち、場所が明示されている方言データは 3461 件、場所が明示されていないなど方言以外 (諸国、所によりて、女詞、朝鮮など) も含むデータが 41 件である。

また、対象場所は、表記上の異なりでは 459 あるが、同等地を整理した異なりは 201 地点であることが明らかになった。

### 6.2 同等の意味の検索など

同等の意味のデータが別の見出しの中で扱われている場合も一括して検索できるようになった。

たとえば、「水」は巻一の見出しにあるほか、巻四の見出し「飯」の下位見出しとしても扱われている。あわせて扱うことでデータを広く扱うことが可能になった。従来の索引では巻一のみがあがっている。

また、「しなのたろー」で検索すると巻一の「夏雲」のほかにも巻二「髯虫」(けむし) にもあり、武蔵国では「髯虫」(けむし) も「入道雲」も「しなのたろー」と言うことが記載されており、同音異義語にもデータベースで気付くことが可能になった。

表 2 『物類称呼』における方言形の多い意味・対象 (方言形数 11 以上)

方言数	意味・対象	方言数	意味・対象
28	めだか	15	かじか
27	終助詞など語末の表現		多いこと
20	ひきがえる	14	二人称代名詞、きみ、あなた、おまえ
20	あさぎ	13	かわせみ
19	翁草 (おきなぐさ)	12	かいつぶり
18	ひがんばな、きつねのかみそり	11	しょうりょうばった、ばった
16	みずすまし		とうもろこし (玉蜀黍)
	あめんぼ		はい、応答詞

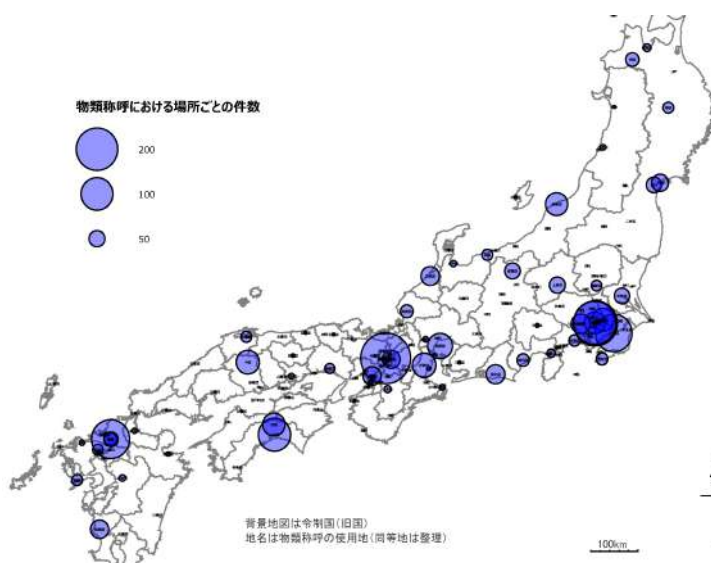


図 1 『物類称呼』における場所ごとのデータ件数

### 6.3 データのかたよりに

#### ① 方言形の多い項目（意味）

方言形番号をもとにすると、見出し（意味、対象）ごとに方言形がどれくらい掲載されているかが把握できる。表 2 のように「めだか」がもっとも多く 29 語形、「ひきがえる」(20 語形)、「あさざ」(20 語形) のような小動物や野草などに方言のバリエーションが多いことは江戸時代から変わらないことがわかる。

#### ② 場所ごとの件数

『物類称呼』全体で扱われる場所ごとの件数を集計し、地図にしたのが図 1 である。同じ位置になる場所はひとつにまとめて扱っている (5.3 節参照)。江戸と畿内の近郊が多いが、収載地の全国的なようすもわかる。

### 6.4 近世後期の方言分布

データベースの位置データを利用することで、江戸時代中期の分布を描くことができる。ここでは「かたつむり」について、江戸時代と LAJ の分布の比較を便宜上 2 図に分けて見てみよう。

「やまだにし」(隅田川) と「お一ぼろ」(下野国) は LAJ では確認できず、後に消失したと考えられる。「でのむし」(播磨国、九州) も LAJ にはないが、「でんでんむし」の仲間だとすると、LAJ の分布の中に収まっており、「でんでんむし」(畿内) と「まいまい」(周防国) も LAJ の分布から外れていない (図 2)。なお、余談ながら LAJ の東北のデデムシは陸奥国とほぼ合うことは令制国を背景とするこの分布図を描いて初めて気付いた。

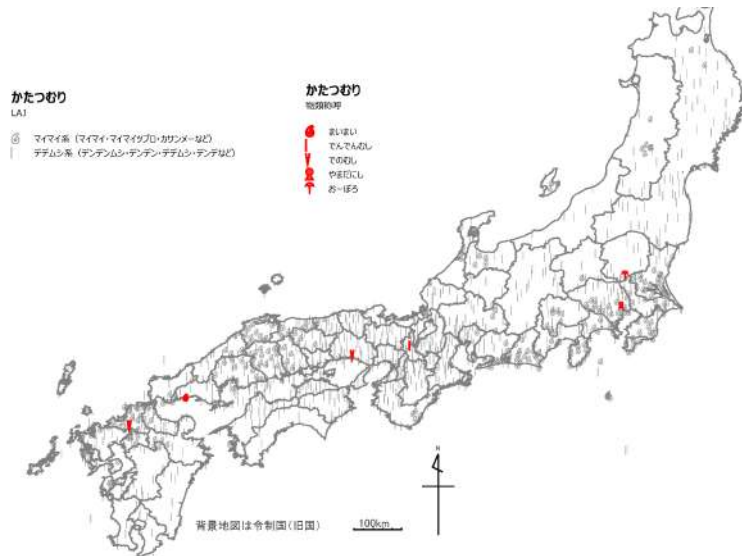


図 2 「かたつむり」の『物類称呼』と LAJ の比較(1)

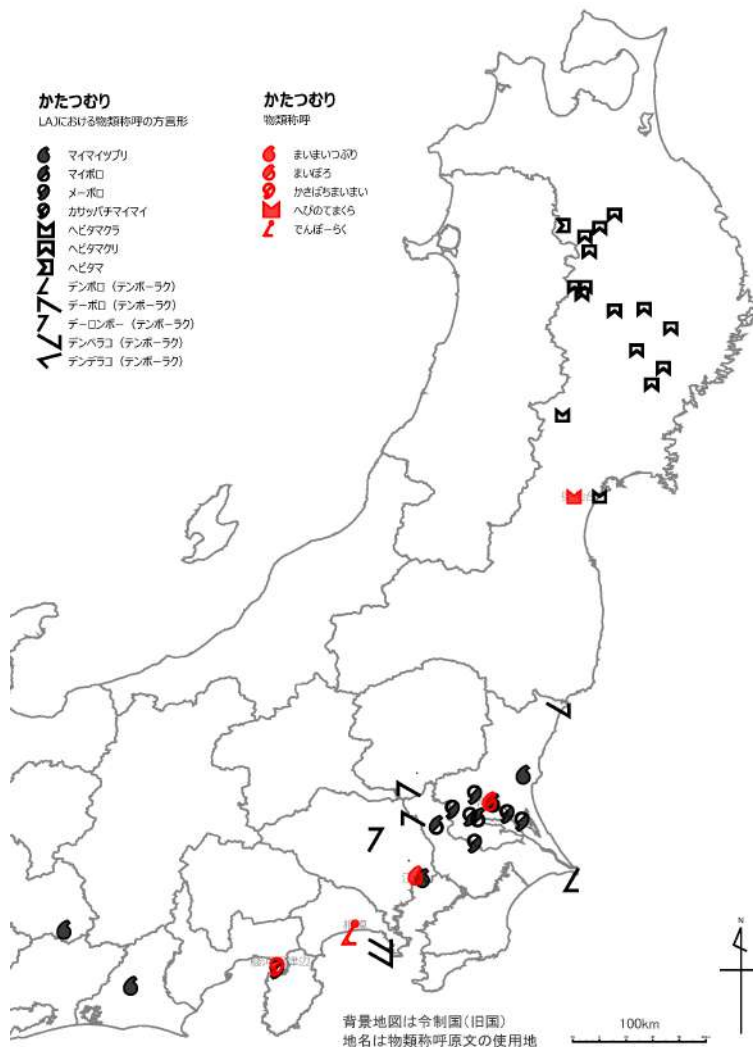


図 3 「かたつむり」の『物類称呼』と LAJ の比較(2)

図3では、「てんぼーらく」（相模国）は一致語形がLAJにはないが、「でんべらこ」などの仲間だとすると分布はあてはまっている。「へびのたまくら」（仙台）、「まいぼろ」（常陸国）はLAJと適合している。注目されるのは、「まいまいつぶり」（江戸）と「かさばちまいまい」（沼津）であり、ピンポイントで一致している。

『物類称呼』が示す江戸時代の分布と200（250）年後の現代との一致については、すでに言及がある。加藤（1973：71）は「その後約150ないし200年後の図1「日本語言語地図」と比べると、全体として非常によく一致しているのに驚かされる。」と述べ、徳川（1979：163）は『物類称呼』の記述が大局的に現在と一致することは、まことに興味深い。」と記している。これが意味するところについては、さらに考えるべきであり、他の項目についても検討が必要であるが、従来から言われていたことが地図で検証できた。

## 7. むすび

作成・公開した『物類称呼』データベースについて解説した。

データベースにすることで『物類称呼』の全体像が明瞭になり、江戸時代中期の方言データが従来よりも利用しやすくなった。

位置情報を持たせたことで、江戸時代の正確な方言分布を検討することが可能になり、従来から指摘されてきたことを再確認する形で検証できた。

とはいえ、一人で作成したデータベースであり、細心の注意を払ったつもりではあるが、誤謬が含まれている可能性は大いにある。ぜひ利用して、問題点を指摘してほしい。今後は、1年程度、個人のサイトでの公開しながら修正を重ね、その後リポジトリに登録して永続的に公開する予定である。

『物類称呼』データベース公開ページ <https://www2.ninjal.ac.jp/takoni/GISME/GISME.htm>

ダウンロードファイル名 BRSK\_yyyymm.zip（yyymm は更新年月）、ファイルサイズ 約2.4Mb

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費20K20501、国立国語研究所共同研究プロジェクト「言語資源の空間接続」による成果である。

## 参考文献

- 大田栄太郎（1941）「諸国方言物類称呼の生れるまで」『國學院雑誌』47(5)  
奥里将建（1934）「越谷吾山の伝記と業績」『国語・国文』4(12)  
小野望（1987）「『物類称呼』の地名表示について」『文献探究』20  
加藤正信（1973）「国語史と言語地理学—「蜻蛉」を例として—」『文学・語学』66  
志田義秀（1934）『越谷吾山』越谷吾山翁記念事業会  
杉本つとむ解説（1976）『物類称呼』（生活の古典双書17）八坂書房  
杉本つとむ（1979）『方言はどう探究されたか』（杉本つとむ日本語講座2）桜楓社  
田籠博（2016）「越谷吾山」『日本語学』35(4)  
田島優（1999）「『和訓栞』に見られる『物類称呼』の影響」『同朋文学』29  
東條操校訂（1941）『物類称呼』岩波文庫  
東條操編（1951）『全国方言辞典』東京堂出版  
徳川宗賢（1979）「文献国語史と方言」徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書  
山県浩（1995）「江戸共通語資料としての『物類称呼』—先行本草書類との関係性—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』44  
吉澤義則（1933）『校本物類称呼諸国方言索引』立命館出版部

## 1. はじめに

「散らかす tir-akas-u」のように接尾辞「-akas」など(以降、-(a)kas, -(a)rakas, -(i)karakasなどを総称して「一カス」)をもつ動詞はカス型動詞と呼ばれ、こと方言においては多様な意味をもっている。例えば、津軽方言のカス型動詞は意図性を強調する(坂本 2002)が、名古屋市方言のそれは非意図性を強調する(山田 1976)とされ、方言カス型動詞の用法に地域差が見受けられる。しかし、先行研究では個別地点の分析に留まっており、地域ごとの差異を傾向として指摘するものは未だない。また、意味の分析では先のように意図性に関するものは豊富であるが、それ以外の観点は十分に分析されてはおらず、検討の余地がある。そこで本研究は、(i)方言カス型動詞が地域ごとにどのような派生パターンを示すのか、(ii)接尾辞「一カス」がどのような働きをするのかを検討し、派生傾向の地域差と用法の多様性を指摘する。

## 2. 先行研究

方言カス型動詞は、津軽方言を対象とした坂本(2002)、ゴンザ資料をもとに 18 世紀薩隅方言を対象とした駒走(2017)が詳しい<sup>2</sup>。両者は概ね、中古・中世語を対象とした青木(1997)に倣う形でカス型動詞の派生元となる動詞を分類している。青木(1997)によると、カス型動詞は有対自動詞や他動詞から派生する場合、「特殊の色調」を担うこと、無対自動詞から派生する場合、派生元となる動詞に対応する他動詞の役割を担うことが指摘されており、派生元の動詞分類がカス型動詞の役割の解明に寄与することがわかる。坂本(2002)は津軽方言のカス(ガス)型動詞のほとんどが無対自動詞から派生していること、駒走(2017)は 18 世紀薩隅方言のカス型動詞の大半が有対動詞から派生していることを指摘しており、両地点の派生パターンは、有対自動詞からの派生が主となる中古のそれとも異なることが窺える。

さらに、派生元となる動詞と自他対応をなす他動詞形と、カス型動詞を比較した際に読み取れる意味、つまり、カス型動詞がもつ「特殊の色調」について、坂本(2002)はこれを「意図」的であるとし、駒走(2017)は、カス型動詞に「十分な、完全な、過度の」という意味があることから「必然的にその意図性が強調される」としている。一方で、名古屋市方言を対象とした山田(1976)はカス型動詞に「非意図の強調」が見られること、岐阜県大垣市赤坂方言を記述した杉崎(2021)は「無意図の強調」が確認できることを述べており、中古・中世や、津軽、薩隅のそれとも異なる様相を示すことがわかる。なお、阪倉(1946)や吉田(1959)は、中古においても「再肥大した形式」として「一ラカス」の存在を指摘しているが、「非意図・無意図」なる意味はないため、これは方言形が独自に獲得した意味であろうと思われる<sup>3</sup>。

以上の先行研究からは、カス型動詞の派生パターンに地域差が生じている可能性、そして、カス型動詞における接尾辞の働きの多様性が見て取れた。ただし、駒走(2017)は 18 世紀の文献調査、坂本(2002)は現代方言の内省調査であるため、通時的な変異や方法論の違いを地域的な変異と切り分けて把握することは叶わない。また、方言カス型動詞における先行研究では、地域によって「一カス」という形式が担う働きが異なっていたことから、分析にかかる観点を地域ごとに探索的に検討する必要があるだろう。

そこで、本発表では(i)においてカス型動詞の地域的な差異を、その派生パターンに見出すこと、(ii)においてカス型動詞の意図性、もしくは意図性とは別の観点を模索し、カス型動詞における接尾辞の働きを検討することで、用法の多様性について言及することを目指す。

<sup>1</sup> たがた しゅうぞう(東北大学大学院生) tagata.shuzo.q1[at]dc.tohoku.ac.jp

<sup>2</sup> 山田(1976・2001)、杉崎(2021)は、方言カス型動詞を分析しているが、派生元となる動詞の分類は行っていない。

<sup>3</sup> 山田(2001)、杉崎(2021)は「-akas」と「-rakas」を異形態として扱っている。

### 3. カス型動詞の派生パターン

#### 3.1 調査方法

はじめに、地域ごとのカス型動詞の派生パターンを検討する。用例は『日本方言大辞典』を用いて応用型、かつ方言形に特有と思われるカス型動詞を都道府県ごとに収集した<sup>4</sup>。ここで言う「方言形に特有」とは、中央語にて産出され、それが特定地点へ伝播したのではなく、方言形として独自に産出されたものを指す<sup>5</sup>。本発表では『日本方言大辞典』に立項されているカス型動詞のうち、中古・中世・近世資料にも出現するものは基本的に扱わないことで、中央語から伝播した可能性のあるカス型動詞を対象外とする<sup>6</sup>。この条件を設けることで、より共時的な分析環境を整え、派生パターンを地域差として取り出すことができると考える。なお、中央語も対象に加えれば、特定地点に見られるカス型動詞の全体像や、中央語の残存傾向などについても研究の射程となるが、本発表ではカス型動詞の派生現象に絞って扱う。また、調査地点の決定に際し、都道府県ごとにカス型動詞異なり語数の調査を行った結果、カス型動詞の異なり語数が比較的多い地域が中部と周辺部に多い傾向が読み取れた。さらに、先行研究では津軽と薩隅との間に派生パターンの差異が窺え、名古屋と岐阜の両者に中央語で見られない非意図(無意図)用法が存在することがわかっているため、本調査は東北地方、九州地方、中部地方を調査地域とする。

#### 3.2 派生パターンの地域的変異

『日本方言大辞典』より収集した応用型かつ方言に特有のカス型動詞を、地域ごとに派生元の動詞に着目して分類すると表1のようになる<sup>7</sup>。なお、語末が「一カス」となる動詞でも、派生元の判別ができなかったものや、複合や接頭辞の付与、混淆や、音韻変化の可能性のあるものは除外した。また、表1の括弧内の数値は、それぞれの動詞分類から異なり語数を割り、小数第2位を四捨五入したものである。

表1 各地域におけるカス型動詞の派生傾向

	無対自動詞	有対動詞	無対他動詞	異なり語数
東北地方	19 (59.4%)	5 (15.6%)	8 (25.0%)	32 (100%)
九州地方	11 (33.3%)	13 (39.4%)	9 (27.3%)	33 (100%)
中部地方	30 (27.2%)	34 (30.9%)	46 (41.8%)	110 (100%)

青木(1997)ではカス型動詞派生の初期段階は有対自動詞からの派生が主だったこと、また、有対自動詞や他動詞からの派生は「特殊の色調」の付与を担い、無対自動詞から

の派生は「他動詞の役割」を担うことが指摘されている。これに従えば、表1から東北・中部地方は、カス型動詞派生の初期段階である中古とは異なる派生パターンであることが読み取れ、かつ、カス型動詞の担う主な役割が、東北地方は格の増加、九州地方と中部地方は「特殊の色調」の付与が主たる役割であることが示唆できる。ただし、表1には文献調査の限界も垣間見える。例えば、いずれの地域においても無対自動詞、有対動詞、無対他動詞を派生元とするカス型動詞が多かれ少なかれ存在していることまではわかるが、主たる役割を異にする地域であっても付与する「特殊の色調」が同じであるのか、もしくは異なるのかという疑問は解決されない。文献からは把握できない意味的・統語的な側面については、臨地調査をもってして実態を把握することが求められる。

<sup>4</sup> 吉田(1959)は、語末が「一カス」となる動詞について本来型と応用型を便宜的に分類している。本発表で扱うのは、語幹末に「k」をとり、接尾辞に「-as」をとる本来型ではなく、接尾辞に「-(a)kas」「-(a)rakas」などをとる応用型である。

<sup>5</sup> 例えば、『日本方言大辞典』によると、「走らす」という意味の「はしらかす」は滋賀県や和歌山県を使用地点とするが、当該語彙は平安時代ごろに確認できる。『日本方言大辞典』に立項されている方言の中には、中央語として成立した後に特定地点まで伝播し、残存した、中央語由来のものがある。

<sup>6</sup> ただし、中古・中世・近世資料を出典とするカス型動詞であっても、『日葡辞書』などのように方言形と共通語形の区別が明記され、カス型動詞が方言形として記載されているものについては対象語彙として扱う。

<sup>7</sup> 表1における「有対動詞」は、派生元の動詞が自他対応をなすものであり、野田(1991)がいうところの「中間的なヴォイス」対立にあたる。そのため、「はしる」対「はしらかす」のような「文法的ヴォイス」対立は扱わない。また、表1は『日本方言大辞典』という様々な基礎資料を集約したデータから得られたものであり、それぞれの資料の用例数や、収集にあたる方針、語彙を収集した時期のズレなどがある。あくまでも、単純集計によるデータであることに留意されたい。

#### 4. 臨地調査の概要と分析にかかる規準

先の表1から、東北地方と中部地方は、カス型動詞派生の初期段階である中古の派生パターンとは異なることが示唆できた。そこで、方言独自の派生パターンを有する可能性のある東北地方と中部地方を調査対象とし、実際にカス型動詞がどのように使われているのかを探る。調査地点の条件は、未だカス型動詞について未調査であり、かつ地理的に他地域や他県との言語接触が生じにくいと思われる地点とし、宮城県牡鹿郡女川町(以降、女川)と、静岡県静岡市葵区井川(以降、井川)における調査を分析対象とする。それぞれの調査は2025年7月と同年8月に実施したものであり、いずれも使用語彙の確認と作例を用いた容認性判断を行った。対象語彙は『牡鹿町誌』、『史料編年井川村史』を中心に選定し、『日本方言大辞典』からも補った。話者はいずれも言語形成期をその土地で過ごしており、女川の話者は60代～80代の男性2名、女性4名、井川は80代の女性3名である。調査項目の1つである容認性判断では、話者の使用語彙ごとにカス型動詞を用いた〈自動詞文〉〈他動詞文〉〈意図性副詞を共起させた文〉〈程度副詞を共起させた文〉〈無生物主語他動詞文〉〈他動詞ではなくカス型動詞〉となる文などを提示した。そして、4段階の容認性から適するものを選択してもらい、その理由を尋ねた。

また、分析に際しては、語彙ごとに接尾辞の働きを検討することでカス型動詞に特有の意味を分析することにする。例えば、「走らす」という意味をもつ「はしらかす」の場合、形態や、意味の類似から「走る」という動詞が派生元として想定できる<sup>8</sup>。両者は語幹と屈折に分けて記述すると「hasir-u」と「hasirakas-u」のようになり、「hasirakas-u」から「hasir-u」を差し引いた場合、「akas」を取り出すことができる。本発表では、これを接尾辞とする。なお、カス型動詞の派生元として想定できる動詞の認定規準は、特定のカス型動詞が存在する地点における方言形を参照し、語幹を共有、かつ意味が類似するものであることとする<sup>9</sup>。以下では上記の規準をもって女川、井川の接尾辞の働きを検討する。

##### 4.1 女川にみられるカス型動詞と接尾辞の働き

はじめに、女川の調査結果を概観する。右の表2では、話者が〈使う〉と回答したものを「○」、〈使わないが理解できる〉を「△」、〈わからない〉を「×」、調査ができなかった項目を「—」でそれぞれ示している。また、表2における1Fは80代女性、2Mは80代男性、3M

表2 女川の対象語彙

対象語彙	派生元の対応	意味	1F	2M	3M	4F	5F	6F
わねがす(wane-ru)	無対自動詞	はやしてる、 はずかしがらせる	×	○	—	×	×	×
ひからがす(hikar-u)	無対自動詞	光るようにする	○	○	—	×	○	×
		誇示する	×	△	—	×	○	△
かれらがす(karer-u)	有対自動詞	枯らす	×	○	○	△	△	△
こげらかす(koge-ru)	有対自動詞	焦がす	○	○	△	×	○	○
ねしえるがす(nesyē-ru)	無対他動詞	幼児に添い寝して 寝かしつける	○	○	—	△	×	×
うっちゃらがす(utqyar-u)	無対他動詞	ほったらかす	×	○	—	×	○	×
わねらかす(?)	?	仲間はずれにする	×	○	—	△	△	△

は70代男性、4Fは70代女性、5Fは70代女性、6Fは60代女性であり、1から6を年齢降順で割り当て、男性にM、女性にFを付している。対象語彙欄の括弧内には派生元として想定できる動詞を「語幹—屈折」で示している。なお、「わねらかす」については、派生元が判断できなかったため、「？」で示している。表2をみると、比較的若い話者は〈使う〉との回答が若干減る傾向が窺える。「わねがす」や「ねしえるがす」については1Fと2Mだけが〈使う〉と回答しており、女川において失われつつある語彙の可能性があり、カス型動詞全体の使用率自体が下がってく可能性も考えられる。〈使う〉もしくは〈使わないが理解できる〉との回答が3名以上得られたのは、「ねしえるがす」「ひからがす」「わねらか

<sup>8</sup> 本発表では基本的により形態が複雑、有標であるカス型動詞を基本的に派生先とする考えに基づいて分析するが、橋本(2001)では「ワラケル」は「ワラカス」より派生した」との指摘があり、カス型動詞が派生元となる例もある。

<sup>9</sup> ただし、当該地点の方言形に派生元として想定できる動詞が認められない場合、当該都道府県内の方言形、中央語形、共通語形も参照し、派生元として想定できる動詞を検討する。

す」「かれらがす」「こげらかす」であり、これらの語彙は女川において比較的使用される、もしくは、理解される語彙であるといえる。本発表では、これらの語彙から、容認性判断の調査において時間の都合上、調査ができなかった項目のある「わねがす」「ねしえるがす」を除き、「ひからがす」「こげらかす」「かれらがす」について接尾辞の分析を行うことにする。

以下の例文は、特に断らない限り容認性が高い、もしくは意味の解釈が可能であるとされた例である。

(1)a. 皿がひかる。

b. 一郎が皿をひからがす。

(1b)の「ひからがす hikar-agas-u」は、無対自動詞「ひかる hikar-u」から派生したと思われるカス型動詞で「光るようにする」という意味をもつ。(1a)の「ひかる」は一項動詞であり、主格のみをとる一方、(1b)の「ひからがす」は主格、対格をとる二項動詞として使用できる。「ひからがす」における接尾辞「-agas」が無対自動詞につくことで格増加を引き起こしていることが確認できる。

(2) こがしたんじゃなくて、こげらかしたんだ。

(2)の「こげらかす koge-rakas-u」は、有対動詞「こげる koge-ru」から派生したと思われるカス型動詞で「焦がす」という意味をもつ。辞書的な意味では、他動詞「こがす」との違いがわかりにくいのが、話者に容認性判断の理由を尋ねると、「わざと焦がしたという意味になる」との回答や、「自然に焦げたんじゃないで、わざとこがしたんだ」という意味で「人為的な感じ」がするとの回答、「あえて、わざとわざと焦がしたという意味になる」との回答がそれぞれの話者から得られた。「こげらかす」を使用語彙とする全ての話者において、「こがす」よりも「こげらかす」は意図的な動作であるといえる<sup>10</sup>。「こげらかす」における接尾辞「-rakas」は、意図性を意図的な方向へ強調する働きをしていると考える。

(3)a. からしたんじゃなくて、かれらがしたんだ。

(3)の「かれらがす kare-ragas-u」は、「かれる karer-u」から派生したと思われるカス型動詞で「枯らす」という意味をもつ。先の「こげらかす」と同様に、(3)の「他動詞ではなくカス型動詞」という構造の文が容認された。「かれらがす」を理解語彙としてもつ話者に容認性判断の理由を尋ねると、「わざとからしたのではなく、うっかりしていたのだ」という意味になるとの回答が得られた。また、容認性をやや低く判断した別の話者は「屁理屈ではいかも知れない」と回答した。これは、「わざとではなく、うっかりしていたのだ」という文意から来る言い訳がましさに対してのものであり、他動詞「からす」に比べてカス型動詞「かれらがす」は非意図性を強調する動詞であるといえるだろう。以上より、「かれらがす」における接尾辞「-ragas」は、意図性を非意図的な方向へ強調する働きをしていると考える<sup>11</sup>。

## 4.2 井川にみられるカス型動詞と接尾辞の働き

続いて、井川の調査結果を概観する。次頁の表3は話者が〈使う〉と回答したものを「○」、〈使わないが理解できる〉を「△」、〈わからない〉を「×」でそれぞれ示したものである。表3における7F、8F、9Fはいずれも80代女性であり、7から9を年齢降順で割り当てた。また、使用語彙の括弧内には派生元として想定できる動詞を示している。表3の通り、〈使う〉との回答が得られた語彙は「ぐらかす」「はならかす」「まわらかす」「こじくらかす」「ほめからかす」である。〈使わないが理解できる〉という語彙は比較的多く、年齢や性別などの属性や、対象語彙の意味が攻撃的なもの(例えば、「もぐらかす」など)が〈使わないが理解できる〉の回答を増やした可能性もある。また、〈わからない〉と回答があつ

<sup>10</sup> 「こげらかす」は「一郎がうっかり魚をこげらかした」のように、意図性副詞「うっかり」と共起可能である。

<sup>11</sup> 理解語彙として「かれらがす」をもつ話者で、「刈った草を捨てるためにかれらがす」のように意図的な動作としても使えとする話者が1名いた。意図性には個人差や、年齢差があるのかもしれないが、4名中3名の話者は「かれらがす」を非意図的に理解していることや、「わざと枯らすことは言えない」との回答や「失敗や、そうしようと思っていなかったのに」という状況で使用するとの回答が得られたため、本発表では「かれらがす」を非意図的な動詞として扱う。

た語彙はゴシックで示した自動詞用法が想定される語彙に多い。カス型動詞において、自動詞用法が非常に周縁的であるために、使用語彙になりにくく保存されにくい可能性があるだろう。

以下では、使用語彙であると確認が取れたものについて、接尾辞の働きを分析していく<sup>12</sup>。

(4)a. 足がぐれた。

b. 一郎が足をぐらかした。

(4b)の「ぐらかす gur-akas-u」は、無対自動詞「くれる gure-ru」から派生したと思われるカス型動詞で「くじく」という意味をもつ。(5a)の「くれる」は一項動詞であり、主格のみをとる一方、(5b)の「ぐらかす」は主格、対格をとる二項動詞として使用できる<sup>13</sup>。「ぐらかす」における接尾辞「-akas」は無対自動詞につくことで格増加を引き起こしたと考える。

以下の(5)に用いた「はならかす hanar-akas-u」は、有対自動詞「はなれる hanare-ru」から派生したと思われるカス型動詞で「離す」という意味をもつ。

(5)a. 先生が一郎と花子をはならかす。

b. とある事情が一郎と花子をはならかす。

先の女川における「こじらかす」や「かれらがす」では、接尾辞の働きを意図性の強調として分析した。しかし、「はならかす」については、「はなしたんじゃなくて、はならかしたんだ」という作例は容認されず、容認性判断の理由を尋ねても意図性に関する言及は得られなかった。さらに、(5b)のように無生物主語他動詞文は容認されたが、これは意志が介在し得ない主格と「はならかす」が共起することを示すものであり、「はならかす」が非意図的な動詞であることを証明するわけではない。そのため、「はならかす」については意図性の強調を積極的に認められないといえる。では、他動詞「はなす」とカス型動詞「はならかす」にはどのような違いがあるのだろうか。

ここでは、「他動詞形」と「自動詞+使役形」を例にとって検討してみる。(5b)において「はならかす」は、直接的に「はなす」というよりは「はなれさせる」に近い意味で使用されているように見える。(5b)における「とある事情が」は主格ではあるが、隔離という動作を直接実行しているわけではないためである。他動詞形「はなす」は直接的に2人を隔離することができる一方、自動詞+使役形「はなれさせる」は主格が対格に「はなれる」ように働きかけはするものの、「はなれる」という動作を行うのは一郎と花子であり、ここに間接性が窺える。もし仮に「はならかす」と「はなす」が、「はなれさせる」と「はなす」の関係と似ているのであれば、青木怜子(1977)が指摘する「他動詞」と「自動詞+使役」の違いとしてカス型動詞と他動詞の違いを説明できる可能性があるだろう。そうすると、「はならかす」における

表3 井川の対象語彙

対象語彙	派生元の対応	意味	7F	8F	9F
ぐらかす(gure-ru)	無対自動詞	くじく。	○	○	○
こじくらかす(kojikure-ru)	無対自動詞	話や事態を悪い方へねじってもつれさせる。こじらせる。病気をこじらせて悪くする。	○	○	○
もぐらかす(mogur-u)	無対自動詞	頭をつかんで水の中に突っ込む。	△	△	△
ころばかす(korob-u)	無対自動詞	転倒させる。転がす。倒す。	×	×	×
まーかす(ma-u)	無対自動詞	舞い飛ばす。舞わせる。	×	△	×
とばかす(tob-u)	無対自動詞	急いで走る。一生懸命走る。	×	△	×
とびからかす(tob-u)	無対自動詞	疾走する。	×	△	×
のたからかす(notar-u)	無対自動詞	腹ばいになる。はう。	×	×	×
しゃれからかす(syare-ru)	無対自動詞	おめかしをする。	×	△	×
たらかす(tare-ru)	有対自動詞	垂らす。	×	×	×
はならかす(hanare-ru)	有対自動詞	離す。	○	○	△
はなれかす(hanare-ru)	有対自動詞		△	△	△
まわらかす(mawar-u)	有対自動詞	回らせる。回転させる。	○	○	○
ほめからかす(home-ru)	無対他動詞	しきりに褒める。褒めちぎる。	○	○	○
つつからかす(tuk-u)	無対他動詞	ひどく突く。突きまくる。押し倒す。突き飛ばす。	△	△	×
おしからかす(os-u)	無対他動詞	強く押す。押し倒す。	△	△	△
へしからかす(hes-u)	無対他動詞	押さえる。	△	×	△
ぬりからかす(nur-u)	無対他動詞	盛んに塗る。厚化粧する。	△	△	△
けっからかす(ker-u)	無対他動詞	蹴る。	△	△	△
ふんがらかす(fum-u)	無対他動詞	足で踏みにじる。踏み散らす。	×	△	×

<sup>12</sup> 「こじくらかす」は、使用語彙であるとの確認がとれているが、派生元として想定できる動詞「こじくれる」が話者から確認できなかったため、本発表では言及を控えることにする。

<sup>13</sup> (4b)は「一郎が(一郎の)足をぐらかした」なのであって、動詞の表す作用が主格の外には及ばない。これは、仁田(1982)がいうところの「再起用法」であると考えられ、他動詞らしい他動詞ではない点に留意されたい。

「-akas」という接尾辞は、現代日本語共通語でいうところの使役接辞がもつ文法的な意味に近い働きをし、動作に間接性を付与していると考えられる。これは坂本(2001)における「意志動詞から派生したガス型動詞は間接的な動作」を表すという分析と符合する。また、阪倉(1946)が指摘するように、「一カス」が特定の動詞語幹末と「-ス」の異分析の結果生み出された、肥大膠着したものであることを踏まえると、「一カス」が使役に接近する領域を担い得る可能性は十分にある。実際、中條(1983)は静岡県小笠原郡にて「使役・受身にいわゆるカス形が認められ、行カカス・食ベラカス・行カカセラレル・食ベラカ(カ)セラレルのように言う」とあり、『方言文法全国地図』にも、第118図「開けさせる」では「akakasu」、第119図「書かせる」では「kakakasu」が静岡県中部に確認できる。そのため、静岡県の一部地域の「一カス」という形式は、使役接辞として機能していたといえるだろう。しかし、本調査が対象とした井川では「はならかす」に与格をとる用法は確認できなかった。二項動詞である点をもって統語的には他動詞に近く、間接的な動作である点をもって意味的には使役に近い形式であると思われる。

続いて、同じく意図性の強調が積極的に認められない「まわらかす」について検討する。

- (6)a. 一郎がコマをまわらかす。  
 b. 一郎がコマを思いっきりまわらかす。  
 c. \*一郎がコマをそっとまわらかす。

(6)の「まわらかす mawar-akas-u」は有対自動詞「まわる mawar-u」から派生したと思われるカス型動詞で「回らせる、回転させる」という意味をもつ。(6a)(6b)は容認された一方で、(6c)は一切容認されなかった。「はならかす」の接尾辞「-akas」は使役接辞に似ていることを指摘したが、(6a)にて意志をもたない「コマ」を対象にとる例が容認された。早津(2004)では、自動詞+使役形はもっぱら意志をもつ主体を対格にとることが指摘されており、「コマをまわらせる」のような自動詞+使役形の対象に無生物をとると基本的に容認性が低くなるはずである。しかし、(6a)は容認されており、対象の意志の有無に制限がない点をもって、使役らしいというよりは他動詞らしことが窺える。

そして、副詞との共起関係を調べた(6b)(6c)は「思いっきり」を用いた(6b)のみ容認され、働きかけの程度を強める副詞と共起することがわかる。他動詞「まわす」ならば、「そっとまわす」ことも「思いっきりまわす」ことも可能であろうが、「まわらかす」では「思いっきり」としか共起できない。このことから、「まわらかす」の接尾辞「-akas」は、松本(1977)が指摘するような、働きかけの「強調」として機能している可能性が考えられる。ただし、話者は「そっとだったら回らない」という理由で(6c)が容認できないと回答しており、宮島(1985)が検討しているような「結果性」の含意が影響している可能性も考慮すべきであろう。例えば、「コマをまわしたけど、(うまく)まわらなかった」という例が容認できるように、他動詞「まわす」は、「コマ」へ働きかけはするものの、「コマがまわる」という結果事態までは含意しない。そのため、先の例のように言語情報上キャンセルが可能である。逆説的に「まわらかす」それ自体に結果性が含意されるならば、「そっと」を用いると「コマ」がうまくまわらなくなり、達成されるべき結果事態が成就しない可能性がある。それ故に(6c)が容認されなかったのかもしれない。「まわらかす」における接尾辞「-akas」の働きは、現段階で明言はできないが、「強調」もしくは「結果性の付与」、またその両方である可能性が高い。今後の課題として、追加調査を急ぐこととする。

最後に、杉崎(2021)にて「徹底(～しまくる)」という意味が指摘されている接尾辞「-(i)karakas」についても、広義のカス型動詞派生接辞として扱い、検討を行う<sup>14</sup>。

- (7)a. 一郎が花子をほめからかす。  
 b. <sup>??</sup>一郎が花子を盛大にほめからかす。  
 c. ほめたんじゃなくて、ほめからかしたんだ。

<sup>14</sup> 「一カラカス」については山田(1976)にも、「ヘラカラカス」「シナカラカス」が指摘されている。

(7)の「ほめからかす home-karakas-u」は無対他動詞「ほめる home-ru」から派生したと思われるカス型動詞で「しきりに褒める、褒めちぎる」という意味をもつ。(7a)に示す通り他動詞文は成立する一方で、(7b)のように「盛大に」を加えた場合、容認性が下がる。(7b)の容認性が下がった理由としては、「ほめからかす自体に強い意味があるから「盛大に」がいない」や、「皮肉っぽさがでてしまう」との回答が得られた。このことは、「ほめからかす」それ自体に程度の強さが内在し、あえて働きかけの程度を強める副詞を用いることで、かえって容認性が低くなることを示しているのだろう。また、(7c)の使い方としては、「ただ相手を持ち上げただけ」の場合や、「意図的に揶揄するなら使える」とのことであった。カス型動詞「ほめからかす」は他動詞「ほめる」よりも、その動作が強調されており、また、行き過ぎる動作であるが故に、「マイナス評価」を伴う場合があるのだと考えられる<sup>15</sup>。

## 5. おわりに

本発表では、(i)方言カス型動詞が地域ごとにどのような派生パターンを示すのか、(ii)接尾辞「一カス」がどのような働きをするのかを検討し、派生傾向の地域差と用法の多様性を指摘することを目指した。(i)では、東北地方、九州地方、中部地方のいずれにおいても派生元となる動詞の傾向が異なり、東北地方は無対自動詞、九州地方は有対動詞、中部地方は無対他動詞からの派生がそれぞれ多いことを示唆し、東北地方と中部地方は中古における派生パターンと大きく異なることを指摘した。また、(ii)では、接尾辞の働きをカス型動詞に特有の用法として取り出すことで、以下表4のように接尾辞の働きの多様性を示した。

表4 カス型動詞における様々な接尾辞の働き

地点	カス型動詞	派生元の動詞	派生元の対応関係	接尾辞	接尾辞の働き
女川	ひからがす hikar-agas-u	hikar-u	無対自動詞	-agas	格増加
	こげらかす koge-rakas-u	koge-ru	有対自動詞	-rakas	意図の強調
	かれらがす kare-ragas-u	kare-ru	有対自動詞	-ragas	非意図の強調
井川	ぐらかす gur-akas-u	gure-ru	無対自動詞	-akas	格増加
	はならかす hanar-akas-u	hanare-ru	有対自動詞	-akas	間接性の付与
	まわらかす mawar-akas-u	mawar-u	有対自動詞	-akas	?働きかけの強調/ ?結果性の付与
	ほめからかす home-karakas-u	home-ru	無対他動詞	-karakas	働きかけの強調, マイナス評価

そして、表4の分析を地域ごと、派生元の動詞ごとにまとめると、以下の(8)と(9)のようになる。

- (8) a. 無対自動詞につく「-agas」は格増加を引き起こし、一項動詞を二項動詞にする。  
 b. 有対自動詞につく「-rakas」「-ragas」は意図性を強調することがある。  
 ただし、意図的な方向と非意図的な方向のいずれに強調をするかは語彙によって異なる。
- (9) a. 無対自動詞につく「-akas」は格増加を引き起こし、一項動詞を二項動詞にする。  
 b. 有対自動詞につく「-akas」は間接性を付与することがある。  
 また、働きかけの程度を強調、もしくは、結果性の付与として機能している可能性もある。  
 c. 無対他動詞につく「-karakas」は働きかけの程度を強調することがある。  
 また、その程度の甚だしさからマイナス評価を付与することもある。

無対自動詞からの派生である(8a)(9a)は両地点で共通するが、有対動詞からの派生である(8b)(9b)

<sup>15</sup> 松本(1977)は、「マイナス評価」という表現価値が平安初期から、「強調」という表現価値が院政期から確認できることを指摘しており、通時的な発生順序は「マイナス評価」が先である。しかし、「ほめからかす」については、マイナス評価を伴わずに使用できることを確認したため、「強調」を基本とし、マイナス評価をも表し得る動詞であると判断した。

は地点によって異なる様相を示し、接尾辞の働きに多様性が認められる。女川の(8b)では、接尾辞が意図性の強調を担っていることを指摘したが、津軽方言における意図の強調(坂本 2002)、名古屋市方言における非意図の強調(山田 2001)、赤坂方言における「一カス」が意図、「一ラカス」が無意図の強調(杉崎 2021)とも異なり、語彙によって意図、非意図のいずれを強調するかが異なる結果となった。

そして、井川における(9b)では「-akas」という接尾辞が現代日本語共通語における使役接辞に近い働きをしていることが窺えた。しかし、与格をとる例が容認されなかったことや、無生物を対格にとることから、他動詞形に近い側面が確認できた。中條(1983)が指摘する静岡市小鹿方言の「一カス」については使役接辞と重なるところが多いものである可能性は高いが、井川方言における接尾辞「-akas」は、単純に現代日本語共通語における使役接辞と同一視することはできない。カス型動詞は他動詞形とも使役形とも異なる領域を担っており、注目に値する動詞群であるといえるだろう。また、井川では「とばかす」や「しゃれからかす」など、自動詞用法が想定されるカス型動詞が理解語彙として存在していた。従来カス型動詞は、他動詞化方向への派生のみが言及されてきたが、特定地点においては、何らかの「特殊の色調」を付与させた自動詞を派生させる現象も担っている可能性があるだろう。

中古に端を発するカス型動詞派生は、伝播と受容の過程で、その土地における動詞語彙の自他対応関係やヴォイス体系に応じ、どのような派生パターンで、どのような「特殊の色調」を付与したいのかが異なるために、接尾辞が多様な働きをもち、カス型動詞の用法を多様にしているのだと思われる。地域ごとの語彙体系と文法体系を詳細に把握し、カス型動詞との関係を探ることで、語形成の地域的な志向性の片鱗をカス型動詞に求められる可能性もあるだろう。

本発表はあくまでも、調査することができた語彙に限った分析結果を示すものであり、特定地点におけるカス型動詞の接尾辞の働きとして一般化することはできなかった。また、表1にて示唆した派生パターンと各地点に見られる接尾辞の働きについても、未だわからないところが多い。井川に見られた自動詞用法をもつカス型動詞の調査や、結果性の付与を調査するテストなどを中心に、さらなる調査を行い、かつ、調査地点を増やすことでより精緻な分析を目指したい。

## 参考文献

- 青木博史(1997)「カス型動詞の派生」『国語学』188、国語学会、pp. 40-55。/青木怜子(1977)「使役—自動詞・他動詞との関わりにおいて—」『成蹊国文』10、成蹊大学、pp. 26-39。/駒走昭二(2017)「ゴンザ資料におけるカス型動詞」『日本語の研究』13(4)、日本語学会、pp. 35-50。/阪倉篤義(1946)「接尾語の一考察」『国語・国文』15(11)、京都大学、pp. 1-29。/坂本幸博(2002)「津軽方言のカス(ガス)型動詞」『日本文学研究』54(1)、関西学院大学日本文学会、pp. 1-22。/杉崎好洋(2021)『岐阜県大垣市赤坂方言の記述的研究』三恵社/中條修(1983)「静岡県の方言」『講座方言学6 中部地方の方言』、国書刊行会 pp. 141-176。/仁田義雄(1982)「再帰動詞、再起用法—Lexico-Syntaxの姿勢から—」『日本語教育』47、日本語教育学会、pp. 79-90。/野田尚史(1991)「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版、pp. 211-232。/橋本行洋(2001)「カス型動詞の一展開：ワラカスの成立からワラケルの派生へ」『語文』75-76、大阪大学国語国文学会、pp. 97-106。/早津恵美子(2004)「使役表現」『朝倉日本語講座6』朝倉書店、pp. 129-150。/松本なおみ(1977)「接尾語「=かす」の表現価値」『成蹊国文』11、成蹊大学文学部日本文学科、pp. 28-35。/宮島達夫(1985)「ドアをあけたが、あかなかった—動詞の意味における〈結果性〉—」『計量国語学』14(8)、計量国語学会、pp. 335-353。/山田達也(1976)「意義素研究ノート(3)派生語尾「一らかす」の意味分析—名古屋方言—」『名古屋市立大学教養部紀要人文社会研究』20、名古屋市立大学教養部、pp. 19-29。/山田達也(2001)「名古屋方言における「ラカス」派生動詞の形態的分析」『名古屋・方言研究会会報』18、名古屋・方言研究会、pp. 1-9。/吉田金彦(1959)「口語的表現の語彙『一かす』」『国語国文』28(4)、臨川書店、pp. 209-225。

# 上方古典落語に使用されている打消しの助動詞の特徴 —マクラ部と本題部を比較する—

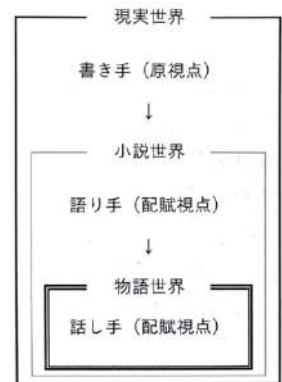
安井 寿枝<sup>1</sup>

## 1. 目的

落語を対象とした方言研究は、本題部を中心に行われることが多い。しかし、落語が演じられる場面では本題部の前に演者から観客へ向けたマクラ部が挿入される。マクラ部と本題部では話し手と聞き手との関係や語りの枠組みが異なるため、両者の方言形には差異が生じる可能性がある。そこで、本発表では、古典落語を方言資料として扱うための前提を確認するために、上方古典落語における打消しの助動詞の使用について、マクラ部と本題部を比較して、語用論的、統語論的な特徴を明らかにしたい。

## 2. 落語の構成

落語は、「マクラ」「本題」「サゲ」で構成されている。文化デジタルライブラリーの落語の説明によれば、「マクラ」は世間話や本題と関連する小咄で「観客に自然と落語の世界に入ってもらう役割を果たします」とある。「サゲ」は本題の最後に締めくくる洒落や語呂合わせ、機転の利いた言葉とされている。安井（2024b）では、落語の構成を小説の会話文について提案した「虚構の枠組み」（安井 2024a）に照らし合わせて、「マクラ部」「本題・地の文」「本題・会話文」に分けた<sup>2</sup>。虚構の枠組みを応用して落語における語りの枠組みを示すと、「マクラ部」と「本題・地の文」は「落語世界（小説世界）」の「語り手」である演者から観客へ向けられた語り、「本題・会話文」は「物語世界」の「話し手」である登場人物から登場人物へ向けられた語り、あるいは登場人物の独り語り（独り言）と見なすことができる。



【図】虚構の枠組み

## 3. 対象資料と先行研究

対象とした資料は、1995年から2001年に演じられた音声落語7本である。詳細を【表1】に示す。

【表1】音声落語資料情報<sup>3</sup>

番号	演目	演者	会場	日程
01	高津の富	2代目笑福亭松之助	大阪厚生年金会館（NHK「日本の話芸」）	不明（2001年2月17日放送）
02		6代目笑福亭松喬	東京国立演芸場（第5回東西三人会）	1997年10月14日
03		月亭八方	大阪厚生年金会館（NHK「日本の話芸」）	不明（1996年9月14日放送）
04	くしゃみ講釈	3代目笑福亭仁鶴	大阪厚生年金会館（NHK「日本の話芸」）	不明（1995年12月22日放送）
05		6代目笑福亭松喬	ワッハ上方演芸ホール（第9回松喬独演会）	1997年10月31日
06		4代目桂福団治	大阪・メルパルクホール（NHK「日本の話芸」）	不明（1995年2月19日放送）
07		桂吉朝	大阪厚生年金会館（NHK「日本の話芸」）	不明（2000年2月12日放送）

<sup>1</sup> やすい かずえ(関西外国語大学) k-yasui@kansai-gaidai.ac.jp

<sup>2</sup> サゲは演目によって、本題・地の文になる場合と本題・会話文になる場合があるが、会話文であっても観客へ向けて発しているように演じられることが多い。

<sup>3</sup> NHKの「日本の話芸」は、NHKアーカイブス学術利用トライアル2022年度後期公募に採択されて閲覧したものである。松喬のものは、すべてYouTube「六代目笑福亭松喬落語公式チャンネル」に公開されているものである。

安井（2024b）では、【表 1】と同じ資料を用いて、原因理由の表現および断定の普通体と丁寧体について、語りの枠組みに応じて脚色度に異なりがあることが示された。このことから、打消しの助動詞においても語りの枠組みに応じた異なりがあると推測される。さらに、安井（2024b・2024c）では、5代目笑福亭松鶴の口述速記本『上方はなし』に収録されている「高津の富」（1939年）と「くしゃみ講釈」（1940年）との比較を行い、原因理由の表現に笑福亭一門の特徴が表れていることが示されたため、打消しの助動詞においても速記本との比較を行う<sup>4</sup>。

#### 4. 特徴

確認された打消しの助動詞は、ン・ズ・ヘン・ヘ・エヘン・エヘ・イデ・ナイ・マイである。打消しの過去では、ナンダ・ンカッタ・エヘンカッタ・ナカッタが確認された。

##### 4.1 ン

全体を通してもっとも使用数の多いのがンである<sup>5</sup>。使用数一覧を【表 2】に示す。番号は【表 1】と同じであり、00は速記本を表す。用例がない場合は空欄とした（以下同じ）。

【表 2】 ンの使用分布

演目 番号	高津の富				くしゃみ講釈				
	00	01	02	03	00	04	05	06	07
マクラ部		6	2	6		4	5		
本題・地の文			1		1	1	1		
本題・せりふ	27	36	32	39	20	24	27	12	25

速記本、音声落語ともに本題・せりふにンがもっとも多い。それぞれの統語関係を【表 3】に示す。横軸は活用形、縦軸が前接の形式である。

【表 3】 ンの統語関係

演目 番号	高津の富									くしゃみ講釈											
	00		01		02		03			00		04		05		06			07		
	止	体	止	体	止	体	止	体	用	止	体	止	体	止	体	止	体	用	止	体	
マ	未		5	1		2	3	3			4	4	4	1							
地	未				1					1		1		1							
せ	未	18	7	21	15	21	11	25	12	1	9	6	12	12	18	9	7	4	1	18	7
	用	2									5										
	テ							1													

活用形は終止形がわずかに多い。前接は未然形接続が多い。未然形以外では、速記本の本題・せりふにおいて連用形接続、音声落語 03 の本題・せりふにおいてテ形接続が確認される。用例は以下のとおりである。用例には、括弧内に番号と発話者<sup>6</sup>を示す（以下同じ）。

- (1) 手でかくのやない、筭でかきんか、(00 新町の女)
- (2) 早う行きんかいな、(00 新町の女)

<sup>4</sup> 速記本は、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション TeaPot に公開されている原本を使用した。ただし、速記本のマクラ部は、「エ、一席お笑ひを申し上げます」のような形式のみで打消しの助動詞が使用されていないため、本題部のみを比較する。

<sup>5</sup> 当為表現は別に扱う。以下同じ。

<sup>6</sup> 登場人物の名前は速記本を基本とした。

- (3) コレー一寸待ちんか (00 清やん)
- (4) オイ肝心の物を貰ひんか (00 清やん)
- (5) 一寸待ちんか、(00 清やん)
- (6) コレ待んか、(00 清やん)
- (7) 肝心の仕事をしんか (00 清やん)
- (8) あほなこと言うてんと (03 新町の女)

連用形接続はすべて命令表現である。(4)と同様の箇所を音声落語で確認すると、「貰わんかい」(04・05)「貰わんかいな」(06・07)のように未然形接続になっている。村上(2023:215,218)には近世前期から「未然形+ンカ」形があること、近世後期に「連用形+ンカ」形が成立したことが述べられているため、「貰わんかい」などは音声落語で新しい方言形が定着したのではなく、一時期発生した連用形接続のンカが使用されなくなった結果と考えられる。また、(8)と同じせりふを速記本および音声落語01・02で確認すると、すべて「何も食べんと」になっているため、テ形接続は動詞の傾向と考えられる<sup>7</sup>。

#### 4.2 ズ

使用数一覧を【表4】に示す。用例がある場合、「ズ／ヌ／ネ／ナ」の順に使用数を示した。

【表4】ズの使用分布

演目 番号	高津の富				くしゃみ講積				
	00	01	02	03	00	04	05	06	07
マクラ部							0/0/0/1		
本題・地の文					1/1/0/0				0/1/0/0
本題・せりふ	3/1/0/0		1/0/0/0	1/0/0/0	2/1/1/0		2/0/0/0		

速記本がわずかに多い。仮定形は速記本がネ、音声落語がナになっている。音声落語では、マクラ部にズの使用がないこと、速記本のズが音声落語ではンに変更されていることから、音声落語においてズは形式化<sup>8</sup>していると考えられる。速記本と音声落語に共通するズの使用は以下のとおりである。

- (9) 講積場いらぬ親爺の捨て場所とか申しまして (00 語り手) 07 と共通
- (10) 此講積を聞かずんば有る可らず、(00 後藤一山) 05 と共通

#### 4.3 ヘン・ヘ・エヘン・エヘ

ンの次に多いのがヘンである。使用数一覧を【表5】に示す。用例がある場合、「ヘン／ヘ／エヘン／エヘ」の順に使用数を示した。

【表5】ヘン系の使用分布

演目 番号	高津の富				くしゃみ講積				
	00	01	02	03	00	04	05	06	07
マクラ部						1/0/1/0	9/0/0/0	2/0/1/0	
本題・地の文								1/0/0/0	1/0/0/0
本題・せりふ	2/0/0/0	3/0/0/0	2/0/0/0	0/1/0/1	4/0/1/0	4/1/1/0	9/1/0/0	7/2/1/0	13/1/1/0

<sup>7</sup> 音声落語には「呼び止めてんかいな」などテンカの形式も確認されるが、打消しの助動詞としなかった。

<sup>8</sup> 創作物において、特定の方言形が取捨選択されて使用されるようになること(安井 2024c)。

速記本、音声落語ともに本題・せりふにヘン系が使用されており、マクラ部や本題・地の文の使用には演者によって偏りがみられる。ヘン系はすべて未然形接続だが、五段動詞と上一段動詞においてeヘンが確認できる。用例は以下のとおりである。

- (11) 居寝ぶるねやあれへんやないか (02 新町の女)
- (12) 無かったら何もなれへん (00 清やん)
- (13) 早う行て前へ行かんと何もなれへん、(00 清やん)
- (14) 人に悟られたら何もなれへんがな、(00 清やん)
- (15) 口で言わなでけへんがな (05 語り手)
- (16) 相手に持ってもらわなんたらでけへん言うて (05 語り手)
- (17) 客席誰もおれへんて (05 語り手)
- (18) あれへん (05 喜いやん)
- (19) 好きになったらあけへんやないかい (05 清やん)
- (20) なんでんねんやあれへん (07 喜いやん)
- (21) うち商売なれへんがな (07 八百屋の親父)
- (22) んなもんあれへんがな (07 喜いやん)
- (23) いや、それがあれへんねん (07 喜いやん)
- (24) 胡椒なかったらあけへん (07 清やん)
- (25) 収まってんねやあれへんで (07 清やん)
- (26) へやあけへんがな (07 清やん)
- (27) 聞き入ってんねやあれへんがな (07 清やん)

速記本のヘンはすべてeヘンであるのに対して、音声落語では02と07を除いてaヘンが優勢である。エヘンの使用は速記本と音声落語で異なる。用例は以下のとおりである。

- (28) まだ講釈師が出てエへんがな、(00 清やん)
- (29) 誰も別に文句言うてえへんねやから (04 語り手)
- (30) 声も出えへんのに大きい声出しなはんな (04 八百屋の親父)
- (31) 牛かて牛乳が出えへん (06 語り手)
- (32) これ以上からくりせえへんで (06 喜いやん)
- (33) 他のおなごやったら自慢せえへんねん (07 喜いやん)

速記本の(28)ではテ形にエヘンが接続しているのに対して、音声落語は下一段動詞やカ変動詞に接続している。音声落語ではいずれも語幹が一音であることから長音化している例と考えられるが、速記本は「出てへん」も可能であることから古形が残っている例だと考えられる。

へ・エへの用例は以下のとおりである。

- (34) まだ当たってえへやないかいな (03 因州鳥取在の者)
- (35) 今何も言うてへがな (03 境内の人)
- (36) まだ講釈師が出てへやないかい (04 清やん)
- (37) まだ講釈師が出てへやないか (05 清やん)

- (38) 先生まだ出てきてへやないか (06 清やん)
- (39) 先生出てきてへやないかい (06 清やん)
- (40) まだ誰も上がってへやないか (07 清やん)

すべてテ形接続で、へとエへではへが多く、「じゃないか」として使用されている。「じゃないか」のテ形接続以外は(19)などのようにヘンヤナイやンヤナイを使用しているため、へ・エへはテ形接続の「じゃないか」専用の打消しの助動詞といえる。とくに「くしゃみ講釈」の音声落語ではすべて同じせりふ内で使用されている。同じせりふでは速記本で(28)のようにエへんが使用されていることから、エへんの古形がへという方言形に変化して形式化したと考えられる。

#### 4.4 イデ

使用数一覧を【表6】に示す。

【表6】イデの使用分布

演目 番号	高津の富				くしゃみ講釈				
	00	01	02	03	00	04	05	06	07
マクラ部	/				/				
本題・地の文									
本題・せりふ	1					1	2		3

本題・せりふにのみみられる。用例は以下のとおりである。

- (41) 云はいでも宵いやないか、(00 新町の女)
- (42) 大きな声出いでもええねや (04 清やん)
- (43) いらんこと言いでもええねや (05 清やん)
- (44) いらんこと言いでもええ (05 清やん)
- (45) そんな手荒いこといでもええ (07 清やん)
- (46) やらいでもええ (07 清やん)
- (47) やらいでもええ (07 清やん)

上記のとおり「しなくてもよい」として使用されている。イデは『上方はなし』全体には使用されているため、音声落語のみの特徴とはいえない。

#### 4.5 ナイ・マイ

使用数一覧を【表7】に示す。使用例がある場合、「ナイ/マイ」の順に使用数を示した。

【表7】ナイ・マイの使用分布

演目 番号	高津の富				くしゃみ講釈				
	00	01	02	03	00	04	05	06	07
マクラ部	/		3/0		/	2/0	3/0		
本題・地の文									
本題・せりふ	3/1	2/1	2/0	1/0					

マクラ部の使用に注目すると、音声落語02はン・ナイのみを使用している。同じ演者の05ではマクラ

部にヘンの使用が確認できることから、演じる会場がマクラ部の方言選択に関わっている可能性が示される。本題部としては「高津の富」にのみナイ・マイがみられる。用例は以下のとおりである。

- (48) 雪駄を履いてますので足は汚れたない、(00 因州鳥取在の者)
- (49) 千両箱がタツタ七十五しか減てないのや、(00 因州鳥取在の者)
- (50) 未だ当つたないがな、(00 因州鳥取在の者)
- (51) 彼のように云ふて置やアまんざら催促も仕依るまい、(00 因州鳥取在の者)
- (52) 雪駄を履いてますので足は汚れたない (01 因州鳥取在の者)
- (53) まだ当たつたないがな (01 因州鳥取在の者)
- (54) 滅多に宿賃も催促もしよるまい (01 因州鳥取在の者)
- (55) 雪駄履いてるで足は汚れてない (02 因州鳥取在の者)
- (56) 千両箱がたつた八十三しか減つてないじゃないかい (02 因州鳥取在の者)
- (57) 金も持ってない (03 二番の男)

(57) 以外は因州鳥取在の者が使用している。彼の他のせりふを確認すると、速記本はン・ズ・ナイ、音声落語はン・ナイ (01・02)、ン・ズ・エへ (03) がみられる。このことから、大阪以外の人間に共通語や文語の打消しの助動詞を使用させることで、地域性を表現していると考えられる。さらに、速記本と音声落語 01・02 は共通する箇所が多い。これは、笑福亭一門であることが影響していると考えられる。また、速記本と音声落語 01 はタナイの形式であり、テナイの古形だと考えられる<sup>9</sup>。

#### 4.6 過去

使用数一覧を【表 8】に示す。使用例がある場合、「ナンダ／ンカッタ／エヘンカッタ／ナカッタ」の順に使用数を示した。

【表 8】過去の使用分布

演目 番号	高津の富				くしゃみ講釈				
	00	01	02	03	00	04	05	06	07
マクラ部						0/1/0/0	2/0/0/0		
本題・地の文									0/0/0/1
本題・せりふ	3/0/0/0	1/0/0/0	4/0/0/0	2/0/0/0	1/0/0/0	1/0/0/0	4/1/0/0		3/0/1/0

速記本はナンダのみだが、音声落語にはナンダに加えてカッタ系がみられ時代差が確認される。音声落語 04 はマクラ部ではンカッタ、本題・せりふではナンダを使い分けている。音声落語 05 と 07 は本題・せりふでナンダとンカッタ・エヘンカッタを混用している。それぞれの用例は以下のとおりである。

- (58) 昨日は首尾よういかななんだ (05 喜いやん)
- (59) それせなんだら俺の腹の虫が収まらんが (05 喜いやん)
- (60) 早いとこ行かなんだら大変やねん (05 清やん)
- (61) 早いとこ行かなんだら (05 清やん)
- (62) しばらく顔見せなんだな (07 清やん)
- (63) タベはえらい邪魔が入ってすまなんだ (07 喜いやん)

<sup>9</sup> 速記本や音声落語にはアスペクトのタアルも多用されている。

(64) そないに覚えられなんたらどんならん (07 清やん)

(65) 言われんかったら黙ってえ (05 清やん)

(66) もう出えへんかったらええがな (07 清やん)

速記本では (62) 以外の該当箇所では打消しは使用されていない。このことから、音声落語においてナンダは形式化して使用が増加している可能性も考えられる。

#### 4.7 当為表現

当為表現はン・ズが使用されている。使用数一覧を【表 9】に示す。

【表 9】当為表現の使用分布

演目 番号	形式	高津の富				くしゃみ講釈					
		00	01	02	03	00	04	05	06	07	
マクラ部	二重否定	ナイカン					1	4		2	
本題・地の文	二重否定	ネバナラヌ	1								
		ネバナラン		1							
		ンナラン	1	1							
		ナイカン			1						
本題・せりふ	二重否定	ンナラン		1	1			1		1	
		ナナラン			1						
		ナイカン		1	1	1		1	2		1
		ナアカン				1		3		1	1
	ナアキマヘン				1						
	禁止	タライカン		1			1	3	4	2	2
		タラアカン					1			7	2

二重否定について、竹村 (2016) では速記本はナラン系が圧倒的に多いことが示されている。音声落語では、マクラ部はイカン系のみで、本題・せりふはイカン系・アカン系が多くなっている。矢島 (2013: 364) では平成談話資料の当為表現でナラン・イカンが使用されないことが指摘されているため、落語のマクラ部はたとえ平成に演じられても、自然談話より古い形式が使用されていることが確認される。これには、演者の年齢も関係するといえよう。「高津の富」の本題・地の文は、笑福亭一門の音声落語 01・02 で速記本と共通する箇所にて二重否定が使用されている。用例は以下のとおりである。

(67) 果報は寝て待てやないねばならぬ練って待て、練らねばならぬそう御座います、(00 語り手)

(68) 果報は寝て待てやない、練って待て、練らねばならんのやそうござりますが (01 語り手)

(69) 何でも宜いお客さんを引かんならんと云ふので、(00 語り手)

(70) 一人でもええお客さんを引張らんならんというので (01 語り手)

(71) ええお客さんに泊まって貫わかないかんというので (02 語り手)

上記から、時代とともにヌ→ン、ナラン→イカンに変化していることが確認できる。

禁止は本題・せりふのみにみられる。「くしゃみ講釈」の音声落語では、速記本と共通する「見附けられたらいかん」と、速記本と共通しない「押したらいかん」「押したらあかん」が使用されている。共通しない部分では速記本は「押しなはん」が使用されている。郡 (1997: 46) には、禁止の表現として「行くな」「行きな」「行ったらあかん」「行かんとき」が挙げられており、「行ったらあかん」が実際に多く使われているとされている。音声落語でも同様の傾向が示されている。

## 5. ンとヘンの相違点

最後に、ンとヘン<sup>10</sup>の使用について相違点をみるために統語関係を【表 10】に示す。

【表 10】ン・ヘンの統語関係

演目 番号	高津の富								くしゃみ講釈								
	00	01	02	03	00	04	05	06	07								
	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン
マ	五段	/	4	1	4	/	/	/	1	4	5	1					
	上一	/				/			1	1	2						
	下一	/	2			/			1				1				
	カ変	/				/				1							
	サ変	/				/			1								
	テ形	/				/					1						
	レル	/				/					1		1				
	ラレル	/				2	/		1								
地	五段							1	1	1		1		1		1	1
	五段	18	20	1	17	1	30	15	3	14	1	20	3	8	5	16	9
せ	上一		1						1				1				
	下一	7	9	9	5				5	1	5		3		6		
	カ変	2	2	1					1								
	サ変		2	4	3	2			1		1			1	2	1	
	テ形				1	1					3				1		2
	レル							1				2		1		1	
	ラレル	2	1	2	1			2	1		1	2				1	1
	ヨル		1	2													
	ナハル									1							
	ハル							1									
	語幹											2					

速記本と音声落語ともに五段動詞以外でヘンを使用することが少ない。ただし、割合で見ると、マクラ部は五段動詞以外でもヘンが散見されるため、マクラ部の方が新しい方言形が使用されやすい傾向が示されている。テ形接続はヘンが多い。へ・エへの用例とともにテ形接続の打消しの助動詞はヘンを使用している。レル接続はすべてヘンである。その他、待遇表現はンが使用されており、これらは形式化していると考えられる。郡（1997：27）には、単純な否定文にはヘン、自分の決意を示すときにはンを使う傾向が述べられている。今回の資料では、決意は「高津の富」の「会わん」のみであったため、傾向は示されなかった。

### 引用文献

●郡史郎（1997）「総論」平山輝男ほか（編）『大阪府のことば』1-61. ●竹村明日香（2016）『『上方はなし』コーパスを通してみる京阪方言語彙—近世上方語及びナラン・イカン・アカンの諸相—』『国語語彙史の研究』35：23-40. ●村上謙（2023）『近世後期上方語の研究 関西弁の歴史』東京：花鳥社. ●矢島正浩（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』東京：笠間書院. ●安井寿枝（2024a）「虚構の中の話し言葉について—虚構度・創作度・脚色度—」日本近代語研究会（編）『論集日本近代語 第3集』265-279. ●安井寿枝（2026b）「シリーズ「文体と表現・語彙と虚構」上方古典落語の発話—マクラと本題を比較する—」第231回青葉ことばの会（2024年7月6日オンライン開催） ●安井寿枝（2024c）「上方古典落語における方言の形式化—速記本『上方はなし』と音声落語の比較を例に—」『方言の研究』10：149-173.

### 引用ホームページ

「芸の特徴：マクラ＋本題＋サゲで構成」文化デジタルライブラリー（最終閲覧日2026年3月5日）

URL <https://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc20/geino/rakugo/tokucyo1.html>

<sup>10</sup> 音声落語ではエヘンも含める。

# 静岡方言の過去表現「ケ」の使用・理解—性差・年代差・地域差から

谷口 ジョイ<sup>1</sup>・柴田希隆<sup>2</sup>・山岸 祐己<sup>3</sup>

## 1. はじめに

「昨日は風邪をひいたっけで、会社を休んだっけよ」のような文に見られる過去表現の終助詞「ケ」は、静岡県内で広く使用されている。共通語における「ケ」は、「今日はゴミの日だっけ？」のような〈確認〉や、「昔はよく川で遊んだっけ」のような〈想起〉を表す形式として用いられるが、静岡方言の「ケ」はこれらの機能に加え、単純な〈過去〉の叙述（「去年、ハワイに行ったっけよ」）、〈発見〉（「こんなところにあつたっけ！」）、〈完了〉（「(食事をしたかと聞かれ) さっき食べたっけよ」）、〈詠嘆〉（「(お酒を飲みながら) うまいっけなあ！」）、〈推量〉（「(荒らされた畑を見て) 動物が入つたっけな」）など、多様な意味機能を担っている。

共通語における「ケ」については、金水（2001）が〈回想〉の機能として、また定延（2004）が〈思い出し〉の機能として分析している。これらは、「話時以前に認識した事態」を発話時に再確認する場合に用いられる形式であるが、上述のように、静岡方言の「ケ」はこうした共通語の機能を越えた多様な用法を有している。

静岡方言の過去表現に関しては、山口（1968）が「ケ」と「タ」の区別を「自分の動作」対「それ以外」という人称的区別として分析した上で、「ケ」が完了法的な過去形であることを論じた。近年では、高田（2024）が岩手県遠野方言・静岡市方言・韓国語の過去表現を対照し、静岡市方言の「ケ」が〈発見〉〈想起〉〈認識更新〉のいずれをも表しうることから、古語「けり」に近い「認識の成立」の機能を保持していると指摘した。しかし、これらの研究はいずれも少数のインフォーマントに基づく記述であり、「ケ」の使用・理解の実態を話者の社会的属性と関連づけて定量的に分析した研究は、管見の限り存在しない。

本研究では、静岡方言における「ケ」の用法について大規模調査を実施し、話者の性別・年代・出身地域（県西部・中部・東部）との関連を定量的に分析することで、「ケ」の用法、および使用・理解の実態について明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1 静岡方言における「ケ」と「タ」の使い分け

静岡方言の過去表現に関する先駆的な研究としては、山口（1968）が挙げられる。山口は、静岡方言における「ケ」と「タ」の使い分けについて考察し、両形式が意味的に異なる機能を担うことを論じた。山口によれば、「ケ」は「自分で自分のしたことに対する認定」を表す形式であり、話者自身の動作に対して用いられる。一方、「タ」は他人の動作や自然現象など、自己の行為ではない事柄に対して用いられるとされ、両形式の間に人称的な使い分けが存在することが指摘された。さらに、山口は「ケ」が単なる過去の報告ではなく、完了的な機能を有することを論じ、「ケ」を過去形、「タ」を過去完了形として、それぞれ位置づけた。山口の分析は、静岡方言の「ケ」が共通語の「タ」とは異なる独自の意味体系を有することを示した点で重要であるが、限られた数の用例および山口自身の内省に基づく記述であり、「ケ」の使用実態については不明である。

### 2.2 静岡方言「ケ」における年代別の使用状況

中田（1979）は、静岡県焼津市方言における「ケ」形と「タ」形の意味・用法について、老年層と青年層の

<sup>1</sup> たにぐち じょい(静岡理科大学) taniguchi.joy@sist.ac.jp

<sup>2</sup> しばた きりゆう(静岡理科大学大学院生) 2621012.sk@sist.ac.jp

<sup>3</sup> やまぎし ゆうき(静岡理科大学) yamagishi.yuki@sist.ac.jp

比較を通じて考察した研究である。中田は、山口（1968）を踏まえつつ、老年層3名・青年層1名を対象とした調査に基づき、両形式の用法と通時的な変化を明らかにしている。

老年層の用法の分析からは、「ケ」形が〈過去の事実〉、〈習慣的動作〉、〈回想〉、〈詠嘆〉、〈気づき〉、〈確認〉など多様な用法を持つことが示された。一方、「タ」形は動作・作用の〈結果の継続〉や〈完了〉を表すとされ、中田はこの対比から、「ケ」形の本来の意味を「過去」というテンス性、「タ」形の本来の意味を「完了」というアスペクト性として整理している。また、形容詞的述語および名詞的述語に接続する場合には、方言形としては「ケ」形のみが使われることが示されている。

注目すべきは、中田が報告した人称制約である。焼津市方言の老年層では、「ケ」形は他人の動作に用いられる一方（用例1）、自己の動作には用いられない（用例2）。

用例1 jacu=wa kiNno: sigoto: jaQke=jo（あいつは昨日仕事をやったよ）

用例2 \*ore=wa juNbe=wa sakjo: noNda=jo（俺は、昨晚は酒を飲んだよ）（非文）

この人称制約は、山口（1968）が「ケ」を「自分の動作」に用いられる形式としたのとは逆の方向を示しており、人称制約には個人差（年代差、地域差など）が影響する可能性を示している。

さらに、中田は青年層における変化を分析し、「ケ」形が〈単純な過去〉を表す場合には使われなくなり、話し手の心的態度を反映した限られた用法にのみ使用されることを明らかにした。この変化は、「ケ」形がテンス的機能を喪失してムード的機能に限定されていく過程を示している。また、接続形式が動詞連用形接続（例：やる→やっけ）から終止形+促音の形（例：やる→やったっけ）へと変化していることから、品詞的に助動詞から文末助詞（感動助詞）への移行が生じていると指摘した。中田の世代間比較は、「ケ」の通時的な変化を示した点で重要であり、本研究における年代別分析は、これに着想を得ている。

### 2.3 認識の成立を表す「ケ」

「ケ」は静岡方言のみならず東北方言にも存在し、その対照は静岡方言の「ケ」の特質を明確にする上で有用である。高田（2008）は、東北方言（岩手県遠野方言）における「タ」「タッタ」「ケ」の三形式を分析し、「タッタ」が現在との断絶性をもつ直接体験に基づく過去形式であること、「ケ」が話者の認識に基づく回想表現であることを明らかにした。また、「タッタ」の意味特徴が「テアッタ」という〈過去〉の〈継続性〉を表す形式に由来し、その文脈的意味を受け継いだものであることを論証した。さらに、「ケ」については、「タッタ」と類似した性質を有するものの、話し手の行為の体験は表さず、〈認識〉に基づいて文脈的に〈過去〉や〈継続性〉を表すという相違点を指摘した（用例3）。

用例3：山口、確か歌、ウメガッケ。（山口は、確か歌がうまかったなあ）

高田（2008）の研究は、方言の過去表現が単なる時制形式ではなく、話者の認識的態度や事態把握のあり方と深く関わることを示した点で重要である。

高田（2024）は、この分析をさらに発展させ、日本語諸方言（岩手県遠野方言・静岡市方言）と韓国語における過去表現のムード的用法について対照研究を行った。高田は、ムード的用法として、①〈発見〉（発話時以前には全く認識していなかった事態を発話時に認識）、②〈想起〉（発話時以前に認識したが不確かになった事態を発話時に再認識）、③〈認識更新〉（発話時以前に仮に認識していた事態を発話時に正確に認識）という三つの用法を設定し、これらが事態の認識時のあり方によって体系的に区別されることを示した。遠野方言の分析の結果、「タ」は三つのムード的用法全てを表しうるのに対し、「タッタ」および「ケ」は〈想起〉のみに用いられることが明らかになった。

一方、静岡市方言の「ケ」は、遠野方言とは異なり、〈想起〉だけでなく〈発見〉や〈認識更新〉にも用いられることが、3名のインフォーマントに対する聞き取り調査によって示された。高田は、静岡市方言の「ケ」が「認識の成立」を広く表す形式であるとし、この機能が古語「けり」の持っていたミラティブ（話し手に

として意外な新情報を伝える) 的機能と通時的に連続するものであると指摘した。

### 3. 研究の方法

#### 3.1 調査協力者

本調査は、18歳以上であり、かつ出生から中学校卒業時まで継続して静岡県内に居住していた、静岡方言を母方言とする話者1,510名を対象とした。有効回答数は1,482名(男性541名、女性941名)である。調査協力者の属性別内訳を表1に示す。

表1 調査協力者の概要

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代～	計
男性	県西部	5	49	28	17	16	4	2	121
	県中部	11	70	56	64	62	26	14	303
	県東部	10	43	22	23	14	2	3	117
女性	県西部	8	54	61	49	34	10	3	219
	県中部	13	99	128	118	94	30	38	520
	県東部	4	47	58	59	24	8	2	202
合計		51	362	353	330	244	80	62	1,482

#### 3.2 調査手法

調査は質問紙、またはウェブフォーム(Google Forms)により実施した。回答者には性別、生年、出身地域について回答を求めた。ウェブ調査の協力者はスノーボールサンプリング法により確保した。具体的には、メッセージアプリケーションを通じて静岡方言を母方言とする友人・知人に調査フォームのURLを送信する、あるいはソーシャルネットワーキングサービスを通じて調査協力を依頼する、という手法を用いた。出身地域については、中條(1982)の区分に基づき、東部・中部・西部の3地域を選択肢として設けた。

なお、吉村(2020)は、郵送による質問紙調査とウェブ調査には結果の偏りがないとする一方、ボランティアパネル(モニター登録による調査参加)によるウェブ調査については明らかな非標本誤差があると指摘している。本調査はスノーボールサンプリング法を用いており、ボランティアパネルとは異なる調査設計を採用している。ただし、スノーボールサンプリング法による標本偏りの可能性は否定できないため、3.4で述べる事後層化ウェイトバック集計により補正を行った。

#### 3.3 設問設計

「ケ」の用法に関する設問は表2に示す15項目である。各設問では場面と例文を提示し、静岡方言としての使用・理解の程度について以下の4段階で回答を求めた<sup>4</sup>。

- a. 使用する。
- b. 使用しないが、聞いたことがあり、意味も分かる。
- c. 聞いたことがあるが、意味は分からない。

<sup>4</sup> ただし、調査票では、各用法についての解説を提示していない。

d. 聞いたことがない。

表2 「ケ」の用法に関する設問一覧

番号	用法	例文
Q1	共通語・確認	A: 今日, ゴミの日だ <u>っ</u> け? B: そうだよ。
Q2	発見	(ずっと探していたものを見つけて) あっ! こんなところにあつた <u>っ</u> け!
Q3	共通語・回想	子どもの頃はよく, ここへ来た <u>っ</u> けね。
Q4	完了	A: ご飯, 食べた? B: うん。さっき食べた <u>っ</u> けよ。
Q5	過去	A: 外国に行ったこと, ある? B: うん。去年, ハワイに行った <u>っ</u> けよ。
Q6	過去・推量	(畑が荒らされているのを見て) これは動物が入った <u>っ</u> けな。
Q7	過去・詠嘆(回想)	A: この間食べたハンバーグ, 美味しかった <u>っ</u> けよ! B: そうなんだ。どこのお店?
Q8	定型表現	昨日行けなくて, ごめん <u>っ</u> けね(悪い <u>っ</u> けね)。
Q9	詠嘆(現在)	(おいしいものを食べながら) うまい <u>っ</u> けなあ!
Q10	詠嘆(現在)	(暑い日に友人と) 暑い <u>っ</u> けね!
Q11	詠嘆(現在)	(道で犬を連れた人に会った時に, 飼い主に対して) この犬, かわいい <u>っ</u> けね!
Q12	遠い過去	徳川家康という人は, 頭がよかった <u>っ</u> けね。
Q13	否定非過去+ケ	A: 昨日, 疲れたから散歩, <span style="border: 1px solid black;">行かない</span> <u>っ</u> け。 B: そうだったんだ。
Q14	否定過去+ケ	A: 散歩, <span style="border: 1px solid black;">行かなかった</span> <u>っ</u> け? B: 行ったよ。
Q15	古形式	A: 昔は毎日, 酒を飲んげよ。 B: ほうか。

設問は、共通語の用法(Q1, Q3)、過去表現に関わる用法(Q2, Q4~Q7, Q12)、現在の事態に関わる用法(Q9~Q11)、定型表現(Q8)、および接続形式の異なり(Q13~Q15)について調査することを目的として設計した。

### 3.4 分析手法

本調査は、スノーボールサンプリング法を用いたウェブ調査を含むため、標本の属性構成が母集団(静岡県の人口構成)と乖離している可能性がある。この標本偏りを補正するため、令和2年国勢調査に基づき、性別×年代×出身地域(西部・中部・東部)の三次元の事後層化ウェイトを算出し、ウェイトバック集計を行った。

分析は以下の手順で行った。まず、各設問について、回答カテゴリ(4段階)×属性カテゴリのクロス表を

構成し、ウェイトバック集計後の度数に基づき調整済み標準化残差 (Haberman 1973) を算出した。調整済み標準化残差は、クロス表の各セルにおける観測度数と期待度数の乖離を標準化した指標であり、絶対値が大きいほど当該属性カテゴリにおける回答の偏りが大きいことを示す。

次に、各設問の調整済み標準化残差行列をベクトル化し、設問間の距離を算出した上で、群平均法 (Sokal and Michener 1958) による階層クラスタリングを行った。属性基準としては、性別基準、年代基準、出身地域基準のそれぞれについてクラスタリングを実施した。距離にはユークリッド距離を用いた。分析手法の詳細な定式化については、山田ほか (2026) を参照されたい。

## 4. 調査の結果と考察

### 4.1 単純集計による結果

本調査における単純集計結果から、「ケ」の使用・理解の程度について、以下の全体的傾向が認められた。

#### [1] 共通語の「ケ」の使用率

共通語にも見られる用法は世代・地域を問わず広く使用されている。Q1「ゴミの日だっけ」(確認)は全属性カテゴリにおいて「使用する」の回答が90%以上を示し、Q3「来たっけね」(回想)も全属性カテゴリで60%以上が「使用する」と回答した。

#### [2] 年代別に見た「ケ」の使用率

静岡方言に特徴的な用法では、高齢層ほど使用率が高く、若年層では衰退が進行している。例えば、Q4「食べたっけよ」(完了)は、10歳代～50歳代において「使用する」と回答した割合が30%未満であるのに対し、70歳代以上では約48%であった。Q15「飲んげよ」(古形式)に至っては、全年代で使用率が10%未満であり、70歳代以上でも「聞いたことがない」と回答した割合が58%に達した。一方、Q14「行かなかったっけ」(否定過去+ケ)は若年層でも約50%の使用率を維持しており、用法間で衰退の程度に差がある。

#### [3] 出身地域別に見た「ケ」の使用率

出身地域別では県中部が他地域に比べて顕著に高い使用率を示した。多くの方言用法において、県中部の使用率が30～55%であるのに対し、県西部・県東部では10～20%程度に留まった。唯一の例外はQ15「飲んげよ」で、全地域で5%未満という極端に低い使用率であり、地域差も認められなかった。

### 4.2 カイ二乗検定の結果

各設問について、回答カテゴリ(4段階)と属性(性別・年代・出身地域)のクロス表に対してカイ二乗検定を行った(表3)。有意水準は5% ( $p < 0.05$ )とした。なお、居住地別のカイ二乗検定も実施したが、出身地域別とほぼ同様の傾向を示したため、本稿では出身地域別の結果のみを報告する。

検定の結果、性別については、15用法のうち有意差が認められたのはQ9「うまいっけなあ<sup>5</sup>」( $p = 1.45E-07$ )、Q12「頭がよっかったっけね」( $p = 0.011$ )、Q6「動物が入ったっけな」( $p = 0.048$ )の3用法のみであった。

年代については、Q3「来たっけね」( $p = 0.677$ )を除く14用法で有意差が認められた。Q1「ゴミの日だっけ」は有意水準をわずかに下回る( $p = 0.006$ )ものの、実質的な年代差は小さい。その他の用法ではいずれも極めて強い有意差( $p < 0.001$ )が認められ、高齢層と若年層の間に顕著な世代差が存在することが明らかとなった。

出身地域については、Q1「ゴミの日だっけ」( $p = 0.564$ )およびQ15「飲んげよ」( $p = 0.180$ )を除く13用法で有意差が認められた。Q1は共通語用法であるため地域差が生じにくく、Q15は全地域で使用率が極端に低いいため統計的な差として検出されなかったと考えられる。

<sup>5</sup> これは、「うまい」という形容詞がぞんざいな印象を与える語であることから生じた性差であると考えられる。

表3 カイ二乗検定の結果 (p 値)

設問	用法	性別	年代	出身地域
Q1	共通語・確認	0.737	0.006	0.564
Q2	発見	0.413	0.218	2.50E-20
Q3	共通語・回想	0.078	0.677	2.18E-16
Q4	完了	0.345	9.19E-13	1.20E-56
Q5	過去	0.958	3.34E-13	3.33E-60
Q6	過去・推量	0.048	8.04E-13	3.24E-09
Q7	過去・詠嘆 (回想)	0.259	3.64E-14	3.00E-66
Q8	定型表現	0.085	1.77E-07	4.56E-88
Q9	詠嘆 (現在)	1.45E-07	4.35E-26	9.26E-48
Q10	詠嘆 (現在)	0.062	3.49E-27	1.16E-62
Q11	詠嘆 (現在)	0.307	2.36E-17	2.81E-17
Q12	遠い過去	0.011	5.06E-08	6.20E-12
Q13	否定非過去+ケ	0.675	5.57E-16	1.25E-80
Q14	否定過去+ケ	0.837	0.0005	4.98E-38
Q15	古形式	0.072	1.18E-10	0.180

### 4.3 クラスタリング分析による結果

先述のように、カイ二乗検定の結果から属性間で差異の大きさが異なることが確認された。次に、各用法がどのような属性要因によって類型化されるかを明らかにするため、3.4 で述べた手法により階層クラスタリングを行った。

#### 4.3.1 性別基準

性別基準のクラスタリングでは、最大併合距離が 9.75 であり、3 つの属性基準の中で最も小さい。すなわち、設問間の性差のパターンは相対的に類似しており、性別は「ケ」の用法を大きく類型化する要因ではない。

2 クラスタに分割した場合、Q9「うまいっけなあ」、Q2「あったっけ」、Q13「行かないっけ」の3用法が1つのクラスタを形成し、残りの12用法がもう1つのクラスタにまとまる。Q9は15用法の中で唯一、強い性差が認められた用法であり ( $p=1.45E-07$ , 男性 23.5%, 女性 13.4%), 他の用法と異なるパターンを示したためと考えられる。Q15「飲んげよ」は3クラスタに分割した段階で独立する。これは全体的に使用率が極端に低く、性差の「パターン」自体が他の用法と異質であることを反映している。

#### 4.3.2 年代基準 (図1)

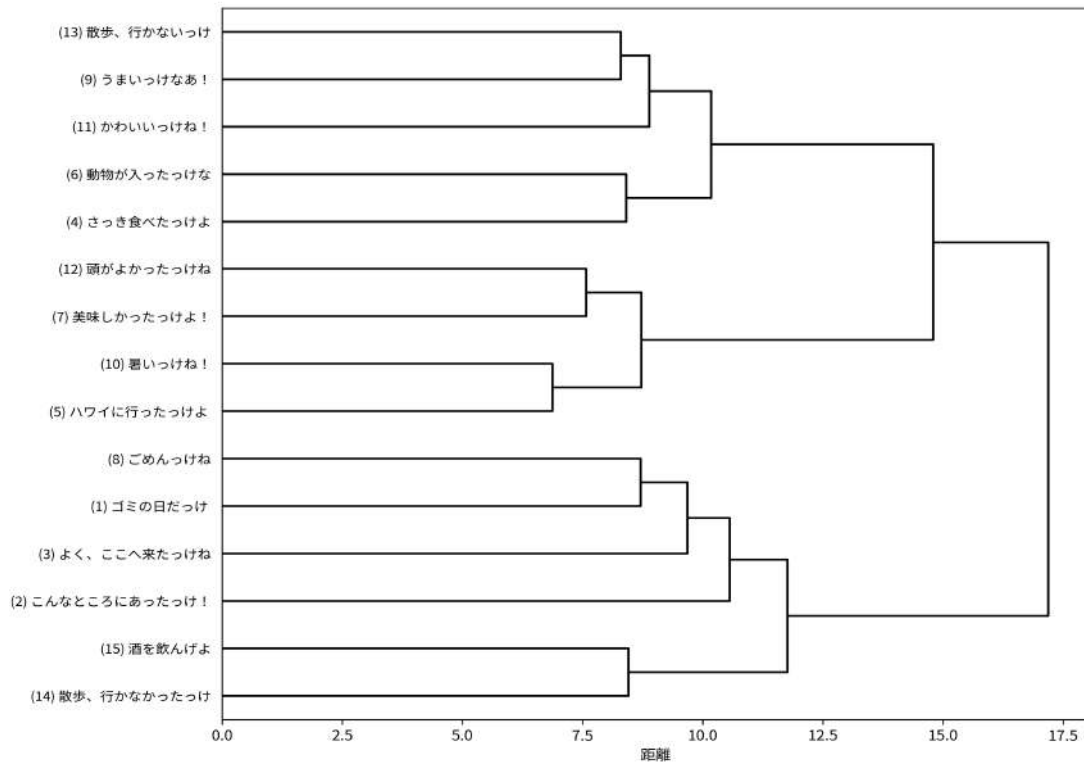
年代基準のクラスタリングでは、最大併合距離が 17.19 であり、性別基準 (9.75) の約 1.8 倍である。年代

は性別よりも「ケ」の用法間の差異を大きく規定している。

2 クラスタに分割した場合、Q1「ゴミの日だっけ」、Q2「あったっけ」、Q3「来たっけね」、Q8「ごめんっけね」、Q14「行かなかったっけ」、Q15「飲んげよ」の6用法がクラスタ A を形成し、残りの9用法がクラスタ B を形成する。クラスタ A は世代差が相対的に小さい用法群であり、共通語用法 (Q1, Q3) に加え、若年層でも比較的高い使用率を維持している Q14 (全年代で約 50%) が含まれる。クラスタ B は高齢層ほど使用率が高く、若年層で衰退が顕著な用法群である。

クラスタ B をさらに細分すると、Q5「ハワイに行ったっけよ」、Q7「美味しかったっけよ」、Q10「暑いっけね」、Q12「頭がよかったっけね」が1つの下位クラスタを形成し、Q4「食べたっけよ」、Q6「動物が入ったっけな」、Q9「うまいっけなあ」、Q11「かわいいっけね」、Q13「行かないっけ」がもう1つの下位クラスタを形成する。後者の下位クラスタは、前者に比べて衰退がより顕著な用法群に対応する。

図1 年代別基準 (3 属性ウェイトバック集計後) : ユークリッド距離



### 4.3.3 出身地域基準

出身地域基準のクラスタリングでは、最大併合距離が 22.23 であり、3つの属性基準の中で最も大きい。出身地域は「ケ」の用法を最も強く類型化する要因である。

最も特徴的なのは、Q1「ゴミの日だっけ」(確認) が他の 14 用法から大きく離れて独立している点である。Q1 はカイ二乗検定でも出身地域間に有意差が認められなかった唯一の用法であり ( $p = 0.564$ )、共通語としてすべての地域で同様に使用されていることと整合する。

残りの 14 用法は大きく 2つのグループに分かれる。Q8「ごめんっけね」と Q13「行かないっけ」は特に大きな地域差を示すペアとして独立している。これらは県中部では約 50%の使用率を示す一方、県東部ではそれぞれ 6.6%、6.6%と極端に低く、地域差のパターンが他の用法と異なる。

以上の分析から、静岡方言における「ケ」の衰退には、主に 2つの要因が関与していると考えられる。第

一に、共通語における「ケ」との意味の隔たりである。共通語に対応する意味を持たない用法（推量、詠嘆）は急速に衰退している。

第二に、方言形式の顕著性（salience）である。Auer, Barden, and Grosskopf（1998）が論じるように、話者にとって「共通語と異なる」と認識される方言形式ほど、衰退しやすい傾向がある。動詞の連用形に「ケ」が直接接続する Q15「飲んげよ」（古形式）は、全項目で使用率が 10%未満であり、「聞いたことがない」の回答が 70%以上を占めた。70 歳代以上でも使用率は 10%未満であり、現在の話者の言語体系からほぼ消失していると判断される。また、共通語には見られない「～っけよ」「～っけね」「～っけな」といった文末助詞を伴う形式も衰退しつつある。

## 5. まとめ

分析の結果、「ケ」の使用パターンを規定する要因には明確な階層が認められた。最も主要な要因は出身地域であり、「ケ」の使用・理解には、県中部を中心とした地理的な偏りが確認された。特に、「（おいしいものを食べながら）うまいっけなあ！」といった文に見られるモダリティ機能をもった表現は、中部地域で最もよく使用・理解されることが示された。

また、副次的要因としては年代が挙げられる。Auer, Barden, and Grosskopf（1998）が指摘するように、顕著な方言形式ほど衰退しやすい傾向にあることが明らかになった。例えば、動詞連用形に直接接続する古い形式「飲んげ」は全年代で、ほぼ消滅状態にあった。また、「行かないっけ」という形は「行かなかったっけ」に変化しつつあることが確認された。

一方、性別は「ケ」の使用・理解にほとんど影響しておらず、語彙的要因（ぞんざいな印象を与える「うまい」が文章に含まれていた場合など）が関連する場合にのみ性差が出現した。以上から、静岡方言の「ケ」は多様な機能を有しながらも、地域と年代を主要な軸として段階的な衰退過程にあることが明らかになった。

### 【参考文献】

- Auer, P., Barden, B., Grosskopf, B. (1998). Subjective and objective parameters determining salience in long-term dialect accommodation. *Journal of Sociolinguistics*, 2, 163–187.
- Haberman, S. J. (1973). The analysis of residuals in cross-classified tables. *Biometrics*, 29, 205–220.
- Sokal, R. R., & Michener, C. D. (1958). *A statistical method for evaluating systematic relationships*. The University of Kansas Scientific Bulletin, 38, 1409–1438.
- 金水敏 (2001) 「テンスと情報」音声文法研究会 (編) 『文法と音声 III』 (pp. 55–79) くろしお出版.
- 定延利之 (2004) 「ムードの「た」の過去性」『国際文化学研究所』 21, 1–68.
- 高田祥司 (2008) 「日本語東北方言と韓国語の〈過去〉の表現について」『日本語の研究』 4(4), 32–47.  
[https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.4.4\\_32](https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.4.4_32)
- 高田祥司 (2024) 「日本語諸方言と韓国語の過去表現のムード的用法」『第 25 回大会発表予稿集』 17–24. 日本語文法学会.
- 中條修 (1982) 『静岡方言の研究』 吉見書店.
- 中田敏夫 (1979) 「静岡県焼津市方言の過去表現」『日本語研究』 2(2), 122–129.
- 山口幸洋 (1968) 「静岡県方言の過去表現について」『国語学』 75, 63–74.
- 山田夕都紀・萩田碧偉・柴田希隆・山崎綾一郎・山岸祐己・谷口ジョイ (2026) 「重み付き残差特徴量による静岡方言「～ヶ」の用法クラスタリング」第 18 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (第 24 回日本データベース学会年次大会) .
- 吉村治正 (2020) 「ウェブ調査の結果はなぜ偏るのか」『社会学評論』 71(1), 65–83. <https://doi.org/10.4057/jsr.71.65>

## 意味拡張と言語接触から見る「トル」

鴨井 修平<sup>1</sup>

### 1. はじめに

テンス・アスペクト・ムードに関する諸言語の文法化研究によれば、進行 (progressive) の意味は、完了 (perfect) や 結果 (resultative) の意味へと拡張しやすい (Bybee et al. 1994, Narrog 2005, 2012)。

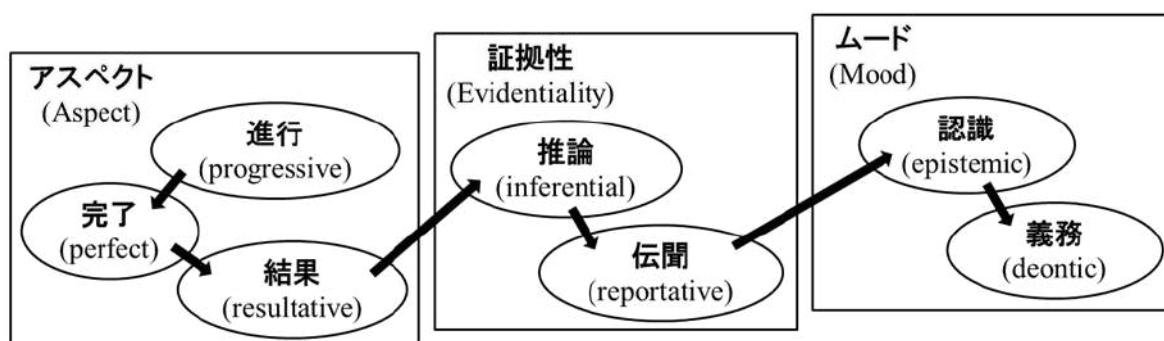


図1 意味的連続性と意味拡張の方向性

意味拡張は、意味的連続性と密接に関係しているということである。

一方、アスペクトに関する西日本語諸方言の文法化研究によれば、結果の意味を表す形式トルが進行の意味へと拡張していく現象が多く報告されている (工藤 1998, 1999, 2014)。

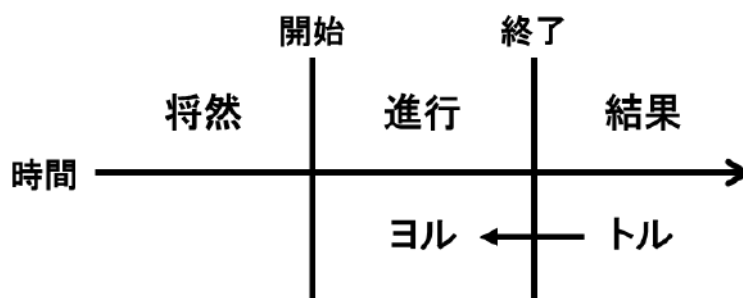


図2 トルの意味拡張

トルの意味拡張と並行的に、ヨルが衰退していく現象は、トルへの一本化と呼ばれており、進行と結果のアスペクトをヨルとトルで区別している西日本諸方言で広く観察されている言語変化である<sup>2</sup>。

トルの意味拡張は、高知県土佐市方言のように、進行の意味にはヨル、結果の意味にはトルが、それぞれ対応する体系が元来の西日本諸方言の体系であると仮定した場合の言語変化である。(1)は高知県土佐市方言の発話例である<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> かもい しゅうへい(甲南女子大学)

<sup>2</sup> jor-u には [-jooru], [-joo], [juu] など, tor-u には [-tooru], [too], [-teuu] などの変種が存在する。本研究では、議論の便宜上、個別の方言形式に言及する場合を除き、jor-u の変種を「ヨル」、tor-u の変種を「トル」として統一的に表記する。なお、発話例を提示する際には、個別の方言形式に基づいた表記を行う。

<sup>3</sup> 1 段目は仮名表記, 2 段目は簡易式の音韻表記, 3 段目はグロス, 4 段目は標準語訳である。

- (1) a. タロー イマ ハシリユウ / \*ハシツチュウ  
 taroo ima hasiri-juu. / \*hasit-teuu.  
 太郎 今 走る-PROG.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」
- b. タロー モー ハシツチュウ / \*ハシリユウ  
 taroo moo hasit-teuu. / \*hasiri-juu.  
 太郎 もう 走る-RES.NPST  
 「太郎 (は) もう, 走り終えている。」

(1)は、進行の意味には -juu のみ、結果の意味には -teuu のみに対応することを示している。また、高知県土佐市方言では、進行を表す形式としてトルを使用するという現象が観察されない。一方、(2)は大分県大分市方言の発話例である。

- (2) a. タロー イマ ハシリヨン / ハシツチョン  
 taroo ima hasiri-jon. / hasit-teon.  
 太郎 今 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」
- b. タロー モー ハシツチョン / \*ハシリヨン  
 taroo moo hasit-teon. / \*hasiri-jon.  
 太郎 もう 走る-RES.NPST  
 「太郎 (は) もう, 走り終えている。」

(2)は、進行の意味には -jon, -teon, 結果の意味には -teon が対応することを示している。大分県大分市方言では、進行を表す形式としてトルを使用するという現象が高年層から若年層にかけて顕著になっていく形で観察される。また、従来の研究が指摘する通り、トルの意味拡張は、一部の方言に限らず、西日本諸方言全体で生じている通方言的な現象である。

## 2. 問題提起

山口県山口市方言では、トルの意味拡張が生じているが、トルの変種を併用する体系となっている。(3)は山口県山口市方言の発話例である。

- (3) a. タロー イマ ハシリヨル / ハシツチョル / ハシットル  
 taroo ima hasiri-joru. / hasit-teoru. / hasit-toru.  
 太郎 今 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」
- b. タロー モー ハシツチョル / ハシットル / \*ハシリヨル  
 taroo moo hasit-teoru. / hasit-toru. / \*hasiri-joru.  
 太郎 もう 走る-RES.NPST / 走る-RES.NPST  
 「太郎 (は) もう, 走り終えている。」

(3)は、進行の意味には -joru, -teoru, -toru, 結果の意味には -teoru, -toru が対応することを示してい

る。-teoru と -toru は、動詞テ形+存在動詞オルを同一語源とするが、単なる自由変異ではない。各形式が機能的に重複するとき、アスペクトの範疇における明確な用法差は観察されないが、待遇の範疇においては -toru が聞き手に対する配慮 (polite) の語用論的用法を持つため、待遇価は、-joru = -teoru >> -toru の順になる。また、進行と結果において -toru を使用するという現象は、高年層から若年層にかけて顕著になっていく形で観察される。つまり、山口県山口市方言において、-toru は非伝統形式であることが示唆される。

また、島根県安来市方言では、トルへの一本化が生じているが、トルの変種と共にテイルの縮約形テル (-te=(i)-ru) を併用する体系となっている。(4)は島根県安来市方言の発話例である。

- (4) a. タロー イマ ハシッチョー / ハシットル / ハシッテル  
 taroo ima hasit-teoo. / hasit-toru. / hasit-teru.  
 太郎 今 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」
- b. タロー モー ハシッチョー / ハシットル / ハシッテル  
 taroo ima hasit-teoo. / hasit-toru. / hasit-teru.  
 太郎 今 走る-RES.NPST / 走る-RES.NPST / 走る-RES.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」

(4)は、進行と結果の意味に -teoo, -toru, -teru が対応することを示している。これらもまた、単なる自由変異ではない。各形式が機能的に重複するとき、アスペクトの範疇における明確な用法差は観察されないが、待遇の範疇においては -teoo が聞き手に対するぞんざい (rude), -teru が聞き手に対する配慮の語用論的用法を持つため、待遇価は、-teoo >> -toru >> -teru の順になる。また、進行と結果において -teru を使用するという現象は、高年層から若年層にかけて顕著になっていく形で観察される。つまり、島根県安来市方言において、-teru は非伝統形式であることが示唆される。

本研究では、西日本諸方言で生じているトルへの一本化は、トルの意味拡張という内部的要因による変化だけでなく、非伝統形式との接触という外部的要因による変化との交錯によって生じている可能性を検討する。このことは、同語源である te-oru の母音融合と口蓋化から -teoru や -teoo のような方言形式が生じることは想定されるが、方言形式である -teoru, -teoo の逆行的な変化から -toru や -teru が生じることは想定されないことから考えられる。

また、真田 (2007) の発話スタイル体系によれば、標準語に近い形式ほどフォーマル (High) な発話場面、方言に近い形式ほどカジュアル (Low) な発話場面で使用される。

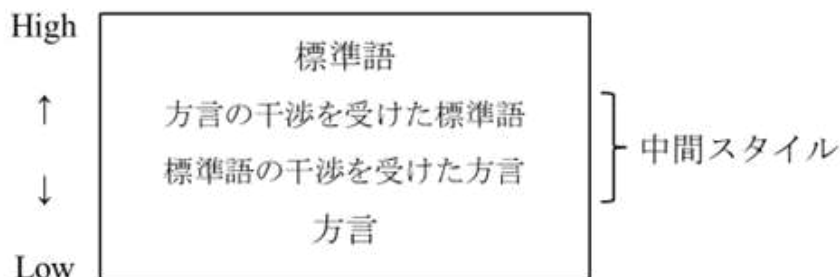


図3 発話スタイル体系

つまり、当該方言において、High の用法を持つ形式は、非伝統形式である可能性が高いということである。本研究では、-teru に限らず、-toru も当該方言の非伝統形式として発生していると仮定し、共時的観察に基づいてトルへの一本化を議論していく。

### 3. 先行研究

トルは動詞テ形＋存在動詞オル、テルは動詞テ形＋存在動詞イルを語源とする形式であるため、西日本諸方言において両形式が伝統形式であるか非伝統形式であるかを分析するのは困難である。本研究では、存在動詞アルを語源とするヤルとタルをアスペクト形式として使用する和歌山県・三重県の南部方言を観察する<sup>4</sup>。

まず、岸江 (1994)、江川・井上 (1994)、井上 (1998) の記述によれば、和歌山諸方言には、ヨル・トル・ヤル・タル・テルなどの形式が多様に分布しているが、主な使用形式は方言区画・年齢層・個人によって様々である。当時の先行研究の共通点として、テルは標準語、トルは大阪方言のように感じるというインフォーマントの内省が報告されている。また、テルは「あらたまった場面」で使用されやすく、トルは若年層を中心に観察され始めている。

次に、岸江 (2013)、大野 (2017) の記述によれば、和歌山諸方言におけるアスペクト体系の変遷によって、トルとテルの使用が顕著に観察されている。存在動詞アルとこれを語源とするアスペクト形式を伝統形式とする和歌山諸方言に、存在動詞オル・イルとこれを語源とするアスペクト形式が導入されたことによって、年齢層による使用形式の対立が顕著になったということである。

これらの先行研究が指摘する通り、存在動詞オル・イルを語源とするアスペクト形式は、当該方言において非伝統形式である可能性が示唆される。本研究では、存在動詞アルを語源とするアスペクト形式と、存在動詞オル・イルを語源とするアスペクト形式が機能的に重複するとき、発話スタイルの High・Low に基づいて対立するかどうかを検証する。仮に存在動詞オル・イルを語源とするアスペクト形式が High の用法を持つならば、非伝統形式として分析するということである。

### 4. 調査データ



図4 和歌山方言の区画 (村内 1982)



図5 三重方言の区画 (平山 2000)

<sup>4</sup> jar-u には [-jaru], [-jaaru] など, tar-u には [-taaru], [-teaaru] などの変種が存在する。本研究では、議論の便宜上、個別の方言形式に言及する場合を除き、jar-u の変種を「ヤル」、tar-u の変種を「タル」として統一的に表記する。なお、発話例を提示する際には、個別の方言形式に基づいた表記を行う。

本研究では、存在動詞アルを語源とするアスペクト形式を使用する和歌山県・三重県の南部方言を対象とした調査データを提示する。

図4より、和歌山方言は、大きく紀北方言、紀中方言、紀南方言の3つに区画される。本研究では、紀南方言を中心とした調査データを提示する。また、図5より、三重方言は、大きく伊賀方言、北・中伊勢方言、志摩・南伊勢方言、北牟婁方言、南牟婁方言の5つに区画される。本研究では、南牟婁方言を中心とした調査データを提示する。和歌山県紀南方言と三重県南牟婁方言は隣接しており、いずれも存在動詞アルを語源とするアスペクト形式を使用するという共通点がある。また、いずれも、インフォーマントは、当該方言区画を出身地とする高年層(70歳)、中年層(40-69歳)、若年層(-39歳)であり、提示する発話例は、各年齢層5名の内省に基づく。

#### 4.1. 和歌山県紀南方言のトル

和歌山県紀南方言では、トルの使用が、高年層と中年層では観察されないが、若年層では観察される。(5)は、南紀方言の高年層と中年層による発話例である。

- (5) a. タロー イマ ハシリヤル / ハシッテル /?ハシッタール  
 taroo ima hasiri-jaru. / hasit-teru.  
 太郎 今 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST  
 「太郎(は)今、走っている。」
- b. タロー モー ハシッタール / ハシッテル /\*ハシリヤル  
 taroo ima hasit-taaru. / hasit-teru.  
 太郎 今 走る-RES.NPST / 走る-RES.NPST  
 「太郎(は)今、走っている。」

(5)は、進行の意味に -jaru, -teru, 結果の意味に -taaru, -teru が対応することを示している。各形式が機能的に重複するとき、アスペクトの範疇における明確な用法差は観察されないが、待遇の範疇においては -teru が聞き手に対する配慮の語用論的用法を持つため、待遇価は、-jaru = taaru >> -teru の順になる。また、ヤルは主に進行、タルは主に結果を表すため、伝統形式によってアスペクトを区別しているということが分かる。次に、(6)は、南紀方言の若年層による発話例である。

- (6) a. タロー イマ ハシリヤル / ハシッテル / ハシットル /?ハシッタール  
 taroo ima hasiri-jaru. / hasit-teru. / hasit-toru.  
 太郎 今 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST  
 「太郎(は)今、走っている。」
- b. タロー モー ハシッタール / ハシッテル / ハシットル /\*ハシリヤル  
 taroo ima hasit-taaru. / hasit-teru. / hasit-toru.  
 太郎 今 走る-RES.NPST / 走る-RES.NPST / 走る-RES.NPST  
 「太郎(は)今、走っている。」

(6)は、進行の意味に -jaru, -teru, -toru, 結果の意味に -taaru, -teru, -toru が対応することを示している。各形式が機能的に重複するとき、アスペクトの範疇における明確な用法差は観察されないが、待遇の範疇においては -teru が聞き手に対する配慮、-toru がぞんざいの語用論的用法を持つため、

待遇価は, -toru >> -jaru = -taaru >> -teru の順になる。岸江 (1994), 江川・井上 (1994), 井上 (1998) が指摘するように, 大阪方言においてアスペクトに軽卑を含意するトルが, 紀南方言に導入されている可能性が高い。つまり, トルという形式は, 意味拡張によって進行の意味を持つようになる場合もあれば, 言語接触によって進行を表す形式として生じる場合もあるということである。

#### 4.2. 三重県南牟婁方言のトル

三重県南牟婁方言では, 高年層から若年層にかけてトルの使用が観察されるが, 高年層では使用頻度が低いのに対し, 若年層では使用頻度が高い。(7) は, 南牟婁方言の高年層と中年層による発話例である。

- (7) a. タロー イマ ハシリヤル / ハシットル / ?ハシッタール  
 taroo ima hasiri-jaru. / hasit-toru.  
 太郎 今 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」
- b. タロー モー ハシッタール /\*ハシットル /\*ハシリヤル  
 taroo ima hasit-taaru.  
 太郎 今 走る-RES.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」

(7)は, 進行の意味に -jaru, -toru, 結果の意味に -taaru が対応することを示している。各形式が機能的に重複するとき, アスペクトの範疇における明確な用法差は観察されないが, 待遇の範疇においては -toru が聞き手に対する配慮の語用論的用法を持つため, 待遇価は, -jaru = -taaru >> -toru の順になる。また, ヤルは主に進行, タルは主に結果を表すため, 伝統形式によってアスペクトを区別しているということが分かる。次に, (8) は, 南牟婁方言の若年層による発話例である。

- (8) a. タロー イマ ハシリヤル / ハシッタール / ハシットル  
 taroo ima hasiri-jaru. / hasit-taaru. / hasit-toru.  
 太郎 今 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」
- b. タロー モー ハシッタール / ハシットル /\*ハシリヤル  
 taroo ima hasit-taaru. / hasit-toru.  
 太郎 今 走る-RES.NPST / 走る-RES.NPST  
 「太郎 (は) 今, 走っている。」

(8)は, 進行の意味に -jaru, -taaru, -toru, 結果の意味に -taaru, -toru が対応することを示している。各形式が機能的に重複するとき, アスペクトの範疇における明確な用法差は観察されないが, 待遇の範疇においては -toru が聞き手に対する配慮の語用論的用法を持つため, 待遇価は, -jaru = -taru >> -toru の順になる。また, 南牟婁方言では, タルの意味拡張が生じており, 高年層から若年層にかけて, 結果から進行を表す意味を獲得している。それと並行的に, トルの意味拡張も生じており, 高年層から若年層にかけて, 進行から結果を表す意味を獲得している。

## 5. まとめと展望

和歌山県・三重県の南部方言では、元来は、存在動詞アルを語源とするヤルとタルが進行と結果のアスペクトを区別していたが、存在動詞オル・イルを語源とするトルとテルが既に定着している。また、和歌山県紀南方言のテルと三重県南牟婁方言のトルは High の用法を持つため、当該方言における非伝統形式であると考えられる。本研究の調査データは、テルとトルは、言語接触によって当該方言の外側から導入される場合があると分析する立場を支持するものである。また、伝統形式と非伝統形式の対立が、High・Low に基づいた語用論的用法を生じさせる可能性を示唆している。これについては、進行・結果のようなアスペクトと配慮・ぞんざいのような待遇との間に意味的連続性がないことも踏まえ、引き続き検討していく必要がある。

一方で、和歌山県紀南方言のトルについては、ぞんざいの用法を持つため、隣接する大阪方言において同じ用法を持つトルが導入されたと分析するのは自然であるが、配慮の用法を持つトルについては、単なる近隣方言からの導入ではないことが示唆される。今後、言語地理学の観点から、より詳細な分析を行っていく必要がある。

最後に、トルへの一本化については、トルの意味拡張に限らず、言語接触による非伝統形式の導入も関係していると考えるが、元来の音形が -toru である方言においては、分析が困難である。(9)は岡山県岡山市方言の発話例である。

- (9) a. タロー イマ ハシリョール / ハシットル  
taroo ima hasir-jooru. / hasit-toru.  
太郎 今 走る-PROG.NPST / 走る-PROG.NPST  
「太郎 (は) 今、走っている。」
- b. タロー モー ハシットル /\*ハシリョール  
taroo moo hasit-toru.  
太郎 もう 走る-RES.NPST  
「太郎 (は) もう、走り終えている。」

(9)は、進行の意味に -jooru, -toru, 結果の意味に -toru が対応することを示している。各形式が機能的に重複するとき、アスペクトの範疇における明確な用法差は観察されないが、待遇の範疇においては -toru が聞き手に対する配慮の語用論的用法を持つため、待遇価は、-jooru >> -toru の順になる。しかし、岡山県岡山市方言には、元来より -toru が存在しているため、進行を表す -toru が、意味拡張によって生じたものか言語接触によって生じたものを区別することは困難である。これについては、方法論の構築も含め、引き続き研究していく必要がある。

### 謝辞

- ・本研究に快くご協力いただいたインフォーマントの皆様に感謝申し上げます。
- ・本研究は、JSPS 科研費 JP23KJ2152 と JP25K16299 の助成を受けています。

### 略号

NPST: non-past (非過去)

PROG: progressive (進行相)

RES: resultative (結果相)

## 参考文献

- Bybee, Joan L, Revere Perkins & William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. University of Chicago Press.
- 江川克弘・井上博文 (1994) 「和歌山市方言のAspect」『方言資料叢刊』4, pp.170-177.
- 平山輝男 (2000) 『三重県のことば』明治書院.
- 井上文子 (1998) 『日本語方言Aspectの動態－存在型表現形式に焦点をあてて－』秋山書店.
- 岸江信介 (1994) 「和歌山県日高郡美浜町のAspect」『方言資料叢刊』4, pp.164-169.
- 岸江信介 (2013) 「紀伊半島沿岸におけるAspect表現の変異」『都市と周縁のことば－紀伊半島沿岸グロットグラム－』 pp.31-61.
- 工藤真由美 (1998) 「西日本諸方言と一般Aspect論」『言語』27, pp.34-40.
- 工藤真由美 (1999) 「西日本諸方言におけるAspect対立の動態」『阪大日本語研究』11, pp.1 - 17.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・Aspect論』ひつじ書房.
- 村内英一 (1982) 「和歌山県の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』 pp.171-193
- Narrog, Heiko (2005) Modality, mood, and change of modal meanings: A new perspective. *Cognitive Linguistics* 16 (4), pp.677 - 731.
- Narrog, Heiko (2012) *Modality, Subjectivity, and Semantic Change: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press.
- 大野仁美 (2017) 「若年層による南紀方言のAspect形式の使用とその理解」『言語と文明』15, pp.113-123.
- 真田信治 (2007) 「発話スタイルと方言」『シリーズ方言学3－方言の機能－』 pp.1-25.

## 《方言関係新刊書目》(121号につづく)

国立国語研究所研究図書室が2025年10月以降に受け入れた図書の中から、2019年以降の刊行物を選びました。なお、同図書室目録に未記載の文献でも、内容を確認したものは掲載しました。

お気づきの点は、日本方言研究会事務局

〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-33 岩手大学教育学部国語教育科 気付

hougen-jim@e-mail.jp

までお知らせください。

### ▼徳之島民話事典：上

本田碩孝編，郷土文化研究会，496p-21cm. 2019(R01)年08月

### ▼徳之島民話事典：下

本田碩孝編，郷土文化研究会，503p-21cm. 2019(R01)年08月

### ▼いずみ(伊豆味)くとうばたんごちょう：本部町編（初級）

むとうぶくとうば単語帳編集委員会編，仲程蓮[ほか]イラスト，沖縄県しまくとうば普及センター，133p+挿図+地図-19cm. 2020(R02)年03月

### ▼ぐしちん(具志堅)くとうばたんごちょう：本部町編（初級）

むとうぶくとうば単語帳編集委員会編，仲程蓮[ほか]イラスト，沖縄県しまくとうば普及センター，133p+挿図+地図-19cm. 2020(R02)年03月

### ▼黄金の花：やえやま民話

しうまむに伝承研究会編，沖縄県しまくとうば普及センター(沖縄県文化協会)，27p-21×30cm. 2020(R02)年03月

### ▼さちむとうぶ(崎本部)くとうばたんごちょう：本部町編（初級）

むとうぶくとうば単語帳編集委員会編，仲程蓮[ほか]イラスト，沖縄県しまくとうば普及センター，133p+挿図+地図-19cm. 2020(R02)年03月

### ▼猿の生き肝：やえやま民話

しうまむに伝承研究会編，沖縄県しまくとうば普及センター(沖縄県文化協会)，20p-21×30cm. 2020(R02)年03月

### ▼しーく(瀬底)くとうばたんごちょう：本部町編（初級）

むとうぶくとうば単語帳編集委員会編，仲程蓮[ほか]イラスト，沖縄県しまくとうば普及センター，133p+挿図+地図-19cm. 2020(R02)年03月

### ▼とうぐち(渡久地)くとうばたんごちょう：本部町編（初級）

むとうぶくとうば単語帳編集委員会編，仲程蓮[ほか]イラスト，沖縄県しまくとうば普及センター，133p+挿図+地図-19cm. 2020(R02)年03月

### ▼ぬふぁ(伊野波)くとうばたんごちょう：本部町編（初級）

むとうぶくとうば単語帳編集委員会編，仲程蓮[ほか]イラスト，沖縄県しまくとうば普及センター，133p+挿図+地図-19cm. 2020(R02)年03月

### ▼童謡・わらべうたの言葉とこころ

若井勲夫著，勉誠出版，222p+挿図-19cm. 2020(R02)年07月

### ▼しまくとうば単語帳：6級中南部言葉編

しまくとうば検定検討委員会，沖縄県しまくとうば普及センター編集，沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課，153p+地図-19cm. 2020(R02)年11月

### ▼クラーとうカーラカンジャー：すずめとかわせみ：おきなわのみんな

沖縄県しまくとうば普及センター，中城村文化協会うちなーぐち部会編，沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課，23p-21×30cm. 2021(R03)年03月

- ▼ユフアラーとガラサー：赤しょうびんとカラス：おきなわのみんな  
 沖縄県しまくとぅば普及センター, 中城村文化協会うちなーぐち部会編集, 比嘉美代子文・絵, 吉本初枝しまくとぅば  
 訳, 沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課, 34p-21×30cm. 2021(R03)年03月
- ▼わたおばーがばなし(仲尾次言葉)：わたしのおばーのはなし  
 沖縄県しまくとぅば普及センター, 今帰仁村文化協会しまくとぅばで遊ぼう会編, 沖縄県文化観光スポーツ部文化振  
 興課, 26p-21×30cm. 2021(R03)年03月
- ▼子どものことばとうたの結びつきに関する研究：自発的歌唱の音声分析に基づく考察  
 坂井康子著, 風間書房, viii+183p-22cm. 2022(R04)年02月
- ▼中国東北官話母語話者における日本語促音の知覚に関する研究  
 辛穎著, 日本文化・学術出版, 12+238p+挿図-23cm. 2023(R05)年06月
- ▼教養としてのラジオ用語辞典  
 薬師神亮, 手島伸英著, ラジロマニア編, 三オブックス, 319p-19cm. 2024(R06)年03月
- ▼ゴシック&ロリータ語辞典：ゴス・ロリにまつわる言葉をイラストと豆知識で甘くデカダンに読み解く  
 鈴木真理子編著, 誠文堂新光社, 192p+挿図-21cm. 2024(R06)年07月
- ▼ご当地珍名見つけ隊：高信先生の全国行脚関東編  
 高信幸男著, 恒春閣, 95p+挿図-19cm. 2024(R06)年07月
- ▼いちばんやさしい手話  
 南瑠霞著, 永岡書店, 223p+挿図-21cm. 2024(R06)年08月
- ▼日常語の音響的世界：中舌母音について  
 今石元久[著], 広島音声言語研究所, 2+185p+挿図+地図-30cm+ビデオディスク3枚. 2024(R06)年09月
- ▼Languages of minority : orality, translation, and desiring English  
 Sowmya Dechamma CC, Oxford : Oxford University Press, vii+173pages-23cm. 2024(R06)年11月
- ▼社会语言学視域下の漢日语言对比研究  
 李蕊著, 昆明：云南人民出版社, 3+2+239p-24cm. 2024(R06)年11月
- ▼はじめならうちなーぐち  
 宮良信詳著, 榕樹書林, iii+108p-26cm. 2025(R07)年02月
- ▼石川県と富山県の境界地帯の言語  
 洞庭由美子調査・文章, 寺本印刷, 207p+挿図-30cm. 2025(R07)年04月
- ▼奄美シマウタと郷土教育：学ばれる「地域文化」  
 杉浦ちなみ著, 七月社, 339p-22cm. 2025(R07)年06月
- ▼Stereotypes and scripts : how language shapes and resists expectations  
 Samia Hesni, NewYork : Oxford University Press, xiv+149pages-24cm. 2025(R07)年07月
- ▼ご当地珍名見つけ隊：高信先生の全国行脚 北海道・東北編  
 高信幸男著, 恒春閣, 95p+挿図-19cm. 2025(R07)年07月
- ▼復刻えらぶよろん民謡辞典  
 久保けんお著, 南方新社, x+241p-21cm. 2025(R07)年07月
- ▼柳田國男の名著を読む：変革と保守の民俗学  
 小野耕資, 彩流社, 231p+挿図-19cm. 2025(R07)年07月
- ▼青森県 日本列島アイヌ語地名ノート：1  
 榊原正文[編集者], 北海道出版企画センター, 346p-21cm. 2025(R07)年08月
- ▼イキでイナセな江戸ことば  
 柳亭左龍[著], 三笠書房, 326p-15cm. 2025(R07)年08月

- ▼田舎の思考を知らずして、地方を語ることなかれ：過疎地域から考える日本の未来（光文社新書 1373）  
花房尚作[著]，光文社，300p+挿図-18cm. 2025 (R07) 年 08 月
- ▼上方落語に見る江戸明治期の社会とことば（龍谷大学国際社会文化研究所叢書：第 36 巻）  
角岡賢一著，くろしお出版，vii+333p-21cm. 2025 (R07) 年 08 月
- ▼調査の論理（データの科学の新領域 2）  
松本渉編，勁草書房，viii+252+xxvii+挿図-20cm. 2025 (R07) 年 08 月
- ▼富山の食と日本海  
秋道智彌，中井精一，経沢信弘編，桂書房，201p+挿図+地図-26cm. 2025 (R07) 年 08 月
- ▼日本語における「ほめ」表現に関する通時的研究  
畢文涛著，駿河台出版社，173p+挿図-30cm. 2025 (R07) 年 08 月
- ▼まるっと大分弁俳句  
豊國隆信著，文芸社，111p+挿図(カラー)-19cm. 2025 (R07) 年 08 月
- ▼Comparative and dialectal approaches to analogy : inflection in Romance and beyond  
Edited by Xavier Bach, Louise Esher, Sascha Gaglia, New York : Oxford University Press, xvi+290pages+illustrations-24cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼Linguistics and oral history : towards an interdisciplinary approach  
Edited by Chris Fitzgerald, London : Bloomsbury Academic, xi+254pages-24cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼異文化接触時評：敗戦と「日本語放棄」の覚悟  
大谷泰照[著]，東信堂，v+142p-21cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼オーストロネシア語圏の言語文化：環太平洋言語圏の一言語としての日本語  
河崎靖[著]，松籟社，169p-21cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼危険な言語：エスペラント弾圧と迫害の歴史  
ウルリッヒ・リンス[著]，石川尚志[ほか]訳，国書刊行会，380+109p+図版 24p-22cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼ことばに潜むジェンダー：学校・本・テレビ・日常のなかのもやもや  
遠藤織枝編著，明石書店，291+ixp+挿図-19cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼信州ふるさとのことば：増補版  
小池博子著，八十二文化財団，317p+挿図+地図-21cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼姫路市域あそびうた分布地図 2005  
辻元沙矢香，都染直也編，甲南大学方言研究会都染直也，ii+110p+挿図+地図-26cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼兵庫県旧明石郡西部・中部(明石市・神戸市西区)言語地図  
田尻弘一郎，都染直也編，甲南大学方言研究会都染直也，i+120p+挿図+地図-26cm. 2025 (R07) 年 09 月
- ▼異文化へのまなざし：言語・コミュニケーション・文化を学ぶ  
井上幸孝，根岸徹郎，鈴木健郎編，三修社，219p+挿図+地図-21cm. 2025 (R07) 年 10 月
- ▼「女ことば」「男ことば」を越えて：日本語のジェンダー研究の新たな地平  
森山由紀子，加藤大鶴編，ひつじ書房，ix+392p+挿図-21cm. 2025 (R07) 年 10 月
- ▼言語研究に潜む英語のバイアス  
大谷直輝[ほか]編，ひつじ書房，x+343p+挿図-22cm. 2025 (R07) 年 10 月
- ▼地名はどのように決まるのか：国連による「地名の標準化」と日本の課題  
春山成子，田邊裕編，古今書院，iv+250p+図版 1 枚+挿図+地図-21cm. 2025 (R07) 年 10 月
- ▼長岡弁 新潟県長岡市長岡地域の方言：改訂 3 版  
長谷川利典著，ILOVENAGAOKA. JP，142p-21cm. 2025 (R07) 年 10 月
- ▼八重山のアイナーと宮古のアンナ：台湾諸語等との関係を探る  
津波高志[著]，七月社，190p-19cm. 2025 (R07) 年 10 月

- ▼「家」に探る苗字となまえ  
井戸田博史[著], 吉川弘文館, 218p+挿図-19cm. 2025 (R07)年 11 月
- ▼移動する子どもたちのことばの教育：多様なアクターによる母語・継承語教育の現在と未来  
田中雅子, 坂本光代編著, 明石書店, 209p+挿図-21cm. 2025 (R07)年 11 月
- ▼語用論的方言学の始動  
小林隆, 中西太郎, 津田智史編, ひつじ書房, xi+635p+挿図-22cm. 2025 (R07)年 11 月
- ▼新しい手話：わたしたちの手話 2026  
全日本ろうあ連盟出版・事業委員会企画・編集, 全日本ろうあ連盟, 95p+挿図-21cm. 2025 (R07)年 12 月
- ▼江戸艶語 (インターナショナル新書 166)  
山口謠司[著], 集英社インターナショナル, 200p+挿図-18cm. 2025 (R07)年 12 月
- ▼逆使役関連形態法の広がり  
佐々木冠編著, 白岩広行[ほか]著, くろしお出版, ix+192p-22cm. 2025 (R07)年 12 月
- ▼言葉の歴史を復元する：フィールドと文献からのアプローチ  
吉田和彦編, 松香堂書店, iii+86p+挿図+地図-25cm. 2025 (R07)年 12 月
- ▼瞬解!デザイン用語図鑑  
ingectar-e 著, 日本文芸社, 223p+挿図-21cm. 2025 (R07)年 12 月
- ▼日本語文法研究の射程：テキスト・文体・文学との交差  
近藤泰弘, 澤田淳編, 開拓社, x+440p+挿図-21cm. 2025 (R07)年 12 月
- ▼翻訳から広がる日本語：女ことば・男ことば・疑似方言  
中村桃子[著], 白澤社, 230p+挿図-19cm. 2025 (R07)年 12 月
- ▼歴史地理学事典  
歴史地理学会編, 丸善出版, xix+555p+挿図-22cm. 2025 (R07)年 12 月
- ▼Language change : theoretical and empirical perspectives  
Elitzur A. Bar-Asher Siegal[and three others], editors, Cham : Springer, viii+459pages+illustrations-24cm. 2026 (R08)年 01 月
- ▼あいうえおここ：金沢ことば  
徳沢愛子著, 能登印刷出版部, 69p+挿図-15×21cm. 2026 (R08)年 01 月
- ▼鹿児島弁：薩摩半島 大隅半島 奄美大島 徳之島 屋久島 種子島 甌島  
末吉順治著, 風媒社, 410p-19×26cm. 2026 (R08)年 01 月
- ▼グループ・ダイナミックス事典  
日本グループ・ダイナミックス学会編, 丸善出版, xvii+435p+挿図-22cm. 2026 (R08)年 01 月
- ▼最新差別語・不快語：改訂新版  
小林健治著, にんげん出版, 381p+挿図-21cm. 2026 (R08)年 01 月
- ▼須坂のことば：須坂市方言集成  
上田短期大学総合文化学科 2 年大橋ゼミ編, 上田短期大学大橋研究室, iii+149p-30cm. 2026 (R08)年 01 月
- ▼ソーシャルメディア時代の人間行動 (中央大学政策文化総合研究所研究叢書 34)  
松野良一編著, 中央大学出版部, x+248p+挿図-22cm. 2026 (R08)年 01 月
- ▼宮本常一：民俗学を超えて (岩波新書：新赤版 2096)  
木村哲也[著], 岩波書店, iv+242p+挿図+肖像+地図-18cm. 2026 (R08)年 01 月
- ▼A. タタリノフ著『レクシコン』による日本語研究 (研究叢書 584)  
江口泰生著, 和泉書院, 345p-22cm. 2026 (R08)年 02 月
- ▼ある言語学者の事件簿  
谷口ジョイ著, くろしお出版, 238p-19cm. 2026 (R08)年 02 月

- ▼荷田春満と日本語音調史の研究（ひつじ研究叢書(言語編)第219巻)  
中村明裕著，ひつじ書房，447p-22cm. 2026(R08)年02月
- ▼國語史研究の周邊（築島裕著作集第8巻）  
築島裕著，汲古書院，8+571p+図版8p+挿図+肖像+地図-22cm. 2026(R08)年02月
- ▼戦後の国語学者の国語教育論  
吉田雅昭著，ひつじ書房，xiii+249p-22cm. 2026(R08)年02月
- ▼日本語韻律の音声的特徴とその習得  
林良子編，阿部新[ほか]著，ひつじ書房，vii+404p-22cm. 2026(R08)年02月
- ▼ことばにまつわるエトセトラ：方言、流行語、カタカナ語…  
桑本裕二著，山陰中央新報社，154p-18cm. 2026(R08)年03月
- ▼ことばの探求2025：地域のことば・家族のことば・時代のことば（甲南大学リカレント教育センター人生100年時代の学びプログラム社会言語系「自分自身のことばを見つめ直す」成果報告書2(2025年度)）  
都染直也編，都染直也，172p-26cm. 2026(R08)年03月
- ▼全国方言文法辞典資料集10：使役・受身・自発・可能（科学研究費補助金(基盤研究A)研究成果報告）  
方言文法研究会編，[方言文法研究会]，150p+地図-30cm. 2026(R08)年03月
- ▼福井県の方言集やでの一  
かっちゃんま弁研究会編，かっちゃんま弁研究会，4+128p+挿図-30cm. 2026(R08)年03月

(担当：山岡華菜子)

## 2025 年度方言関係博士論文・修士論文・卒業論文一覧

各大学からの情報提供により、2025 年度の方言関係の博士論文・修士論文・卒業論文の題目などを掲載します。大学名は 50 音順です。今後とも積極的な情報提供をお願いいたします。

### ■博士論文■

【オックスフォード大学アジア・中東研究学部】

- Learning the Kansai Dialect: Authenticity and Speaker Legitimacy of A Regional Dialect in Contemporary Japan (Yao Sun/孫瑶) [博士学位申請中]

This thesis presents a sociolinguistic investigation into the acquisition and ideological negotiation of the Kansai dialect as an imagined and enregistered regional language in contemporary Japan. While previous studies have explored the diffusion and perception of Japanese dialects, this research is the first to examine the emerging figure of aspiring new speakers who are native speakers of Japanese who actively seek to acquire the Kansai dialect through informal learning, paid online lessons, and self-directed engagement with regional language practices. Central to this study is the concept of Ese-Kansai Dialect (EKD), a stigmatised and socially policed form of stylised Kansai speech. The widespread critique of EKD reveals underlying ideologies concerning speaker legitimacy, regional belonging, and linguistic authority.

The research adopts a multi-method approach combining ethnographic fieldwork, participant observation, discourse analysis, and semi-structured interviews. Fieldwork was conducted in an underexamined site of language socialisation: online Kansai dialect lessons delivered through a commercial learning platform. This setting provides rare access to learners' linguistic aspirations and the commodification of dialect in everyday interaction. Supplementary data include learning materials, social media discourse, and learner reflections, which together illuminate the processes through which dialect speakerhood is imagined, contested, and negotiated.

By shifting the analytical focus from native dialect speakers to those who aspire to dialect competence, the thesis contributes new theoretical and empirical insights to the study of linguistic authenticity, enregisterment, and language learning in late modern Japan. It challenges essentialist assumptions about dialect ownership and proposes an expanded framework for understanding regional language vitality in an age shaped by mobility, digital communication, and linguistic commodification.

### ■修士論文■

【金沢大学大学院人間社会環境研究科・博士前期課程・人文学専攻】

- 愛知県諸方言における形容詞アクセントの変化について（水野大輔）

愛知県下の三地域の生抜き若年層（大学生）における形容詞アクセントの二類の統合状況を調査・分析した。その変化過程が、より古い段階を示す東三河、次に西三河、そして尾張という地理的違いに現れていることを明らかにした。

また、東京方言等で従来指摘の、終止形に対し連体形が区別をより保つとする点について、当該方言では、同じ終止形でも「と思う」を付した場合に、文末の終止形より区別を保持する傾向にあることを明らかにした。

【國學院大學大学院文学研究科】

- 北海道道南方言の研究 —中村純三版『江差の繁次郎』を題材に—（玉田桜子）

本論文は中村純三著『江差の繁次郎』を手掛かりとした昭和前期道南方言の様相の解明と、当該資料の方

言資料性の検討を目的とした。音声・文法的特徴の網羅的記述に加え、終助詞「バ」について用法の記述を行った。さらに江差町で実施した質問面接調査との対照から、資料中の主だった道南方言が現代道南方言において保持されているかを確認した。以上により、当該資料は道南方言を反映する資料として一定の価値を持つと結論付けた。

#### 【東北大学大学院文学研究科】

##### ○ 学校教育と言語多様性—— 宮城県における方言教育の有効性 —— (王純)

本研究は、宮城県における中学校段階の方言教育の有効性およびその実践可能性を検証することを目的としたものである。そのために、既存方言教材の分析に加え、教育専門家・現地教員へのインタビューおよび女川町における方言調査を通して、教育現場の課題と地域の言語意識を把握した。さらに、これらの知見を踏まえ、中学校段階を想定した方言教材を開発した。その結果、宮城県では体系的な方言教材の不足や授業条件の制約が課題であることが明らかとなった。以上を踏まえ、開発した教材の有効性と導入可能性について検討し、言語多様性の理解と場面に応じた言語選択能力の育成に資する方言教育の実践可能性を示した。

##### ○ 接辞による方言動詞の派生についての研究 (田形周造)

本論文は、(i)『日本方言大辞典』から方言カス型動詞を収集し、分布傾向や、派生パターン等を、(ii)臨地調査からカス型動詞用法を把握し、接尾辞の働きや、その役割を明らかにしたものである。その結果、(I)東北・九州・中部地方は、派生元とする動詞がそれぞれ無対自動詞、有対動詞、無対他動詞優勢の傾向があること、(II)接尾辞の働きとして宮城県牡鹿郡女川町では格増加と意図性の強調、静岡県静岡市葵区井川では格増加と結果性の付与が確認できた。

##### ○ 形容詞活用体系の動態に関する研究—東北方言を対象に— (中川葉月)

本研究は、東北方言の形容詞活用体系の成立メカニズムを明らかにすることを目的とする。東北 6 地点において形容詞活用形の網羅的な調査を行い、各地 100 項目を超えるデータを得た。これらのデータを用いて、内的再建および比較方言学的手法から、活用形・活用体系の変化の過程を考察し、〈融合形語幹化〉〈拡大接辞化〉〈旧来終止形語幹化〉〈語幹接続化〉などの多様な現象を認めた。また、それらの現象は、多様である一方で、「変異の発生」と「統合による安定化」のプロセスとして説明できるという共通点を見出した。

### ■ 卒業論文 ■

#### 【岩手大学教育学部】

##### ○ 方言「あめる」の地理的分布と意味：現代話者の意識調査から (五十嵐麻央)

##### ○ 東北地方における助詞「サ」の用法：若年層を対象とした意識調査を中心に (岡本光世)

#### 【大阪大学文学部人文学科日本語学専修】

##### ○ 大阪方言における待遇表現形式ハルの記述的研究 (小倉大慈)

本研究では、大阪方言の待遇表現形式ハルを取り上げ、形態・統語的環境の整理から、当該方言のハルについて総合的に記述することを目指した。その結果、当該方言のハルには無標形式-(i)har-と有標形式-ahar-の 2 種類があり、これらは心理的距離や非難を表明する語用論的效果によって弁別されることがわかった。また生起環境については、待遇素材が非ガ格をとることを許容しないなど、標準語の待遇表現形式とは異なる特徴も見られた。

- 名古屋方言オノマトペに対する認識と社会的背景の関係—名古屋方言域で言語形成期を過ぎた若年層を対象として—（千賀彩加）
- 京都における皮肉表現の分析—ドキュメンタリードラマを対象に—（守田咲）
- 兵庫県加古川市方言における上向き待遇表現の記述的研究 —テ敬語とハル敬語の使い分けに注目して—（鷲尾光）

【九州大学文学部人文科学府言語学・応用言語学研究室】

- 福岡市博多方言の自然談話資料（木下航）
- 日琉諸語におけるコピュラと格助詞生起の方言差について（福島孝太）
- 遠州方言（静岡県袋井市）の言語ドキュメンテーションの試み—電子語彙集の作成—（松井文音）
- 大分県豊後大野市方言におけるとりたて助詞/Nzjoo/（松尾清加）

【慶應義塾大学文学部国文学専攻】

- ドクダミ・ジュウヤク語史考 —文献国語史と方言国語史の対照—（相澤侑我）  
文献に基づく語史と方言地理学的推定による語史の対照研究が前田富棋、小林隆などによって試みられてきた。本論文は「どくだみ」の語史を文献から検討し、方言分布図と対照してより総合的な語史の編纂を目指すものである。文献調査によってドクダミ形とジュウヤク形の新古関係を明らかにし、文献ジャンル別にそれぞれの頻出度や優劣を比較することで、江戸本草学の発達や上方から江戸への中央語東進現象が語史に及ぼす影響を考証した。

【國學院大學文学部日本文学科】

- 郡山方言のあいづち表現「だから」と類似表現の共通点と相違点（大越涼香）
- 山口県岩国市方言の形容詞の語彙体系（兼松美泉）
- 関西方言における敬語について（河原望恵）
- 兵庫県神戸市方言について—自然会話に基づくヨル系・トル系アスペクト形式の使用実態—（児島若奈）
- 新潟県下越地方における苦痛・疲労を表す表現に関する研究（千賀いづみ）
- 宮崎県串間方言における「ダンゴ」の意味について（原彩伽里）
- 栃木県鹿沼市方言の世代差について（横田和子）

（2024 年度）

- 長崎県大村市方言の研究（大久保一弥）
- 栃木県方言の発話速度に関する研究（金子萌笑）

- 現代の大阪方言について（笹記宏太）
- 宮古島における世代別方言残存状況（下地心也）
- 神奈川県方言における「ジャン」の用法（藺口千夏）
- 栃木県小山市方言のアクセント変化（館野愛奈）
- 新潟県燕市方言の研究（名地明日磨）
- 山口県下関市方言と福岡県北九州市方言のAspect表現の対照研究（橋本龍一）
- 神奈川県湘南方言の「べ」の用法について（望月友慈）
- 静岡方言文末詞「ケ」の用法の変化と使用状況について（吉田愛梨）
- 京都市方言における待遇表現について—「ハル敬語」の非情物に対する用法—（吉田一葉）

【島根大学法文学部言語文化学科】

- 長崎県長崎市方言の動詞活用体系（河波陽生）  
長崎県長崎市における動詞の活用体系を述べたものである。主に二段型の残存と、ラ行五段化の現れ方について次のように述べた。旧上二段型動詞は数語を除いて、一段化して現れ、意志形、否定形、使役形ではラ行五段化して現れていること。旧下二段動詞の多くは現在も断定非過去形、意志形、禁止形に強く残り、仮定形は一部に残っていること。また断定非過去形の二段型の現れ方は、食べる「ダブル」ではなく促音化して「タブッ」のようにどの語も現れるためラ行五段化との関係も考察した。

【信州大学人文学部人文学科】

- 静岡市を中心とした静岡県下における「を」の発音の実態調査（鶴岡芽依）

【中京大学文学部言語表現学科】

- 三重県北勢地域方言における否定辞の使用実態と家族三世代間の比較（岡田理紗子）
- 関西方言と首都圏方言の自己認識と他者評価（岡本亜萌）
- 愛知県小牧市方言の実態—名古屋市方言との比較を通して—（黒田陸人）
- 奈良県方言における育児語の実態（網本心笑）
- 伊勢市方言における終助詞の記述的研究（森田航太郎）
- 首都圏方言と東三河方言における文末詞ジャンの比較（渡辺紗羽）

【東京海洋大学海洋生命科学部海洋政策文化学科】

○ 自治体アンテナショップの商品における方言使用—言語的・地域的・商品分類別傾向— (田崎璃音)

本研究は、東京都内のアンテナショップ 29 店舗を対象に、方言使用製品の実態と使用傾向を明らかにした。商品名やパッケージに方言がみられる約 700 点を収集し、地域分類、品詞分類および商品分類に基づき分析した結果、九州・東北で方言使用が多く、品詞では名詞・固有名詞・助詞が多かった。商品分類では紙製品、菓子類、野菜つけ物、アルコール飲料で顕著であり、方言が商品イメージとして広く取り入れられていることが示唆された。

【東京大学文学部人文学科日本語日本文学（国語学）専修課程】

○ 「三河弁」はどのように語られてきたか (鈴木理都)

国立国会図書館デジタルコレクション (NDLDC) を用い、三河弁 (愛知県三河地方の言語変種) についての言説分析を行った。1980 年代まで、三河弁が標準語の由来であるとの説がさかんであったことなどを明らかにした。

【東北大学文学部】

○ 商業的に活用される新潟方言に関する方言意識 (角田航平)

○ 白河市を中心とした福島県中通り方言の「チャ」に関する研究 (百束綾乃)

本論文では、福島県中通り方言の「チャ」という言葉について、どのような用法で用いられるのか、また性別や年代などにより使用に差がみられるかについて、福島県白河市を中心とした対面調査とアンケート調査をもとに分析した。

調査の結果、「チャ」は「定義 (解釈) 説明」「気づき・知覚内容を述べる」「疑問」「話し手にとっての事実・認識内容を述べる」「否定 (主に「(前接要素) ッチャアンマイ」という定型句で実現)」用法に分類され、性差や年齢差はあまりみられないことが分かった。

○ 組分けじゃんけんを中心とした遊びのことばの差異と変化に関する研究—三重・愛知県境地域を対象に— (水谷亮翔)

本論文は、三重・愛知県境地域における組分けじゃんけんの差異の記述と変化要因の分析を目的とし、両県の中高生・成人を対象に、組分けの掛け声や、他の語形の印象等を調査した。地域間で語形や手の組合せに差が見られ、調査の少ない三重県側の掛け声の実態 (「グッピーデオータモノドーシ」など) と、その語形変化 (デオータモノ > ドトモン > ドコモン など) に伴う意味意識の薄れを明らかにした。また、他の掛け声の容認性は語形等の差に応じて変化し、進学等に伴う接触を契機とした受容が生じることが確認された。

○ 宮城県方言における文末詞「ワ」—塩竈市を中心として— (丸岡凜香)

本研究では、塩竈市方言の文末詞「ワ」について、承接可能な終助詞・モダリティ表現、心的態度、地域差の観点から検討した。その結果、「ワ」は話し手の期待・予測と事態認識とのずれを背景に用いられる点で、山形市方言の「ハ」と共通する用法を有することが確認された。一方で、心的態度の解釈は文脈に依存することが明らかとなった。さらに、山形市と塩竈市の間に位置する色麻町においても「ワ」が優勢であり、用法は塩竈市と大きく異なることが示された。

○ 全国自治体ホームページにおける言語サービスの研究 (山中蒼吾)

#### 【日本大学文理学部国文学科】

##### ○ 少年漫画に登場する関西弁キャラクター（五十嵐祥太）

2010年から2024年に『週刊少年ジャンプ』に連載された作品に登場する関西弁キャラクターの台詞を分析した。関西弁キャラクター全体の非標準語平均使用率は約22%、男性キャラクターは約22%、女性キャラクターでは約26%と、女性キャラクターに非標準語使用率が高いことがわかった。出現した語彙の上位は文末表現と人称詞で占められる。少年漫画の関西弁は、役割語としての〈関西弁〉が主たる資源となっていることが確認された。

#### 【福岡教育大学教育学部中等教育教員養成課程（国語）】

##### ○ 原因・理由の接続助詞の終助詞化——福岡市方言「ケン」・玖珠方言「キ」の例から——（増田実桜）

接続助詞カラは、「百点だったカラ嬉しい。」のように文と文の間で使われる。もし「百点だったカラ。」と文末で使うと、聞き手は『凄いだろう』等の言外の意味を汲み取る。だが、カラ相当の福岡市方言のケンと大分県玖珠方言のキは、文末で使っても言外の意味が生じない。ケン聞き手の知らない情報を伝える際に「百点やったケン。」（10,20,50代）、キは聞き手の想定を改める情報を伝える際に「百点やったキ。」（60代）と使える。

#### 【別府大学文学部国際言語・文化学科】

##### ○ 「大分方言」におけるラ行五段活用化の研究（岩崎壘）

##### ○ 熊本市方言におけるパイとタイの違い（川部健太）

##### ○ 熊本方言の感動詞「ばっ」（山代智也）

#### 【宮城教育大学教育学部】

##### ○ 宮城県涌谷町方言における音韻の研究（伊藤冴香）

##### ○ 若者の方言意識に関する研究（野坂明李）

##### ○ 三陸地方南部の方言「～するようだ」の研究（水上雄介）

#### 【立正大学文学部文学科】

##### ○ 日本語の起源はなぜ解明されないか——比較言語学的手法を通じて——（青木咲紅良）

日本語の起源がなぜ解明されないのか、アルタイ諸語、オーストロネシア語族、朝鮮語、琉球諸語と比較した先行研究を挙げて論じた。琉球諸語以外とは体系的な音韻対応が認めがたく、類似点も借用や偶然といった代替的説明を排除できない。比較言語学的手法には限界があるが、起源研究を忌避せず、限界を把握したうえで暫定的な成果も共有し、多角的な手法で建設的に議論することが重要である。

##### ○ 創作作品におけるキャラクターの言語使用（北村偉大）

アニメの方言話者キャラクター201人について分析したところ、2000年代までは方言イメージ、方言ステレオタイプを反映したキャラが多かったが、2010年代以降はその枠に捉われない設定のキャラクターが増えている。方言を地域ごとにみると、大阪弁はキャラクターの個性を強く特徴づける典型的な役割語としての

性格を持つが、他地域の方言はキャラクター言語と見なすのが適切である。

○ 消えゆく言語—宮古方言の現状と継承の取り組み—（砂川裕太郎）

宮古語が消滅危機に直面している要因を、先行研究や行政・地域団体の資料をもとに、家庭、教育、社会の3領域ごとに整理して分析した。そこには、家庭を基盤とした自然な継承が機能しなくなっている一方で、文化資源としての象徴的価値が高まっているという二重構造がある。現在の継承活動は一定の成果を持つが、日常的使用の回復は難しく、今後は実際に使用される場の再構築が課題である。

○ 高知県黒潮町における幡多弁の現在（浜中詠太）

黒潮町方言について、若年層話者が高年層、中年層、同じ若年層の話者と話す自然談話資料を約10分ずつ作成した。そのうえで、複数の「～達」のほか、標準語の助詞「～とか」「～とは」にあたる用法を持つ接尾辞「ラ（一）」を分析した。また、世代差として、若年層では関西弁や標準語の表現が多く見られる。標準語化には予測変換機能などを持つデジタル機器の使用が影響しているとも考えられる。

— お 知 ら せ —

〈次回のお知らせ〉

次回の第 123 回の研究発表会は、**2026 年 11 月 7 日（土）** オンラインにて開催の予定です。

〈発表募集〉

1. 応募資格・条件：方言研究に関心をお持ちの方なら、どなたでも応募することができます。研究発表は、日本語方言とその関連領域に関する未発表のものとし、1 題につき発表 30 分、質疑 20 分（予定）です。
2. 応募締切：**2026 年 8 月 7 日（金）** 必着
3. 応募書類：次の 2 点（A4 判用紙計 2 枚）をご提出ください。
  - a. 申込書：A4 判用紙 1 枚に、発表題目・氏名・所属・研究略歴・連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）を記載してください。
  - b. 発表要旨：冒頭に発表題目を記した上で、研究の目的・方法・結論を具体的に明記してください。氏名・所属は記載せず、本文においても応募者が特定できるような表現を避けてください。分量は、図表等込みで A4 判用紙 1 枚以内です。
4. 応募先と応募方法：下記連絡先①（研究発表会委員会）宛に、メールの添付ファイル（Microsoft Word もしくは PDF）でお送りください。その場合、特殊な記号を使うなど、文字化けが予想される場合には、プリントアウトしたものをスキャンした形で PDF ファイルをお送りください。
5. 応募可能数：筆頭発表者として応募できるのは 1 件です。応募書類の提出者を筆頭発表者として扱います。
6. その他：研究発表会委員会で審査の上、採否を決定します。採用決定後、発表題目、発表者名（連名発表の場合、氏名の順序も）は変更できません。採用された方には、**2026 年 10 月 4 日（日）**までに発表原稿集の原稿を提出していただきます。その他、詳細はホームページをご覧ください。

連絡先①

研究発表会委員会（委員長：佐々木冠）  
〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学大学院言語教育情報研究科気付  
hougen-happyou@e-mail.jp

連絡先②

事務局（総務委員長：竹田晃子）  
〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-33  
岩手大学教育学部国語教育科気付  
hougen-jim@e-mail.jp

日本方言研究会ホームページ <http://dialectology-jp.org/>

# Conference Papers of the Dialectological Circle of Japan

No. 122 (May 22, 2026), Ritsumeikan University

## Presentation

1. KATO Shui: Conditions on moraic nasalization in Northern Ryukyuan: Evidence from Shuri (Okinawan) and Yamatoma (Amami Ryukyuan)
2. SHIRATORI Shiori: Matsumoto-like complimentary distribution in Iki Hichiku and Proto-Japonesian defective verbs
3. NAKAMURA Akihiro: A *gairin*-like hypothesis of the proto-accent system of the Japonic languages
4. ONISHI Takuichiro: On the database of the “Butsuruishōko”
5. TAGATA Shuzo: Regional differences and diversity of usage in the derivation of *-kasu* type verbs: Focusing on fieldwork in Ikawa and Onagawa.
6. YASUI Kazue: Characteristics of negative auxiliary verbs in classical Kamigata *rakugo*: A comparative analysis of the *makura* and the main story
7. TANIGUCHI Joy, SHIBATA Kiryu, and YAMAGISHI Yuki: Usage and comprehension of the past-tense marker *ke* in the Shizuoka dialect: Gender, age, and regional variation
8. KAMOI Shuhei: The form *-toru*: A semantic extension and language-contact perspective